



* 0042431011 *

0042431-011

256. 1-143

明治以降教育制度発達史

教育史編纂会・編

竜吟社

第1至12卷

昭13至14

AHC

580



教育制度發達史

第十一卷



2564
143

以明治
降治
教育制度發達史 第十一卷 目次

第三編 新領土其他に於ける教育

第三章 臺灣の教育

第一款 臺灣歸屬後大正八年臺灣教育令制定に至るまで

第一項 概 説

第二項 初等普通教育

第一節 本島人に對する初等普通教育

第二節 内地人に對する初等普通教育

第三項 幼稚園

第四項 男子高等普通教育

第一節 本島人に對する男子高等普通教育

第二節 内地人に對する男子高等普通教育

目次

一
一
一
五九六
五九六
六〇八
六〇八
六二五
六二五
六二六
六二六
六二九

第五項 女子高等普通教育…………… 六三

 第一節 本島人に對する女子高等普通教育…………… 六四

 第二節 内地人に對する女子高等普通教育…………… 六五

第六項 專門教育…………… 六六

 第一節 本島人に對する專門教育…………… 六八

 第二節 内地人に對する專門教育…………… 六九

第七項 師範教育其他教員養成制度…………… 七〇

第八項 實業教育…………… 七一

 第一節 本島人に對する實業教育…………… 七二

 第二節 内地人に對する實業教育…………… 七三

第九項 盲啞教育…………… 七四

第十項 感化教育…………… 七五

第十一項 私立學校に對する監督…………… 七六

第十二項 教科用圖書…………… 七七

第十三項 學校衛生…………… 七八

第十四項 社會教育…………… 七九

第十五項 學校等職員關係…………… 八〇

第十六項 教育行政機關…………… 八一

 第一節 中央教育行政機關…………… 八二

 第二節 地方教育行政機關…………… 八三

第二款 大正八年臺灣教育令制定より大正十一年改正臺灣教育令制定に至るまで…………… 八四

 第一項 臺灣教育令の制定…………… 八五

 第二項 初等普通教育…………… 八六

 第一節 本島人に對する初等普通教育…………… 八七

 第二節 内地人に對する初等普通教育…………… 八八

 第三項 幼稚園…………… 八九

 第四項 男子高等普通教育…………… 九〇

 第一節 本島人に對する男子高等普通教育…………… 九一

 第二節 内地人に對する男子高等普通教育…………… 九二

 第五項 女子高等普通教育…………… 九三

 第一節 本島人に對する女子高等普通教育…………… 九四

 第二節 内地人に對する女子高等普通教育…………… 九五

第六項 專門教育……………八六三

 第一節 本島人に對する專門教育……………八六三

 第二節 内地人に對する專門教育……………八六三

第七項 師範教育其他教員養成制度……………八六三

 第一節 師範學校及師範科……………八六三

 第二節 委託生及留學生……………八六六

第八項 實業教育……………八六六

 第一節 本島人に對する實業教育……………八六六

 第二節 内地人に對する實業教育……………九〇一

第九項 盲啞教育……………九〇六

第十項 感化教育……………九〇六

第十一項 私立學校に對する監督……………九〇六

第十二項 教科用圖書……………九〇六

第十三項 學校衛生……………九〇六

第十四項 社會教育……………九〇五

第十五項 學校等職員關係……………九〇五

第十六項 教育行政機關……………一〇四三

 第一節 中央教育行政機關……………一〇四三

 第二節 地方教育行政機關……………一〇五二

第三款 大正十一年改正臺灣教育令制定より昭和七年末に至るまで……………一〇六七

 第一項 改正臺灣教育令の制定……………一〇六八

 第二項 初等普通教育……………一〇七四

 第三項 幼稚園……………一〇八四

 第四項 男子高等普通教育……………一〇八六

 第五項 女子高等普通教育……………一〇八五

 第六項 專門教育……………一〇三三

 第七項 大學教育附學位……………一〇七三

 第八項 師範教育其他教員養成制度……………一〇六八

 第九項 實業教育……………一〇三三

 第十項 學校教練の振作及青年訓練……………一〇六四

 第十一項 盲啞教育……………一〇七七

 第十二項 感化教育……………一〇八四

第十三項	私立學校に對する監督	一三八
第十四項	教科用圖書	一三九
第十五項	學校衛生	一四〇
第十六項	社會教育	一四〇
第十七項	學校等職員關係	一四〇
第十八項	教育行政機關	一四〇
第一節	中央教育行政機關	一四五
第二節	地方教育行政機關	一四六
第四款	特殊の教育施設	一五七

第十一卷 目次 終

第三章 臺灣の教育

第一款 臺灣歸屬後大正八年臺灣教育令制定に至るまで

第一項 概説

臺灣が清國の領土たりし時代の教育が如何なるものであつたかを簡単に述べると、臺灣人の大部分は對岸の支那各地より移住した者であり、從て清國の官憲は當時の清國の教育方法に依て臺灣人を教化して居たのである。即ち臺南、臺北、新竹、基隆、嘉義の五府に府儒學を置いて最高の學府とし、各縣に縣儒學を置き、各府縣には儒學の外に更に書院を設け、主として學生考試の機關とした。此外島内各地に義學、書房又は社學があつて専ら生徒教養の事に當つて居た。義學は自ら師を招き餘裕を得ざる有爲な貧家の子弟に登第の機會を與ふるが爲に特に設けられたもので、學資を徴することなく日々學習の便宜を與へたのであつた。課程は毎日三時とし朝は課誦、念書、晝は習字、作對、午後は教師直接講習に當つた。教科用書としては三字經、四書、五經、幼學群芳、聲律啓蒙、指南尺牘、唐詩、古文、左傳等を用ひて居た。書房及社學は其課程書院と大同小異であつた。



此の如く學校の制度は一通備はつて居たが、其内容は完備せず之に就學する者は少數であつて、住民の大多數は文字を解しなかつたのである。臺灣歸屬後に於ける同地の教育は其本島人に對するものたると、在留内地人に對するものたるとを問はず總て當初は國語學校を中樞として行はれ、漸次之より分派して各種教育機關の發達を見るに至つたやうな

譯であるので、此期に於ては各種教育に分別せず教育の全體に互て其變遷を見ることを便利とする。

臺灣は明治二十七八年日清戦役の結果、明治二十八年四月十七日批准を交換せられた日清講和條約に依り、我國の版圖に歸し、而して同條約に依れば臺灣人は明治三十年五月八日までに日本人となるや否を決すべきこととなつて居た。海軍大將樺山資紀が臺灣總督に任ぜられた。當時島民中には我統治に服せず干戈を弄して反抗を試みる者があり、之が討伐を必要とする際であつたので、軍政が布かれ、明治二十八年五月二十一日臺灣總督府假條例が制定せられ、民政に關しては民政局が設けられ其中に學務部も置かれたが、明治二十九年三月三十一日軍政が廢せられると共に勅令第八十八號を以て左の如く臺灣總督府條例が定められた。其第十四條には「總督府ニ民政軍務ノ二局ヲ置ク其ノ官制ハ別ニ之ヲ定ム」との規定があつた。

臺灣總督府條例

- 第一條 臺灣ニ臺灣總督ヲ置キ臺灣島及澎湖列島ヲ管轄セシム
- 第二條 總督ハ親任トス陸海軍大將若クハ中將ヲ以テ之ニ充ツ
- 第三條 總督ハ委任ノ範圍内ニ於テ陸海軍ヲ統率シ拓殖務大臣ノ監督ヲ承ケ諸般ノ政務ヲ統理ス
- 第四條 總督ハ主任ノ事務ニ付其ノ職權若クハ特別ノ委任ニ依リ總督府令ヲ發シ之ニ禁錮二十五日又ハ罰金二十五圓以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得
- 第五條 總督ハ其ノ管轄區域内ノ防備ノ事ヲ掌ル
- 第六條 總督ハ其ノ管轄區域内ノ安寧秩序ヲ保持スル爲ニ必要ト認ムルトキハ兵力ヲ使用スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ直ニ陸軍大臣海軍大臣拓殖務大臣參謀總長及海軍軍令部長ニ之ヲ報告スヘシ

第七條 總督ハ必要ト認ムル地域内ニ於テ其ノ地ノ守備隊長若クハ駐在武官ヲシテ民政事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得

第八條 總督ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任文官ノ進退ハ拓殖務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第九條 總督ハ知事ノ命令又ハ處分ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第十條 總督ハ拓殖務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ所部文官ノ級位級勳ヲ上奏ス

第十一條 總督ハ所部文官ヲ懲戒ス其ノ勅任官ニ係ルモノ竝ニ奏任官ノ免官ニ係ルモノハ拓殖務大臣ニ由リ内閣總理大臣ヲ經テ上奏シ其ノ他ハ之ヲ專行ス

第十二條 總督事故アルトキハ民政局長軍務局長ノ中官等高キ者其ノ職務ヲ代理ス

第十三條 總督府ニ總督官房ヲ置ク

總督官房ニ副官二人及專任祕書官二人ヲ置ク總督ノ命ヲ承ケ機密事務及文書ノ取扱ヲ掌ル

副官ハ陸海軍佐尉官ノ内各一人ヲ以テ之ニ充ツ

祕書官ハ奏任トス

第十四條 總督府ニ民政軍務ノ二局ヲ置ク其ノ官制ハ別ニ之ヲ定ム

附則

第十五條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

同日臺灣總督府條例第十四條に基き勅令第九十號を以て左の如く臺灣總督府民政局官制が定められた。

臺灣總督府民政局官制

第一條 臺灣總督府民政局ハ臺灣總督ノ管轄ニ屬スル行政及司法ニ關スル事務ヲ整理スル所トス

第二條 民政局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長

事務官

參事官

技師

屬

技手

通譯生

第三條 局長ハ一人勅任トス臺灣總督ノ命ヲ承ケ行政司法ニ關スル事務ヲ整理シ及各部ノ事務ヲ監督ス

第四條 事務官ハ專任二十五人勅任又ハ奏任トス各部ノ長トナリ又ハ之ニ分屬シ部務ニ從事ス

第五條 參事官ハ專任三人奏任トス局長ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌リ又ハ臨時命ヲ承ケ各部ノ事務ヲ助ク

第六條 技師ハ十四人奏任トス各部ニ分屬シ上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

第七條 屬ハ三百十二人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第八條 技手ハ四十人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第九條 通譯生ハ四十二人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ從事ス

第十條 民政局ニ左ノ七部ヲ置ク

總務部

內務部

殖産部

財務部

法務部

學務部

通信部

第十一條 各部事務ノ分掌ハ臺灣總督之ヲ定ム

附則

第十二條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

右の如く教育行政事務に關しては民政局内に學務部が置かれたのであつた。學務部には教務、編纂の二課が設けられた。

同日勅令第九十一號を以て左の如く臺灣總督府地方官官制が定められた。

臺灣總督府地方官官制

- 第一條 臺灣ニ臺北縣、臺中縣、臺南縣及澎湖島廳ヲ置ク其ノ位置及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム
- 第二條 縣ノ下ニ便宜支廳ヲ置ク其ノ名稱、位置及管轄區域ハ臺灣總督之ヲ定ム
- 第三條 地方廳ニ左ノ職員ヲ置ク

知事

島司

支廳長

書記官

警部長

屬

技手

通譯生

警部

監獄書記

看守所

第四條 知事ハ各縣一人勅任トス

第五條 島司及支廳長ハ各島廳及支廳一人奏任トス

第六條 書記官ハ各縣二人各島廳及支廳一人奏任トス

第七條 警部長ハ各縣一人奏任トス

第八條 屬、技手、通譯生、警部、監獄書記及看守所ハ判任トシ各縣各廳ヲ通シテ千二百人ヲ以テ定員トス其ノ各廳及各官ノ定員ハ臺灣總督之ヲ定ム

第九條 知事及島司ハ臺灣總督ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部内ノ行政事務ヲ管理ス

第十條 知事及島司ハ命令若クハ特別ノ委任ニ依リ縣令又ハ島廳令ヲ發スルコトヲ得

第十一條 知事ハ支廳長ノ處分若クハ命令ノ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ之ヲ取消シ又ハ停止スルコトヲ得

第十二條 知事島司及支廳長ハ非常急變ニ際シ兵力ヲ要スルトキハ其ノ附近地ノ守備隊長ニ出兵ヲ請フコトヲ得

第十三條 知事及島司ハ所部ノ官吏ヲ監督シ其ノ進退ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀ス

第十四條 知事及島司ハ所部ノ奏任官ノ懲戒ハ之ヲ臺灣總督ニ具狀シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十五條 知事及島司ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ廳中ノ分課及處務ノ規程ヲ定ムルコトヲ得

第十六條 支廳長ハ知事ノ指揮監督ヲ承ケ部内ノ行政事務ヲ掌理ス

第十七條 縣書記官ハ知事ノ命ヲ承ケ其ノ主務ヲ掌理シ知事事故アルトキハ上席書記官其ノ事務ヲ代理ス

第十八條 島廳及支廳書記官ハ島司又ハ支廳長ノ命ヲ承ケ廳中ノ事務ヲ掌理シ島司又ハ支廳長事故アルトキハ其ノ事務ヲ代理ス

- 第十九條 警部長ハ知事ノ命ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス
- 第二十條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 第二十一條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ従事ス
- 第二十二條 通譯生ハ上官ノ指揮ヲ承ケ通譯ニ従事ス
- 第二十三條 警部ハ上官ノ指揮ヲ承ケ其ノ主務ニ従事シ部下ノ巡查ヲ指揮監督ス
- 第二十四條 監獄書記ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス
- 第二十五條 看守長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス
- 第二十六條 縣、支廳及島廳ノ下ニ警察署、監獄署ヲ置ク知事又ハ島司ニ於テ必要ト認ムルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ得テ警察署ノ下ニ警察分署、監獄署ノ下ニ監獄支署ヲ置クコトヲ得
- 第二十七條 警察署長、警察分署長ハ警部、監獄署長、監獄支署長ハ看守長ヲ以テ之ニ充ツ
- 警察署長、警察分署長、監獄署長及監獄支署長ハ上官ノ指揮ヲ承ケ各其ノ署主管ノ事務ヲ掌理シ部下ノ吏員ヲ監督ス
- 第二十八條 巡查及看守ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム
- 第二十九條 各縣ニ病院ヲ設ケ院長、醫員、藥劑師及調劑生ヲ置ク
- 院長ハ奏任官待遇トシ醫員、藥劑師及調劑生ハ判任官待遇トス
- 第三十條 島廳及各支廳ニハ地方職員ノ外醫員及調劑生ヲ置ク判任官待遇トス
- 知事又ハ島司ニ於テ必要ト認ムルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ得テ島廳又ハ支廳ノ下ニ病院ヲ設ケ醫員、調劑生ヲ以

テ其ノ職員ニ充ツルコトヲ得

附則

第三十一條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

右の地方官官制に依ると臺北、臺中、臺南の三縣及澎湖島廳が置かれ、縣の地方行政事務を統轄する官廳として知事、島廳の地方行政事務を統轄する官廳として島司があつた。而して縣の下には便宜支廳を置き、支廳長が部内の行政事務を掌理したのであつた。

右の臺北、臺中、臺南の三縣廳に於ては内務課庶務掛中に學務主任を置き、教育事務を處理せしめた。

同日又左記法律第六十三號が發せられた。

- 第一條 臺灣總督ハ其ノ管轄區域内ニ法律ノ效力ヲ有スル命令ヲ發スルコトヲ得
- 第二條 前條ノ命令ハ臺灣總督府評議會ノ議決ヲ取り拓殖務大臣ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ
- 臺灣總督府評議會ノ組織ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第三條 臨時緊急ヲ要スル場合ニ於テ臺灣總督ハ前條第一項ノ手續ヲ經スシテ直ニ第一條ノ命令ヲ發スルコトヲ得
- 第四條 前條ニ依リ發シタル命令ハ發布後直ニ勅裁ヲ請ヒ且之ヲ臺灣總督府評議會ニ報告スヘシ
- 勅裁ヲ得サルトキハ總督ハ直ニ其ノ命令ノ將來ニ向テ效力ナキコトヲ公布スヘシ
- 第五條 現行ノ法律又ハ將來發布スル法律ニシテ其ノ全部又ハ一部ヲ臺灣ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三編 新領土其他に於ける教育

第六條 此ノ法律ハ施行ノ日ヨリ滿三箇年ヲ經タルトキハ其ノ效力ヲ失フモノトス

七〇

明治三十年二月二十六日法律第二號を以て左の如く臺灣總督府特別會計法が定められた。

臺灣總督府特別會計法

第一條 臺灣總督府ノ會計ハ特別トシ其ノ歳入及一般會計ノ補充金ヲ以テ其ノ歳出ニ充ツ

第二條 前條ノ收入支出ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第三條 本法ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

明治三十年六月民政部學務局に於ける教務課編纂課の區別が廢止せられた。

明治三十年九月一日勅令第二百九十七號を以て左の如く臺灣總督府條例中に改正が行はれた。

臺灣總督府條例中左ノ通改正ス

第三條中「拓殖務大臣」ヲ「内閣總理大臣」ニ改ム

第六條第二項ヲ左ノ如ク改メ第三項ヲ加フ

前項ノ場合ニ於テハ直ニ内閣總理大臣陸軍大臣海軍大臣參謀總長及海軍軍令部長ニ之ヲ報告スヘシ

明治二十九年法律第六十三號第二條及第四條ノ勅裁ヲ請フトキハ内閣總理大臣ヲ經由スヘシ

第八條第十條及第十一條中「拓殖務大臣ニ由リ」ノ八字ヲ削ル

附則

本令ハ明治三十年九月二日ヨリ施行ス

明治三十年十月二十一日勅令第三百六十二號を以て左の如く臺灣總督府官制が定められた。

臺灣總督府官制

第一條 臺灣總督府ニ臺灣總督ヲ置ク

總督ハ臺灣及澎湖列島ヲ管轄ス

第二條 總督ハ親任トス陸海軍大將若ハ中將ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 總督ハ委任ノ範圍内ニ於テ陸海軍ヲ統率シ内閣總理大臣ノ監督ヲ承ケ諸般ノ政務ヲ統理ス

第四條 總督ハ軍政及陸海軍軍人軍屬ノ人事ニ關シテハ陸軍大臣若ハ海軍大臣、防禦作戰並動員計畫ニ關シテハ參謀總長若ハ海軍軍令部長、陸軍軍隊教育ニ關シテハ監軍ノ區處ヲ承ク

第五條 總督ハ其ノ職權若ハ特別ノ委任ニ依リ總督府令ヲ發シ之ニ禁錮一年以下又ハ罰金二百圓以内ノ罰則ヲ附スルコトヲ得

第六條 總督ハ其ノ管轄區域内ノ防備ノ事ヲ掌ル

第七條 總督ハ其ノ管轄區域内ノ安寧秩序ヲ保持スル爲ニ必要ト認ムルトキハ兵力ヲ使用スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ直ニ内閣總理大臣陸軍大臣海軍大臣參謀總長及海軍軍令部長ニ之ヲ報告スヘシ

第三章 臺灣の教育

第八條 明治二十九年法律第六十三號第二條又ハ第四條ノ勅裁ヲ請フトキハ内閣總理大臣ヲ經由スヘシ
第九條 總督ハ必要ト認ムル地域内ニ於テ其ノ地ノ守備隊長若ハ駐在武官ヲシテ民政事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得
第十條 總督ハ知事若ハ廳長ノ命令又ハ處分ニシテ成規ニ違ヒ公益ヲ害シ又ハ權限ヲ犯スモノアリト認ムルトキハ其ノ命令又ハ處分ヲ停止シ又ハ取消スコトヲ得

第十一條 總督ハ所部ノ官吏ヲ統督シ奏任文官ノ進退ハ内閣總理大臣ヲ經テ之ヲ上奏シ判任官以下ハ之ヲ專行ス

第十二條 總督ハ内閣總理大臣ヲ經テ所部文官ノ敘位敘勳ヲ上奏ス

第十三條 總督ハ所部文官ヲ懲戒ス其ノ勅任官ニ係ルモノ竝ニ奏任官ノ免官ハ内閣總理大臣ヲ經テ上奏シ其ノ他ハ之ヲ專行ス

第十四條 總督府ニ總督官房ヲ置ク

總督官房ニ副官二人及專任祕書官二人ヲ置ク機密事務及文書ノ取扱ヲ掌ル

副官ハ陸海軍佐尉官ノ内各一人ヲ以テ之ニ充ツ

祕書官ハ奏任トス

第十五條 總督府ニ陸軍幕僚海軍幕僚民政局財務局ヲ置ク

陸海軍幕僚條例ハ別ニ之ヲ定ム

第十六條 民政局ハ民政及司法ニ關スル一般ノ事務ヲ掌ル

第十七條 財務局ハ財務ニ關スル事務ヲ掌ル

第十八條 各局中ノ部課ハ總督之ヲ定ム

第十九條 總督府ニ左ノ職員ヲ置ク

民政局長

財務局長

事務官

參事官

技師

通譯官

屬

技手

通譯官補

第二十條 民政局長財務局長ハ各一人勅任トス總督ノ命ヲ承ケ局務ヲ整理ス

第二十一條 事務官ハ專任十八人勅任又ハ奏任トス民政局又ハ財務局ニ屬シ總督又ハ局長ノ命ヲ承ケ各部課ノ事務ヲ掌ル

第二十二條 參事官ハ專任二人勅任又ハ奏任トス總督又ハ民政局長ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌リ及臨時命ヲ承ケ各部課ノ事務ヲ助ク

第二十三條 技師ハ二十人奏任トス上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

第二十四條 通譯官ハ專任二人奏任トス上官ノ命ヲ承ケ文書翻譯及通譯ノ事ヲ掌ル

第二十五條 屬、技手及通譯官補ハ通シテ三百人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務技術及通譯等ニ従事ス

附則

第二十六條 本令ハ明治三十年十一月一日ヨリ施行ス

第二十七條 明治二十九年勅令第八十八號臺灣總督府條例同年勅令第九十號臺灣總督府民政局官制同年勅令第一百

六號臺灣總督府軍務局官制並ニ同年勅令第一百六十九號臺灣總督府民政局臨時土木部官制ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

右官制に依れば臺灣總督は陸海軍大將若くは中將より親任せられ、臺灣及澎湖島を管轄し、委任の範圍内に於て陸海軍を統率し、内閣總理大臣の監督を承け諸般の政務を統理するものであり、一切の文事的政務に關しては内地各省大臣の管轄外に在て獨立し、之を處理する權能を有し、從て教育行政に就ても文部大臣の管轄外に立つて居るのである。

右の臺灣總督府官制の制定、臺灣總督府民政局官制の廢止に依り、從前の民政局學務部は廢止せられ民政局中に學務課が置かれた。

明治三十一年二月九日勅令第二十三號を以て左の如く臺灣總督府官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第三條第七條第二項第八條中「内閣總理大臣」ヲ「内務大臣」ニ改ム

第四條中「監軍」ヲ「陸軍大臣」ニ改ム

第十一條第十二條第十三條中「内閣總理大臣」ノ上ニ「内務大臣ニ由リ」ノ七字ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十一年二月二十日ヨリ施行ス

右の改正に依り、從來臺灣總督は内閣總理大臣の監督を承けて諸般の政務を統理するものであつたのが改められて、内務大臣の監督を承くることとなつた。然も教育行政に關して文部大臣の管轄外に立てるの點は毫も渝る所はない。

明治三十一年六月二十日勅令第六六號を以て左の如く臺灣總督府官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府官制中左ノ通改正ス

第十四條 總督府ニ總督官房ヲ置ク

總督官房ニ副官二人及專任祕書官二人ヲ置ク機密ニ關スル事務ヲ掌ル

副官ハ陸海軍佐尉官ノ内各一人ヲ以テ之ニ充ツ

祕書官ハ奏任トス

第十五條 總督府ニ民政部、陸軍幕僚、海軍幕僚ヲ置ク

陸海軍幕僚條例ハ別ニ之ヲ定ム

第十六條 民政部ハ行政司法ニ關スル一切ノ事務ヲ掌ル

第十七條 民政部中ノ局課及其ノ事務ノ分掌ハ總督之ヲ定ム

第十八條 總督府ニ左ノ職員ヲ置ク

民政長官

第三編 新領土其他に於ける教育

参事官長

参事官

参事官

技師

技師

技師

通譯

第十九條 民政長官ハ一人勅任トス總督ノ命ヲ承ケ部務ヲ整理ス

第二十條 参事官長ハ一人勅任トシ参事官ハ專任二人奏任トス

参事官ハ總督又ハ民政長官ノ命ヲ承ケ審議立案ヲ掌リ又ハ各局課ニ兼動シ又ハ臨時命ヲ承ケ各局課ノ事務ヲ助ク
参事官長ハ上官ノ命ヲ承ケ審議立案ニ關シ参事官ノ事務ヲ監督ス

第二十一條 事務官ハ專任十五人勅任又ハ奏任トス總督又ハ民政長官ノ命ヲ承ケ各局課ノ事務ヲ掌ル

第二十二條 技師ハ十五人奏任トス上官ノ命ヲ承ケ技術ニ關スル事ヲ掌ル

第二十三條 屬、技師及通譯ハ通シテ二百人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務技術通譯等ニ従事ス

第二十四條第二十五條 削除

附則

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

右の改正に依り從來の民政局財政局が合併せられて民政部となり、民政部に學務課が置かれた。

此の如く臺灣に於ける施政も漸次緒に就て來たが、教育のことに關しては民政局に學務部が置かれた當初學務部長心得となつた伊澤修二は臺灣の學制に關し、之を第一緊要事業即ち目下直ちに施設すべきものと、第二永久事業即ち徐々に之が施設を爲すべきものとの二つに分けて計畫したのであつた。緊急事業は之を分ちて二とし、其一を講習員養成とし、其二を國語傳習とした。講習員養成は更に之を分ちて教員養成と新領土官吏養成とした。而して國語傳習は本島人に急速に國語理解者を養成し以て統治の理解者傳達者たらしめんとしたのである。以上の緊要施設に次で永久事業として國語學校及師範學校を設け、國語學校をして内地人にして教員たるべき者及新領土に活動すべき者を養成せしめ、師範學校をして本島人にして教員たるべき者を養成せしめんとしたのである。之を表示すると左の如きものであつた。

第一 緊要事業

(一) 總督府講習員 目下第一回募集

目的 國語傳習所師範學校等の教員と土人に直接する官衙の吏員とを訓練するに在り

甲種(教員となるべき者) 五十名

乙種(吏員となるべき者) 二十五名

(甲種)

學 科 土語、國語教授法、土人教育方案、體操、唱歌等

修業年限 大凡四箇月

第三章 臺灣の教育

卒業資格 國語傳習所、師範學校等の教諭助教諭訓導となる

(乙種)

學科 土語、支那尺牘及公牘、體操等

修業年限 大凡四箇月

卒業資格 行政各部各官衙等の吏員となる

(二) 國語傳習所

所數 現在數……………一四 合せて十六所
來年設立數……………二

目的 土人に現行國語を傳習し地方行政施設の準備を爲し且教育の基礎を作るに在り

(甲科生)

學科 國語、讀書、作文

修業年限 六箇月

卒業資格 街莊堡等の吏員となり又は書房にて國語を傳習するを得

(乙科生)

學科 國語、讀書、作文、習字、算術、(地理、歴史、唱歌、體操)

修業年限 四箇年

卒業資格 公私の業務に就き又は高等の學校に入るを得

第二 永久事業

(一) 總督府國語學校

(甲) 師範部

目的 將來國語傳習所、師範學校の教員及小學校の校長となるべきものを養成す

學科 修身、教育、國語、漢文、土語、地理、歴史、數學、簿記、理科、唱歌、體操

修業年限 二箇年

卒業資格 國語傳習所、師範學校の教諭助教諭及小學校の校長等となる

(乙) 語學部

(イ) 本國語學科

目的 土人の青年學生に國語を教へ兼ねて須要の教育を施し將來臺灣に於ける公私の業務に就かしめんとするに在り

學科 修身、讀書、國語、作文、習字、算術、簿記、理科、唱歌、體操

修業年限 三箇年

卒業資格 通譯者、吏員、實業者等となり公私の業務に就く

(ロ) 土語學科

目的 内地人の青年者に土語を教へ兼ねて須要の教育を施し將來臺灣に於ける公私の業務に就かしめんとするに在り

學科 修身、讀書、土語、作文、習字、算術、簿記、地理、歴史、唱歌、體操

第三編 新領土其他に於ける教育

修業年限 三箇年

卒業資格 通譯者、吏員、實業者等となり公私の業務に従事す

(丙) 國語學校附屬學校

目的 普通教育の模範、師範部生徒實地教授練習の用に供するに在り

學科 修身、國語、讀書、作文、習字、算術、唱歌、體操

(幼年生)

年 齡 八歳以上十五歳以下

修業年限 第一附屬學校 六箇年 其他二校 四箇年

卒業資格 公私の業務に従事し又は高等の學校に入るを得

(青年生)

年 齡 十五歳以上二十五歳以下

修業年限 二箇年

卒業資格 街莊の吏員、通譯者、學校吏員となり又は高等の學校に進入することを得

(丁) 國語學校附屬小學校

目的 完全なる小學教育と實用的夜學校との模範を示すに在り

修業年限 八箇月

卒業資格 公私の業務に就き又は高等の學校に進入するを得

(一)

總督府師範學校

(夜學校に關する事項は逐て之を定む)

目的 普通教育に屬する諸學校の教員を養成するに在り

學科 修身、教育、國語、讀書、作文、算術、簿記、地理、歴史、理科、唱歌、體操

年 齡 十七歳以上二十五歳以下

修業年限 三箇年

卒業資格 島内各地に設立する普通學校の教員となる

(甲) 師範學校附屬小學校

目的 小學教育の模範を示し且師範學校生徒の實地練習の用に供するに在り

學科 修身、國語、讀書、作文、習字、算術、唱歌、體操、裁縫(女兒)

年 齡 八歳以上十五歳以下

修業年限 六箇年

卒業資格 公私の業務に就き又は高等の學校に進入するを得

右の案の趣旨とする所は左の四點に在つた。第一は本島人には國語を授け、順良なる日本臣民たらしむべく之を教育すること、第二は内地人にして臺灣に於ける官衙の吏員となり、其他公私の業務に従事せんとする者をして土語を學びしむること、第三臺灣に於ける教育施設としては先づ普通教育の普及を圖ること從て之が教員たるべき者の養成に努むること、第四は本島人に對する教育と内地人に對する教育とは之を別箇のものとする事である。

右伊澤の案が大體總督樺山の容るる所となり、これが順次に實現せられたのであつた。學務部は明治二十八年六月十七日大稻埕に其廳舎を設けて事務を開始し、第一に緊要事業たる國語傳習に著手せんとしたが、當時臺北城内及其附近に於ては兵亂のため中流以上の者皆難を他地方に避け、教育を受けんとする者は皆無であつたので、七月十二日廳舎を士林の北方芝山巖開漳聖王廟内に移し、大凡十名の子弟を得て七月二十六日より國語の傳習を開始し、尙ほ其後二回三回と募集を爲したのであつた。而して學務部員は一面國語傳習に従事すると共に一面土語の研究を爲し、又教育資料の蒐集に勉め、國語教授書を出版して之を各地方に頒布した。かくする内明治二十九年一月一日には六名の學務部員が不幸にも土匪の爲に殺害せられ、島人教育の第一歩に於ける尊き犠牲者となつたやうな悲惨事があつた爲國語傳習事業も一時停頓したが、同年四月再び開始せられた。學務部は又四十五名の講習員を内地より募集し、出でて島人教育に従事すべき教員の養成を行つた。此講習員は其後明治三十三年の末まで七回に亘つて募集せられた。

明治二十九年三月三十一日勅令第九十四號を以て左の如く臺灣總督府直轄諸學校官制が制定せられ、國語學校及國語傳習所が設けられ、國語學校に附屬學校が附設せらるることとなつた。

臺灣總督府直轄諸學校官制

第一條 臺灣總督府直轄諸學校ハ國語學校及國語傳習所トシ國語學校ニ附屬學校ヲ附設ス

第二條 國語學校及國語傳習所ニ左ノ職員ヲ置ク

校長又ハ所長

教授

教諭

助教諭

舍監

書記

第三條 國語學校校長ハ一人奏任トス臺灣總督府民政局長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

國語傳習所長ハ各所ヲ通シテ十四人トシ縣廳、島廳又ハ支廳ノ官吏ヲシテ之ヲ兼ネシム臺灣總督府民政局長又ハ所屬知事、島司、支廳長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 教授ハ四人高等官四等以下トス國語學校生徒ノ教授ヲ掌ル

第五條 教諭ハ四十二人判任トス國語學校附屬學校又ハ國語傳習所生徒ノ教授ヲ掌ル

助教諭ハ九人判任トス教諭ノ職務ヲ助ク

第六條 舍監ハ二人判任トス國語學校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事ヲ掌ル

舍監ハ教諭又ハ助教諭ノ内ヨリ兼ネシム

第七條 書記ハ判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

附則

第八條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

國語學校及國語傳習所の職員ノ官等俸給に關しては後に述べる臺灣總督府職員官等俸給令に依るのであつた。又分限

懲戒等に關しては一般官吏に對する規程の適用を受くるものたることは勿論である。以上の關係は特別の規程ある場合の外此後述べる總ての臺灣に於ける官立學校職員に就ても同様である。

同日勅令第九十九號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令が定められた。

臺灣總督府職員官等俸給令

- 第一條 臺灣總督府高等文官ノ官等ハ高等文官官等表ニ依ル
- 第二條 臺灣總督ノ年俸ハ六千圓、民政局長ハ四千圓、知事及勅任事務官ハ三千圓トス
- 第三條 左ニ掲クル者ノ俸給ハ第一號俸給表ニ依ル但稅關長ハ七級俸以上、警部長及廳書記官ハ二級俸以下トス

民政局奏任事務官

民政局參事官

臺灣總督 書官

島 司

支廳長

縣書記官

技 師

稅關長

稅關鑑定官

警部長

廳書記官

撫墾署主事ノ俸給ハ第二號俸給表ニ依ル

國語學校高等官並ニ郵便及電信局高等官ノ俸給ハ第三號俸給表ニ依ル但二等郵便電信局長ハ五級俸以下トス

第四條 判任官ノ俸給ハ判任官俸給表ニ依ル

第五條 同一ノ官職ニシテ官等ニ依リ其ノ俸給ヲ異ニスルモノハ高等文官官等相當俸給表ニ依リ各其ノ官等ニ照シテ之ヲ給ス

第六條 本令ニ規定セサルモノハ明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令同二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス但高等官官等俸給令第七條第一項ノ規程ハ當分之ヲ施行セス

附 則

第七條 本令ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

高等文官官等表

勅 任	一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	六 等	七 等	八 等
	親 任	一 等	二 等	三 等	四 等	五 等	六 等	七 等
總 督								
民政局長	同	上						

二等郵便電信局長	一等郵便電信局長	撫臺署主事	警部書記官	支司	支司	支司	支司	支司	支司
	一級俸								
	二級俸	一級俸	二級俸	三級俸	三級俸	三級俸	三級俸	三級俸	三級俸
	三級俸	二級俸	三級俸	四級俸	四級俸	四級俸	四級俸	四級俸	四級俸
	四級俸	三級俸	四級俸	五級俸	五級俸	五級俸	五級俸	五級俸	五級俸
六級俸	五級俸	二級俸	七級俸	六級俸	六級俸	六級俸	六級俸	六級俸	六級俸
八級俸	七級俸	五級俸	八級俸	七級俸	七級俸	七級俸	七級俸	七級俸	七級俸
十級俸	九級俸	七級俸	九級俸	八級俸	八級俸	八級俸	八級俸	八級俸	八級俸

明治二十九年四月十三日左記勅令第百三十五號が發せられた。

明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令第七條ノ規程ハ本月三十日ニ至ル迄臺灣總督府ニ任用スル高等文官ニ適用セス

明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令第七條は初めて奏任文官に任ぜらるる者の官等は六等以下とすること等に関する規定である。

明治二十九年五月二十一日臺灣總督府令第四號を以て左の如く國語傳習所の名稱及位置が定められた。
臺灣總督府直轄國語傳習所ノ名稱位置左ノ通相定ム

國語傳習所名稱位置

臺北國語傳習所	臺北	苗栗國語傳習所	苗栗
淡水國語傳習所	滬尾	雲林國語傳習所	雲林
基隆國語傳習所	基隆	臺南國語傳習所	臺南
新竹國語傳習所	新竹	嘉義國語傳習所	嘉義
宜蘭國語傳習所	宜蘭	鳳山國語傳習所	鳳山
臺中國語傳習所	彰化	恆春國語傳習所	恆春
鹿港國語傳習所	鹿港	澎湖島國語傳習所	媽宮城

注意すべきは恆春國語傳習所分教場としてテロソ社に國語傳習所が設置せられたことである。これが蕃人に對する教育機關の始である。

明治二十九年九月學務部長伊澤修二から恆春國語傳習所長に宛てた通知は當時の事情を明かにするものであるから左に之を掲げる。

客月三十一日電報上申相成候生蕃地テロソ社へ分教場設置ノ件ハ本月二日許可セラレ右ニ要スル經費ノ儀モ夫々増額配付相成候抑モ生蕃地ニ對スル教育ハ果シテ如何ナル方法ヲ以テ之ニ處スルヲ適當トスルカ其ノ邊疑問之點ニ有之候是ヲ以テ精密ニ調査ヲ遂ケタル上ナラテハ後日臆ヲ嚙ムノ憾ヲ遺スヤモ未タ知ル可ラサル次第ニ付容易ニ著手

スヘキ事業ニ無之候得共御地支廳所轄内ニ棲息スル蕃人ハ比較的溫和從順ニシテ且從來支廳トノ交通モ相開ケ隨テ彼我相互ノ事情モ相通シ日ニ關係ノ密接ニ趨クハ開廳以來支廳長ノ報告等ニ依リ明瞭ナル儀ニテ是等ノ事實存在スルカ爲メ今般分教場ノ設置モ許可セラレタル儀ニ有之候今ヤ申迄モ無之候得共機變常ナキノ蕃人ニ對シテハ能ク初ニ慎ミ威信ヲ保チ百般ノ措置其ノ宜キヲ得ルニアラサレハ到底成功シ得サルヘシ故ニ職員ノ監督ハ勿論生徒募集及
其ノ種類年齡其ノ他學級ノ編制學科目授業時間生徒取締等ハ規則ニ抱泥セス別ニ適當ノ方法ヲ設ケ以テ遺算ナキヲ期セラルヘシ要スルニ今回ノ舉ハ將來生蕃地ヘ教育ヲ施設スルニ際リ善惡共ニ模範トナリ且彼ヲシテ他日斯道ニ誘導スルノ難易モ又之ニ依テ岐ルル所ナレハ尋常一般ノ學校トシテ看過ス可ラス今般本年度經費ヲ本所ト同一以上ノ程度ニ配布セラレタルモ施設上遺憾ナキヲ期セシメタル主旨ニ有之候間御了知相成度局長ノ命ニ依リ此段申進候也

同日又臺灣總督府令第五號を以て左の如く國語學校及附屬學校の名稱及位置が定められた。是に於て第一に國語傳習を行つた芝山巖の學堂は國語學校の第一附屬學校となつたのであつた。

臺灣總督府直轄國語學校及附屬學校ノ名稱位置左ノ通相定ム

國語學校及附屬學校名稱位置

臺灣總督府國語學校	臺北
臺灣總督府國語學校第一附屬學校	八芝林
臺灣總督府國語學校第二附屬學校	磁罈
臺灣總督府國語學校第三附屬學校	大稻埕

明治二十九年六月十六日左記臺灣總督府令第十一號が發せられた。

明治二十九年五月府令第四號臺灣總督府直轄國語傳習所名稱位置中臺中國語傳習所ノ下彰化ヲ臺中ト改正ス

明治二十九年六月二十二日臺灣總督府令第十五號を以て左の如く本島人に對する初等普通教育機關たる國語傳習所に關する規則が定められた。

臺灣總督府直轄國語傳習所規則左ノ通相定ム

臺灣總督府直轄國語傳習所規則

第一章 本旨及種類

第一條 國語傳習所ハ本島人ニ國語ヲ教授シテ其日常ノ生活ニ資シ且本國的精神ヲ養成シルヲ以テ本旨トス

第二條 國語傳習所ノ生徒ヲ分テテ甲科及乙科ノ二種トス

第二章 編制

第三條 甲科ノ生徒ハ年齡十五歲以上三十歲以下ニシテ普通ノ知識ヲ備フルモノヲ入學セシメ乙科ノ生徒ハ年齡八歲以上十五歲以下ノモノヲ入學セシム

第四條 甲科ノ生徒ニハ國語ヲ專習セシメ傍ラ讀書作文ノ初歩ニ及シ其期限ヲ凡半箇年トス乙科ノ生徒ニハ國語ノ外讀書作文習字算術ヲ修メシメ其期限ヲ凡ソ四箇年トス

土地ノ情況ニ依リ乙科ノ生徒ニハ地理歴史唱歌體操ノ一科目若ハ數科目ヲ加ヘ女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フルコトヲ

得

前項ノ場合ニ於テハ所長ヨリ其情況ヲ具シテ民政局長ノ指揮ヲ請フヘシ

第五條 學級ハ甲科乙科トモ各一學級トシ生徒ノ年齢及學力ニ依リ更ニ之ヲ數組ニ區別スヘシ

第六條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル甲科ハ之ヲ前後ノ二期ニ分チ乙科ハ之ヲ三學期ニ分ツ

第七條 甲科ハ四月一日ヨリ十月三十一日ニ至ルマテヲ前期トシ十一月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ルマテヲ後

期トス

乙科ハ四月一日ヨリ七月十日ニ至ルマテヲ第一學期九月一日ヨリ十二月二十八日ニ至ルマテヲ第二學期トシ翌年

一月四日ヨリ三月三十一日ニ至ルマテヲ第三學期トス

第八條 甲科ノ教授日數ハ前後二期トモ各二十週トシ乙科ノ教授日數ハ一學年通シテ四十週トス

第九條 教授時數ハ甲科ハ毎日六時(土曜日ハ四時)乙科ハ毎日五時乃至六時(土曜日ハ三時乃至四時)トス但夏

期休業ノ前後各三週間ハ甲乙兩科トモ毎日二時以内ヲ減スルコトヲ得

第十條 始業終業及休憩ノ時間左ノ如シ

甲科

始業 午前八時

終業 午後四時

休憩 正午十二時ヨリ午後二時ニ至ル

乙科(一日五時ノ場合ヲ示セルナリ一日六時ノ場合ニ於テハ甲科ノ例ニ依ルヘキモノトス)

四月一日ヨリ九
月三十日ニ至ル

十月一日ヨリ翌年三
月三十一日ニ至ル

午前八時

午前九時

午後四時

午後四時

午前十一時ヨリ

正午十二時ヨリ

午後二時ニ至ル

午後二時ニ至ル

土地ノ情況ニ依リテハ本條ノ時限ヲ變更スルコトヲ得此場合ニ於テハ所長ヨリ事由ヲ具シテ民政局長ニ開申スヘシ

第十一條 年中休業日ハ左ノ如シ

一日曜日

一祝日大祭日

一夏季休業 七月十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

一年始年末休業 十二月二十九日ヨリ翌年一月三日ニ至ル

第十二條 傳染病ノ流行其他非常ノ變災アルトキハ所長ニ於テ一時傳習所ヲ閉ツルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ所長ヨリ事由ヲ具シテ民政局長ニ開申スヘシ

第三章 教授ノ要旨及教科ノ程度等

第十三條 本所ハ國語ノ傳習ヲ以テ本旨トスト雖常ニ道德ノ教訓ト智能ノ啓發トニ留意スルヲ要ス

道德ノ教訓ハ 皇室ヲ尊ヒ本國ヲ愛シ人倫ヲ重シメ以テ本國的精神ヲ養成スルヲ旨トシ智能ノ啓發ハ世ニ立

チ業ヲ營ムニ必須ナル知識技能ヲ得シムルヲ旨トス

第三編 新領土其他に於ける教育

三四

第十四條 國語ノ教授ハ本國語ヲ用キテ自己ノ思想ヲ精密ニ流暢ニ言明スルコト並他人ノ言語ヲ明瞭ニ解釋スルコトニ通熟セシムヘシ

第十五條 讀書作文ノ教授ハ國語ノ教授ニ伴ヒ現行普通ノ文字文句文章ノ讀ミ方綴リ方及意義ヲ知ラシメ適當ナル字句ヲ用キテ正確ニ自己ノ思想ヲ表出シ他人ノ文章ヲ解釋スルコトニ通熟セシムヘシ

國語及讀書作文教授ノ際ニ於テハ我國體及古今ノ情勢並海外諸國トノ關係ヲ知ラシメ又天然ニ屬スル諸物ノ現象及之ヲ統理スル勢力ノ作用人類ノ天地間ニ立テ其性命ヲ保全スルニ遵守セサルヘカラサル諸法等ヲ知ラシメンコトヲ要ス

第十六條 習字ノ教授ハ先ツ姿勢執筆ノ法ヨリ始メ運筆ノ順序字畫ノ結構ヲ知ラシメ務メテ速寫ニ熟セシメンコトヲ要ス而シテ其手本ノ文字ハ讀書ニテ學習セル文字ニ就キ假名ノ單語數字民間日用ノ文字書翰文及公用書類等ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十七條 算術ノ教授ハ先ツ實物及記號ヲ用キテ二十以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル計ヘ方及加減乗除ヲ授ケ漸ク其範圍ヲ擴メテ百以下ノ數ニ及シ且算用數字及臺灣數字ヲ教ヘ然後珠算ヲ用キテ千以下ヨリ萬以下ノ範圍内ニ於ケル加減乗除及通常ノ小數ノ計ヘ方ヲ授クヘシ
初年ヨリ漸ク度量衡貨幣及時刻ノ制ヲ授ケ且土地ノ情況ヲ斟酌シテ日常適切ノ應用問題ヲ課シ殊ニ暗算ニ熟達セシメンコトヲ要ス

第十八條 甲科ニ於ケル教科ノ課程左表ノ如シ

教科目	授時間	第一課程	第二課程
國語	一八	音韻ノ性質假名ノ用方言語ノ種類字音ノ變化簡易ナル會話及短文	簡易ナル文法上ノ諸規則會話及問答
讀書	一六	小學よみかき教授並小學讀方作文掛圖ノ讀方及應用假名文及簡易ナル漢字交リ文	小學よみかき教授並小學讀方作文掛圖ノ讀方及應用簡易ナル書翰文及公用書類
作文	一六	同上	同上
計	三四	三四	三四

本表ノ第一課程トアルハ凡第一週ヨリ第十週ニ至リ第二課程トアルハ凡第十一週ヨリ第二十週ニ至ルモノトス
第十九條 乙科ニ於ケル教科ノ課程左表ノ如シ

教科目	授時間	第一課程	第二課程	第三課程	第四課程
國語	一一	音韻及用字ノ變化簡易ナル會話及短文	簡易ナル種類及用法會話ノ種類及用法	會話ノ種類及用法會話及問答	會話ノ種類及用法會話及問答
讀書	九	小學よみかき教授並小學讀方作文掛圖ノ讀方及應用假名文	小學よみかき教授並小學讀方作文掛圖ノ讀方及應用假名文	小學讀本ノ讀方及應用簡易ナル書翰文及公用書類	小學讀本ノ讀方及應用簡易ナル書翰文及公用書類
作文	九	同上	同上	同上	同上
計	九	九	九	九	九



第三十二條 試験ハ生徒學業ノ進歩及習熟ノ度ヲ檢定シテ教授上ノ參考ニ供シ又ハ其卒業ヲ認定スルヲ以テ目的トス

第三十三條 試験ヲ分テ臨時定期ノ二種トス臨時試験ハ甲科ハ一期中二回以上乙科ハ一學期中一回以上之ヲ行ヒ定期試験ハ甲科ハ前後二期ノ終リ乙科ハ每學期ノ終リニ之ヲ行フ

第三十四條 學業ノ優劣ハ試験點數ヲ以テ之ヲ評定ス其定點ハ一教科目ニ付二百點トス

第三十五條 甲科ハ一期中ノ臨時試験點ヲ通約シ之ニ其期末ノ定期試験點ヲ加ヘ二分シタルモノヲ以テ一期中ノ成績ヲ表シ乙科ハ一學期中ノ臨時試験點ヲ通約シ之ニ學期末ノ定期試験點ヲ加ヘテ二分シタルモノヲ以テ一學期中ノ成績ヲ表シ三學期ノ評點數ヲ合計通約シタルモノヲ以テ一學年間ノ成績ヲ表ス

第三十六條 本則所定ノ教科ヲ卒業シタルモノニハ左式ノ證書ヲ授與ス

(書式) 略

第六章 補則

第三十七條 本則施行上ニ關スル細則及生徒ノ取締ニ關スル規則ハ所長之ヲ定メ民政局長ノ許可ヲ受クヘシ

明治二十九年九月十五日勅令第三百五號を以て左の如く「臺灣總督府國語學校同附屬學校及國語傳習所生徒學資金及旅費日當支給ノ件」が定められた。

臺灣總督府國語學校同附屬學校及國語傳習所ノ生徒ニハ其ノ種類ニ依リ學資金及旅費日當ヲ支給スルコトヲ得其ノ支給細則ハ臺灣總督之ヲ定ム

生徒に對して學資金及旅費日當を支給する必要があつたことに徴しても、當時島民をして學に就かしむることが如何に困難であつたかが想像せられる。

明治二十九年九月二十五日臺灣總督府令第三十八號を以て左の如く臺灣總督府國語學校規則が定められた。

臺灣總督府國語學校規則

臺灣總督府國語學校規則

第一章 學校ノ區分及本旨

第一條 國語學校ハ分チテ師範部及語學部トシ且附屬學校ヲ加設ス

第二條 國語學校師範部ハ國語傳習所並師範學校ノ教員及小學校ノ校長若クハ教員タルヘキ者ヲ養成シ兼テ本島ニ於ケル普通教育ノ方法ヲ研究スル所トス

第三條 國語學校語學部ハ國語及土語ヲ教授シ兼テ他日本島ニ於テ公私ノ業務ニ就カムトスル者ニ須要ナル教育ヲ施ス所トス

第四條 國語學校附屬學校ハ内地人ノ學齡兒童並本島ノ幼年者及青年者ニ須要ナル教育ヲ施シテ本島ニ於ケル普通教育ノ模範ヲ示シ且師範部ノ生徒實地教授練習ノ用ニ供スルモノトス

第二章 學校ノ編制

第五條 師範部ノ生徒ハ年齢十八歳以上三十歳以下ノ内地人ニシテ尋常中學校ノ第四年生以上ノ學力アルモノトシ語學部ノ生徒ハ年齢十五歳以上二十五歳以下ニシテ高等小學校卒業以上ノ學力ヲ有スル内地人及國語學校附屬學

校又ハ國語傳習所ノ卒業生以上ノ學力アル本島人トス

附屬學校ノ生徒ハ學齡内ノ内地人並年齡八歳以上二十五歳以下ノ本島人トス

第六條 師範部ノ教科目ハ修身教育國語漢文土語地理歴史數學簿記理科唱歌體操トス

第七條 語學部ニ國語學科及土語學科ヲ設ケ内地人ニハ土語學科ヲ授ケ本島人ニハ國語學科ヲ授ケ國語學科ノ教科

目ハ修身國語讀書作文習字算術簿記理科唱歌體操トス

土語學科ノ教科目ハ修身土語讀書作文習字算術簿記地理歴史唱歌體操トス

第八條 附屬學校ノ教科目ハ修身國語讀書作文習字算術唱歌體操トス

第九條 修業年限ハ師範部ヲ二箇年トシ語學部ヲ三箇年トス

附屬學校ハ第一附屬學校ヲ六箇年第二及第三附屬學校ヲ各四箇年トス

第十條 學級ハ師範部ヲ二學級トシ語學部ハ國語學科及土語學科各三學級トス

附屬學校ハ第一ハ三學級第二第三ハ各二學級ヲ設ケ且第一第三ニハ各青年科第二ニハ補習科ヲ附設スルモノトス

第十一條 附屬學校ニ於ケル青年科補習科並内地人ノ兒童ノ教育ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第十二條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル之ヲ分チテ三學期トス

第十三條 四月一日ヨリ七月十日ニ至ルマテヲ第一學期九月一日ヨリ十二月二十八日ニ至ルマテヲ第二學期トシ翌

年一月四日ヨリ三月三十一日ニ至ルマテヲ第三學期トス

第十四條 教授日數ハ一學年凡四十週教授時數ハ毎週三十四時トス

但夏季休業前後各三週間ハ毎週教授時間ヲ十時以内減スルコトヲ得

第十五條 年中休業日ハ左ノ如シ

一日曜日

一祝日大祭日

一學年末 三月二十九日ヨリ
三月三十一日ニ至ル

一夏季 七月十一日ヨリ
八月三十一日ニ至ル

一年末年始 十二月二十九日ヨリ
翌年一月三日ニ至ル

第三章 教授ノ要旨及教科ノ程度等

第十六條 師範部ノ教授ノ要旨左ノ如シ

一 本部ニ於テハ教員ノ養成ヲ以テ本旨トス故ニ各教科目ノ教授ハ常ニ教育ノ學理ニ基キ他日生徒卒業ノ後自ラ教

授スルノ模範タルヘシ

一 精神ヲ鍛鍊シ德操ヲ磨勵スルハ教員タル者ニアリテハ殊ニ重要トス故ニ生徒ヲシテ平素意ヲ此ニ用ヒシメムコ

トヲ要ス

一 忠君愛國ノ志氣ニ富ムハ教員タルモノニアリテハ殊ニ重要トス故ニ生徒ヲシテ平素忠孝ノ大義ヲ明ニシ順良ノ

臣民タル志操ヲ振起セシメムコトヲ要ス

一 規律ヲ守リ秩序ヲ保テ師表タルヘキ威儀ヲ具フルハ教員タル者ニアリテハ殊ニ重要トス故ニ生徒ヲシテ平素長

上ノ命令訓誨ニ服從シ起居言動ヲ正クセシメムコトヲ要ス

一 身體ノ健康ハ事業ヲ成就スルノ基ナリ故ニ生徒ヲシテ平素衛生ニ留意シ健康ヲ増進セシメムコトヲ要ス

一言語ノ正確明瞭ナルハ本島ノ教員タル者ニアリテハ殊ニ必要トス故ニ國語科ハ勿論其他ノ教科目ニ於テモ教授ノ際常ニ生徒ノ口述ニ注意シ其發音ヲ正シク語法ヲ明ニシ以テ言語ヲ練習セシムルコトヲ務ムヘシ

一學習ノ法ハ偏ニ教授ノミニ憑ラシムヘキモノニアラス故ニ生徒ヲシテ常ニ自ラ學識ヲ進メ技藝ヲ研ク習慣ヲ養ハシムルコトヲ務ムヘシ

第十七條 師範部ノ教科ノ程度左ノ如シ

一修身ハ教育ニ關スル 勅語ノ旨趣ニ基キテ人倫道德ノ要領ヲ授ケ兼テ重要ナル府令及告諭ノ大意ヲ授ケ

修身ヲ授クルニハ忠孝友愛信實禮敬義勇恭儉等實踐ノ方法ハ勿論兼テ臣民ノ國家ニ對スル義務社會ノ制裁及廉恥ノ重ンスヘキコト風俗品位ノ純正ニ趨カムコト等ニ注意スルヲ必要トス

一教育ハ教育史教育及教授ノ原理各科教授法學校管理法及教育ニ關スル法令ヲ授ケ

教育ヲ授クルニハ本島現行教育ノ旨趣方法ヲ理解セシメ本島ニ忠實ナル教育者タルノ精神ヲ養ハムコトヲ要ス

又實地授業ニ就キテハ單ニ教授ノ練習ノミニ止メスシテ併セテ事務ノ練習ヲモナサシムヘシ

一國語ハ音韻ノ性質假字ノ用法言語ノ種類作文ノ典則等ヲ授ケ兼テ文題ヲ與ヘテ話文普通文書翰文及公用書類ヲ作ラシム

國語ヲ授クルニハ現行ノ言語ヲ用ヒテ正確ニ他人ノ思想ヲ解釋シ且自己ノ思想ヲ表出スルコトニ熟通セシメ作文ハ總テ簡明著實ニシテ達意ヲ旨トシ文題ハ日常必須ノ事項ニ就キ務メテ實用ニ適スルモノヲ撰ムヘシ

一漢文ハ古文及時文中平易ニシテ雅馴ナルモノヲ講讀セシメ兼テ翻譯及復文ノ練習ヲナサシムヘシ

漢文ヲ授クルニハ音訓及譯法ヲ正シク句讀ニ注意シ句意章意ヲ明ニシ且文理結構ヲ講究セシムコトヲ要ス

一土語ハ廣ク本島内ニ行ハル、口音ニ依リ音韻ノ性質言語ノ種類會話ノ實習及話文並公文ノ讀方作文等ヲ授ケ

土語ヲ授クルニハ常ニ發音及語勢ニ注意シ正確ニ他人ノ思想ヲ解釋シ且自己ノ思想ヲ表出スルコトニ熟通セシメ且作文ノ典則ニ誦練セシムコトヲ要ス

一地理歴史 地理ハ地理總論内地地理本島地理ヲ授ケ歴史ハ日本歴史ヲ授ケ

地理及歴史ヲ授クルニハ務メテ本島ノ情況ヲ詳ニシ且内地ト本島トノ關係ヲ知悉セシムコトヲ要ス

一數學簿記 數學ハ算術(珠算及筆算)及幾何ノ初步ヲ授ケ簿記ハ複式ニ依リ諸帳簿ノ用法豫算表及決算表等ノ製式ヲ授ケ

數學ヲ授クルニハ成ルヘク之ヲ實地ニ應用シ兼テ諸算及速算ニ習熟セシメ簿記ハ官用及商用ノ二様ニ熟通セシメムコトヲ要ス

一理科ハ普通ノ植物動物及礦物ノ構造效用分類動植物生理上ノ現象人身ノ生理衛生ノ大要通常ノ理化學上ノ現象及諸器械ノ構造作用等ヲ授ケ

理科ヲ授クルニハ成ルヘキタケ本島ニ關係アル事實ニ基キ實驗ノ方法ニ依リ正確ナル知識ヲ得セシメ以テ日常生活及生業上ノ實用ニ資スルニ適セシムコトヲ要ス

一唱歌ハ單音唱歌及樂器ノ用法ヲ授ケ

唱歌ヲ授クルニハ歌詞及樂譜ノ高雅純正ニシテ教育上裨益アルモノニ就キテ練習セシメ兼テ音樂上ノ名稱記號等ノ要略及歌詞ノ意義ヲ知ラシメムコトヲ要ス

一體操ハ普通體操及兵式體操ヲ授ケ

第三編 新領土其他に於ける教育

體操ヲ授クルニハ規律ヲ嚴正ニシ姿勢ヲ整齊シ意氣ヲ充實シ運動ヲ活潑ナラシメテ身體ト精神トノ健全ヲ保
タシメムコトヲ要ス

第十八條 師範部ノ教科ノ課程左表ノ如シ

師範部教科課程表		第一學年	第二學年
教科目	授時間	授時間	授時間
修身	二	二	二
教育	五	五	五
國語	三	三	三
漢文	二	二	二
土語	一〇	一〇	一〇
地理	二	二	二
歴史	二	二	二
簿記	三	三	三
理科	二	二	二
唱歌	二	二	二
體操	三	三	三
實地			
實業			

計	三四	三四
---	----	----

第十九條 語學部ノ教授ノ要旨左ノ如シ

- 一 本部ニ於テハ言語ノ傳習修練ヲ以テ本旨トナスト雖又常ニ道德ノ涵養ト智能ノ啓發トニ留意シテ教授ヲ施スヘシ
- 一 道德ノ教訓ハ皇室ヲ尊ヒ國家ヲ愛シ人倫ヲ重セシメ以テ國民的精神ヲ養成セムコトヲ要ス
- 一 智能ノ教育ハ世ニ立チ業ヲ營ムニ必須ナル知識技能ヲ得セシムコトヲ要ス
- 一 規律ヲ守リ秩序ヲ保チ言語ヲ明瞭正確ナラシムルハ將來公私ノ業務ニ就カムトスルモノニハ殊ニ重要トス故ニ生徒ヲシテ平素長上ノ命令及訓誨ニ服從シ起居言動ヲ正クセシムコトヲ要ス
- 一 身體ノ健康ハ事業ヲ成就スルノ基ナリ故ニ生徒ヲシテ平素衛生ニ留意シ健康ヲ増進セシムコトヲ要ス
- 一 學習ノ法ハ偏ニ教授ノミニ憑ラシムヘキモノニアラス故ニ生徒ヲシテ常ニ自ラ學識ヲ進メ技藝ヲ研ク習慣ヲ養ハシメムコトヲ務ムヘシ

第二十條 國語學科ノ教科ノ程度左ノ如シ

- 一 修身ハ教育ニ關スル 勅語ノ旨趣ニ基キテ人倫道德ノ要領ヲ授ケ兼テ重要ナル府令及告諭ノ大意ヲ授ク
- 一 修身ヲ授クルニハ忠孝友愛信實禮敬義勇恭儉等實踐ノ方法ハ勿論公私ノ禮儀作法ニ嫻ハシメ兼テ臣民ノ國家ニ對スル責務社會ノ制裁及廉恥ノ重ンスヘキコト風俗品位ノ純正ニ趨カムコト等ニ注意スルコト特ニ必要ナリトス

第三章 臺灣の教育

一 國語ハ現行ノ國語ニ就キ音韻ノ性質假字ノ用方言語ノ種類文法上ノ諸規則會話及話文等ヲ授ケ兼テ内地及本島ノ地理歴史等ノ事項ヲ講說セシム

一 國語ヲ授クルニハ現行普通ノ言語ヲ用ヒテ正確ニ他人ノ思想ヲ解釋シ且自己ノ思想ヲ表出セシムルヲ目的トシ
常ニ土語ト對照シテ其意義ヲ會得セシムヘシ

一 讀書作文 讀書ハ平易適實ナル普通文體ノ書ニ依リテ講讀ヲ授ケ兼テ地理歴史等ニ關スル講說ヲ授ク
作文ハ話文普通文書翰文及公用書類ヲ授ク

一 讀書ヲ授クルニハ常ニ文字ノ音訓語勢ノ正否ニ注意シ又之ヲ土語ニ譯述セシメテ語句文章ノ解否ヲ檢シ能ク全體ノ意義ヲ了解セシムコトヲ要ス

一 作文ヲ授クルニハ主トシテ日常必須ノ事項ニ就キテ文題ヲ撰ヒ平易著實ニシテ公私ノ用ニ適應スヘキ文章ヲ作ラシムヘシ

一 習字ハ假字交リノ行書及楷書行書ヲ授ク習字ヲ授クルニハ先ツ姿勢及執筆ノ法ヲ教ヘ次ニ筆ノ運用字畫ノ結構ヲ知ラシメ務メテ速寫ニ熟セシムコトヲ要ス

一 算術ハ珠算及筆算ヲ併セ授ケ簿記ハ複式ニ依リ諸帳簿ノ用法豫算表決算表ノ製式等ヲ授ク

一 算術ヲ授クルニハ成ルヘク之ヲ商業等ノ實地ニ應用シ兼テ諸算及速算ニ習熟セシメ簿記ハ官用及商用ノ二様ニ熟通セシムヘシ

一 理科ハ學校所在ノ地方ニ於ケル植物動物礦物ノ構造效用動物植物ノ生理上ノ現象人身ノ生理及衛生ノ大要通常ノ理化學上ノ現象及諸器械ノ構造作用ヲ授ク

理科ヲ授クルニハ成ルヘキタケ平生目撃スル所ノ近易ナル實物現象等ニ就キ正確ナル知識ヲ得シメ以テ日常ノ生活及生業上ノ實用ニ適セシムコトヲ要ス

一 唱歌ハ單音唱歌ヲ授ク

一 唱歌ヲ授クルニハ祝日大祭日及諸儀式ニ用フルモノヲ主トシ兼テ普通ノ歌曲ヲ授ケ又歌謠聽音及音階ノ練習ヲナシ且歌詞ノ意義ヲ知ラシムコトヲ要ス

一 體操ハ普通體操ヲ授ク

一 體操ヲ授クルニハ姿勢ヲ正クシ支體ノ成長ヲ均齊ニシ常ニ健康ナル身體ト快活ナル精神トヲ保チ能ク規律ヲ守ルノ習慣ヲ得シムコトヲ要ス

第二十一條 國語學科ノ教科ノ課程左表ノ如シ

國語學科教科課程表

教科目	第一學年		第二學年		第三學年	
	每週授	授時間	每週授	授時間	每週授	授時間
修身	二		二		二	
國語	一二		一〇		一〇	
讀書	七		九		九	
習字	二		二		二	
簿算	三		三		三	

人倫ノ大要
禮儀作法
音韻ノ性質、假字ノ用
方、言語ノ種類、會話ノ
實習、話文ノ讀方作文等
普通文
假名交リノ行書
算術(珠算)

同上
文法上ノ諸規則、會話ノ
實習、話文ノ讀方、作文、
地理、歴史ノ講說等
話文、普通文
書翰文、公用書類
行書
算術(珠算筆算)

同上
重要ナル府令告諭等
同上
同上
楷書行書速寫法
算術ノ復習簿記

理科	三	・學校所在地ニ於ケル動植物及自然現象	三	動物植物ノ生理上ノ現象 普通ノ理化學上ノ現象	三	理化學上ノ現象、通常ノ器械ノ構造作用、人身ノ生理衛生ノ大要
唱歌	二	單音唱歌	二	同上	二	同上
體操	三	普通體操	三	同上	三	同上
計	三四		三四		三四	

第二十二條 土語學科ノ教科ノ程度左ノ如シ

- 一 修身ハ教育ニ關スル 勅語ノ旨趣ニ基キテ人倫道德ノ要領ヲ授ケ兼テ重要ナル府令及告諭ノ大要ヲ授ク
- 一 修身ヲ授クルニハ忠孝友愛信實禮敬義勇恭儉等實踐ノ方法ハ勿論兼テ臣民ノ國家ニ對スル責務社會ノ制裁及廉恥ノ重シスヘキコト風俗品位ノ純正ニ趨カムコト等ニ注意スルコト特ニ必要ナリトス
- 一 土語ハ廣ク本島内ニ行ハル、口音ニ依リ音韻ノ性質言語ノ種類會話ノ修練及話文公文ノ讀方作文等ヲ授ク
- 一 土語ヲ授クルニハ常ニ口音及語勢ノ正否ニ注意シ其意義ヲ正ク國語ニ譯シテ速ニ他人ノ思想ヲ解釋シ且自己ノ思想ヲ表出スルコトニ熟セシムヘシ
- 一 讀書作文 讀書ハ韻語語言譬喻小説漢文(古文及時文)等ヲ授ケ作文ハ普通文書翰文公用書類及尺牘官用文等ヲ授ク
- 一 讀書ヲ授クルニハ常ニ音韻語勢及句讀ニ注意シ話言譬喻小説時文等ハ之ヲ現行ノ内地語ニ譯セシメ又漢文ハ其音訓及返り點ニ注意シ通讀ノ際讀者及聽者ヲシテ直ニ文勢文意ヲ會得セシムルコトヲ務ムヘシ
- 一 作文ヲ授クルニハ主トシテ日常必須ノ事項ニ就キ文題ヲ撰ヒ專ラ簡明達意ノ體ニ依ルヲ可トスト雖尺牘及官用

第二十三條 土語學科ノ教科ノ課程左表ノ如シ

教科	學年	授時間	第一學年	第二學年	第三學年
修身	二	二	人倫ノ大要	人倫ノ大要 重要ナル府令告諭等	同上
土語	一二	一二	音韻ノ性質、言語ノ種類、會話ノ實習、話文ノ讀方、作文等	會話ノ實習、話文及公文ノ讀方、作文等	同上
讀文書	七	六	講讀、本國話文、普通文、作文、書翰文、公用書類	講讀、普通文、漢文(古文及時文)、作文、尺牘、官用文	講讀、漢文(古文及時文)、作文、尺牘、官用文
習字	二	二	楷書	行書	同上
簿算	三	三	算術(珠算)	算術(珠算筆算)	簿算ノ復習

歴史	三	地理總論 日本地理	四	日本地理、本島地理、 日本歴史	四	外國地理ノ大要 日本歴史
唱歌	二	單音唱歌	二	同上	二	同上
體操	三	普通體操 兵式體操	三	同上	三	同上
計	三四		三四		三四	

第二十四條 附屬學校ノ教授ノ要旨左ノ如シ

- 一 附屬學校ニ於テハ兒童ニ道德ノ大綱ト人生必須ノ知識技能トヲ授ケテ國民的精神ヲ養成シ兼テ本島ニ於ケル普通教育ノ模範ヲ示スヘシ
- 一 德性涵養ノ心髓ハ教師ノ模範ニアレハ教師タルモノハ常ニ身ヲ以テ模範トナスコトニ留意セサルヘカラス
- 一 本校ノ生徒ハ成業ノ後公私ノ業務ニ就クヘキモノナレハ常ニ言語ヲ明晰ニシ動作ヲ敏捷ニシ且諸種ノ勞作ヲ厭ハサル習慣ヲ作ルコトヲ務ムヘシ

第二十五條 附屬學校ノ教科ノ程度ハ左ノ如シ

- 一 修身ハ教育ニ關スル 勅語ノ旨趣ニ基キテ人道實踐ノ方法ヲ授ケ兼テ禮儀作法ヲ授ク
- 修身ヲ授クルニハ先ツ忠君愛國ノ大道ヲ辨セシメ日常ノ禮儀ニ嫻ヒ一家親族社會及國家ニ對スル責務ヲ知ラシムコトヲ要ス
- 一 國語ハ音韻ノ性質假字ノ用方言語ノ種類用方及會話ノ實習並地理歴史理科等ニ關スル講説ヲ授ク
- 國語ヲ授クルニハ内地現行ノ言語ヲ用ヒテ自己ノ思想ヲ精密ニ流暢ニ言明シ且他人ノ言語ヲ明瞭ニ解釋スルコトヲ要ス

トニ熟通セシムルヲ目的トシ常ニ土語ト對照シテ其意義ヲ會得セシムヘシ

- 一 讀書作文ハ假字ノ單語短文日常ノ生活及生業上ニ資スヘキ事項ヲ記載スル話文及普通文ノ讀本並書翰文公用書類等ヲ讀マシメ且話文普通文書翰文及公用書類等ヲ作ラシム
- 讀書作文ヲ授クルニハ常ニ國語ノ教授ニ伴ヒ字句文章ノ讀ミ方綴リ方及意義ヲ知ラシメ之ヲ土語ニ譯シテ正確ニ自己ノ思想ヲ表出シ並他人ノ文章ヲ解釋スルコトニ熟通セシムコトヲ要ス
- 一 習字ハ假字ノ單語數字民間日用ノ文字並書翰文及公用書類等ヲ授ク
- 習字ヲ授クルニハ先ツ姿勢執筆ノ法ヨリ始メ運筆ノ順序字畫ノ結構ヲ知ラシメ務メテ速寫ニ熟セシムコトヲ要ス

- 一 算術ハ先ツ實物及記號ノ計ヘ方加減乘除並算用數字及臺灣數字ヲ授ケ次ニ珠算ノ加減乘除及通常ノ小數ノ計ヘ方ヲ授ク又學校ノ修業年限ニ應シテ簡易ナル複名數通常ノ分數小數及簡易ナル比例問題ニ至ラシム
- 算術ヲ授クルニハ初年ヨリ日常適切ノ應用問題ヲ課シ殊ニ諸算ニ熟達セシムコトヲ要ス

- 一 唱歌ハ單音唱歌ヲ授ク
- 唱歌ヲ授クルニハ祝日大祭日及諸儀式ニ用フルモノヲ主トシ兼テ普通ノ歌曲ヲ授ケ歌謠聽音及音階ノ練習ヲナシ且歌詞ノ意義ヲ知ラシムコトヲ要ス

第二十六條 附屬學校ノ教科ノ課程左表ノ如シ

第一附屬學校教科課程表	
-------------	--

科目	年	教時	修身	國語	讀書	習字	算術	唱歌	體操
第一學年	三	九	三	九	九	四	三	三	三
第二學年	三	九	同上	九	九	四	三	同上	同上
第三學年	三	九	同上	同上	九	四	三	同上	同上
第四學年	三	八	同上	同上	八	四	五	同上	同上
第五學年	三	八	同上	同上	八	四	五	同上	同上
第六學年	三	八	同上	同上	八	四	五	同上	同上

計	三四	三四	三四	三四	三四	三四	三四	三四	三四
---	----	----	----	----	----	----	----	----	----

第二及第三附屬學校教科課程表

科目	年	教時	修身	國語	讀書	習字	算術	唱歌	體操
第一學年	三	九	三	九	九	四	三	三	三
第二學年	三	九	同上	九	九	四	三	同上	同上
第三學年	三	九	同上	同上	九	四	三	同上	同上
第四學年	三	九	同上	同上	九	四	三	同上	同上

第二十七條 教員ハ學校長ノ指揮ヲ受ケ本則定ムル所ノ教科ノ程度等ニ基キ一學年中ノ教授細目及毎週授クル所ノ教案ヲ製シ且各生徒ノ學業進歩ノ景況性質品行才能交友勤惰賞罰體格等ニ就キ平生視察セシ所ヲ記シ每學年ノ終ニ之ヲ學校長ニ差出スヘシ

第四章 入學退學服務及出席等

第二十八條 生徒ノ募集ハ每學年ノ末ニ於テシ入學ハ每學年ノ始メトス

第二十九條 師範部ノ生徒ニハ其學資ノ全部ヲ支給シ語學部ノ生徒ハ給費自費ノ二種ニ分チ給費生ニハ其學資ノ幾部ヲ支給スルモノトス

第三十條 授業料ハ總テ之ヲ徵收セス

第三十一條 給費生ハ卒業證書受得ノ日ヨリ三箇年間ハ民政局長ヨリ指定ノ職務ニ従事スルノ義務ヲ有ス但特別ノ事情アリテ民政局長ノ許可ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

第三十二條 生徒入學ノ節ハ左式ノ願書ニ履歷書ヲ添ヘテ學校長ニ差出スヘシ

(書式) 略

第三十三條 給費生トシテ入學ノ許可ヲ得タル者ハ左式ノ規約書ヲ學校長ニ差出スヘシ

(書式) 略

第三十四條 不良ノ行爲アリテ生徒タル本分ニ違背スルモノト認メタルモノ又ハ成業ノ見込ナキモノハ停學又ハ退學ヲ命スルコトアルヘシ

第三十五條 傳染病ニ罹リタル生徒ハ全癒ノ後尙一週日ヲ經サレハ出席ヲ許サス又一家中ニ該病者アルトキモ亦本

條ニ依ルヘシ

第三十六條 流行性若クハ厭惡スヘキ諸病ニ罹リタル生徒ハ全癒ノ後ニアラサレハ出席ヲ許サス

第五章 試験及卒業

第三十七條 試験ハ生徒學業ノ進歩及習熟ノ度ヲ檢定シテ教授上ノ參考ニ供シ又ハ其卒業ヲ認定スルヲ目的トス

第三十八條 試験ヲ分テ臨時定期ノ二種トス臨時試験ハ一學期中一回以上之ヲ行ヒ定期試験ハ每學期ノ終ニ之ヲ行フ

第三十九條 學業ノ優劣ハ試験點數ヲ以テ之ヲ評定シ一教科目ニ付百點ヲ以テ定點トス

第四十條 一學期中ノ臨時試験點ヲ合計通約シ之ニ學期末ノ定期試験點ヲ加ヘテ二分シタルモノヲ以テ一學期中ノ成績ヲ表シ三學期ノ評點數ヲ合計通約シタルモノヲ以テ一學年間ノ成績ヲ表ス

第四十一條 本則所定ノ教科ヲ卒業セリト認定スルモノニハ左式ノ證書ヲ授與ス

(第一號及第二號書式) 略

第六章 補則

第四十二條 本則施行上ニ關スル細則及生徒ノ取締ニ關スル規則ハ學校長之ヲ定メ民政局長ヘ開申スヘシ

國語學校は右の如く内地人を入學せしめて國語傳習所並に師範學校の教員及小學校の校長若は教員たるべき者を養成する師範教育機關(師範部)たるのみならず、本島人を入學せしめて國語を主とする簡易高等普通教育を施す機關(語學部國語學科)であり、内地人を入學せしめ土語其他を授けて本島内外に活動せんとする者を養成する機關(語學部土語學科)でもあり、又附屬學校に於ては本島人及内地人に對して初等普通教育を施し、尙ほ後に述べる如く本島人に對し

年俸	一級二千五百圓	二級二千二百圓	三級二千圓	四級千八百圓	五級千六百圓	六級千四百圓
	七級千二百圓	八級千圓	九級九百圓	十級八百圓	十一級七百圓	十二級六百圓

明治三十年一月十四日の官報に記載せられた臺灣總督府の發表は當時の教育狀況を審にするものであるから左に之を掲げる。

臺灣總督府直轄學校概況 昨二十九年十一月臺灣總督府民政局學務部ニ於ケル國語學校及國語傳習所開始以來ノ執務成績並ニ教育事項等ノ要領左ノ如シ

第一國語學校(臺北) 本校及三附屬學校ハ昨二十九年三月三十日勅令第九十四號臺灣總督府直轄諸學校官制ニ基キ同五月二十一日府令第五號ヲ以テ名稱、位置ヲ定メラレ爾來本校假事務所ヲ同校第一附屬學校内ニ設ケ同七月一日講習員四十五人ノ卒業者ヲ出シ同十一月同校第二附屬學校内ニ移シ専ラ附屬學校ニ關スル諸規則並ニ本校ニ屬スル諸細則等ヲ規定及立案セリ同九月二十五日府令第三十八號ヲ以テ本校規則ヲ定メラレ同十四日勅令第三百五號ヲ以テ本校及附屬學校生徒學資金及旅費日當支給ノ件ヲ公布セラレ尋テ同二十七日府令第四十號ヲ以テ其支給細則ヲ定メラレタリ

第二國語學校第一附屬學校(八芝林) 本校ノ生徒タル所謂臺灣教育ノ發端ニシテ本校開始以來ノ要件ヲ摘載センニハ先ツ八芝林芝山巖學堂ノ創始ニ溯ラサルヲ得ス一昨二十八年七月此學堂ヲ開設シ専ラ土語ノ研究ニ著手シ普通用語、教育用語ノ各單語篇、會話書等ノ編輯ニ從事シ同十六日同地郷紳ノ子弟大凡十人ヲ學堂ニ聚メ國語ノ傳

習ヲ始ム其後國語傳習志願者ノタメニ數回試驗ヲ行ヒ入學ヲ許可セシ者十餘人ニシテ同九月二十日之ヲ類別シテ甲、乙、丙ノ三組ト爲シ甲組ハ第一回入學者ニ係リ既ニ國語ヲ解シ得ルヲ以テ臨時雇トシテ若干ノ日給ヲ付與シ乙組ハ第二回入學者ト第一回ノ者若干人トヲ合セタルモノニシテ年齒已ニ長シ才力學行アリ今後數月間ノ傳習ヲ經テ教員又ハ吏員等ニ採用シ得ヘキ者ナリ丙組ハ第三回入學者ニシテ年齒猶ホ幼ニ學力稍ニ劣將來一般ノ小學校ニ於テ國語教授ノ方法ヲ研究スルニ資スヘキモノナリ同十月十九日左記ノ七人第一期ノ傳習ヲ終リタルヲ以テ修業證書授與式ヲ行フ

柯秋潔 潘光儲 陳兆鸞 潘光明 潘適文 潘光楷 朱俊英

此修業生ハ入學以後勉學ノ結果進歩殊ニ著シク僅々滿三箇月ニシテ國語ノ大體ヲ了解シ得ルニ至レリ同月下旬修業生柯秋潔、朱俊英ハ伊澤學務部長ニ隨行シテ上京同十二月四日臺灣ニ歸レリ

昨二十九年一月一日八芝林地方土匪蜂起シ學堂職員楫取道明以下五人遭難死亡セシタメ一時國語ノ傳習ヲ中止セリ同二月二十三日樺山總督上京ノ際傳習生葉壽松、張柏堂ハ隨行ヲ命セラレ同四月十三日臺灣ニ歸レリ同十三日曩ニ内地ニ於テ募集セル日本語講習員及舊傳習生ヲ集メ再ヒ學堂ニ於テ授業ヲ開始ス同五月一日講習員ノ授業時間ヲ改正シ國語教授法ノ講義ヲ加ヘ伊澤學務部長自ラ之ヲ擔當セリ同八日ヨリ講習員ヲシテ土人學生ノ授業ヲ受持タシメ伊澤學務部長之ヲ監督ス同五月二十一日ノ府令ニ依リ本學堂ハ國語學校第一附屬學校ト稱シ同六月一日四十一人ノ入學式ヲ行ヒ此生徒ヲ乙組トシ從前ノ學生十三人ヲ甲組トス同九月一日本校生徒中二十七人ハ給費生ヲ命セラル同十月十二日國語學校規則及細則實施ニ附キ從來ノ甲組ヲ第一學級第二學年生ト稱シ乙組ヲ第一學級第一學年生ト稱ス教授時間ヲ毎日五時間(但シ土曜日ハ三時間)トシ修身、讀書、作文、國語、習字、算術、唱

歌、體操ノ八科ヲ課ス

第三國語學校第二附屬學校(緬緬) 本校ノ位置ハ緬緬ニ於ケル舊學海書院ニシテ昨二十九年六月二十五日修繕工事ニ著手シ同七月十一日國語學校假事務所ヲ本校ニ移シ同二十二日竣工同十月二十八日本校第一學年生ノ入學試驗ヲ舉行シ同十一月二日九人ノ合格者ニ入學ヲ許可シ授業ヲ開始セリ

第四國語學校第三附屬學校(大龍峒) 本校ハ本年五月二十一日府令ニ依リ大稻埕ニ設置スヘキモ目下學校ニ充ツヘキ家屋ナキヲ以テ當分大龍峒保安宮内ニ假設スルコト、シ同七月二十日修繕工事ニ著手シ同八月五日竣工尋テ事務ヲ開始シ七十一人ノ生徒ヲ得テ同八月二十九日開校式ヲ舉行シ同生徒ヲ二科ニ分チ十七歲以上ヲ青年科トシ十六歲以下ヲ幼年科トス同九月一日授業ヲ開始シ授業時間ハ當分三時間トシ其内地教育制度ニ馴化スル程度ニ從ヒ漸次時間ヲ増加スルノ方法ニ依レリ生徒ノ種類ニ依リ學業ノ進度ヲ察スルニ商家ノ子弟ハ農戶ノ子弟ニ優リ教師ノ子弟ハ商家ノ子弟ニ超駕ス概シテ同校生徒ハ殊ニ柔順ニシテ能ク教員ノ命ヲ遵奉シ日ヲ逐ヒテ親密ナルニ從ヒ尊敬ノ念益々加ル又不規律ナル習慣ヲ矯正スルノ手段トシテ隊列法ヲ教授セルカ其結果良好ナリ同十月十二日生徒ノ名稱ヲ第一學級第一學年生ト改メ生徒ノ員數過多ナルヲ以テ更ニ甲乙兩組ニ分級シ會話、讀方、書取、習字、算術等ヲ教授ス

第五國語傳習所 本所ハ昨二十九年五月二十一日府令第四號ヲ以テ名稱、位置ヲ定メ同六月二十二日府令第十五號ヲ以テ本所規則ヲ定メ同九月四日勅令第三百五號ヲ以テ本所生徒學資金及旅費日當支給ノ件ヲ公布セラレ同二十七日府令第四十號ヲ以テ本所給費生支給規則ヲ定ム

第六國語傳習所(臺北) 本所ハ臺北縣立日本語學校ニ使用シタル民有家屋ヲ以テ假ニ校舍ニ充用シ昨二十九年七

月八日同校生徒十二人ノ引繼ヲ了シ授業ヲ開始ス本所ハ舊日本語學校ト多少ノ關係ヲ有スルヲ以テ今本所ノ要件ヲ摘記スルニ先チ同校創始以來ノ成績ヲ略舉スヘシ

一昨二十八年七月臺北縣廳ニ於テハ總督ノ許可ヲ經テ募集ニ著手セシモ當時應募者少ク同年九月漸ク數人ノ生徒ヲ得テ授業ヲ開始セリ爾來日ニ増加ノ傾向ヲ來シ昨二十九年二月甲乙二級ニ分チ學業ノ進歩モ一層著シク同六月二十七日卒業證書授與式ヲ施行シ卒業者蔡啓明、施騰輝、倪希昶ノ三人ヲ出セリ而シテ殘生徒十二人ハ本所ニ引繼ヲ爲シ同校ヲ閉鎖セリ本所ハ同八月ニ至リ校舍準備ノタメ一時生徒ノ授業ヲ中止セリ生徒募集ニ就キテハ臺北縣廳ノ告示ニ依リテ一般ニ周知セシモ尙ホ勸誘ノ必要ヲ認メタルヲ以テ所員ヲ管内ニ派遣シ其募集ニ從事セシメ總テ七十八人ヲ得タリ其遠地ヨリ通學スル者ハ和尙州士林街錫口等ニ止リ其他ハ附近ノ各街庄里ヨリス本所ハ城内ニ其位置ヲ占メ本土居民ノ稀少ナルヲ以テ乙科生ノ太タ寡キハ遺憾トスル所ナリ同九月一日校舍諸般ノ準備整理シ新募生徒及從來ノ生徒ヲ統一シ府令第十號國語傳習所規則ニ依リ再ヒ授業ヲ開始セリ而シテ生徒採擇ニ就キテハ應募者中先ツ其年齒ノ長シタル者ヲ選ヒ九月一日ヨリ五日間音韻教授ノ傍發音、習字、作文、古文解釋ノ四科ヲ試驗シ其品性ヲ精察シテ甲科生二十八人、乙科生ヲ甲乙二組ニ分チ甲組ハ十六歲以上ノ稍々學力アル者ヲ以テ編成シ甲科ノ豫備トシ乙組ハ十五歲以下ノ幼年生ヲ以テ組織シ而シテ甲組ハ十九人、乙組ハ十三人ヲ得タリ本所ノ立案ニ係ル生徒心得、生徒賞罰規定、試驗細則、性行體質調查細則、參觀人心得ハ同十五日民政局長ノ認可ヲ經テ實施セリ開所以來闕席者甲科生ニ少ク乙科生ニ多キハ蓋シ開所日淺ク民心嚮學ノ志氣ニ乏シク敢テ闕席ヲ意トセサルモノ、如シ教授ノ概況ハ各科進歩甚タ顯著ナリトス同十月二十六日川上陸軍中將本所ヲ巡視シ甲科生ノ會話及唱歌、乙科生ノ單語教授及問答ヲ熱心ニ聽取シ尙ホ二三優等生ノ談話ヲ試ミ生徒一同ニ賞品ヲ授與セリ

生徒大ニ感激シ頗ル獎勵ノ效アリ

第七淡水國語傳習所(滬尾) 本所ハ昨二十九年五月以來校舎撰定竝ニ生徒募集ニ從事シ同九月七日甲科生二十一人、乙科生三人ヲ得テ授業ヲ開始セリ目下生徒學業ノ程度ハ文法ニ於テ敬辭竝ニ常言ノ練習、會話ハ日本語言集七十頁ニ至リ作文ハ會話書單語ニ就キ應用綴序セシメ掛圖ノ教授ハ當部編纂作文掛圖八十一課ニ達ヒ問答ハ同二十四課ニ終ル

第八基隆國語傳習所(基隆) 本所ハ基隆支廳ノ保管家屋ヲ以テ教場ニ充テ昨二十九年五月以來基隆、瑞芳、金包里、三貂、石碇等各堡ニ於テ生徒ヲ募集セリ募集ノ方針タル甲科生ハ各街庄ヨリ徧ク志願セシメ乙科生ニ在リテハ基隆市内ヨリ志願セシメタリ是レ甲科生ハ速成ヲ主トシ他日各街庄ニ歸リ官民ノ間ニ在リテ行政ノ機關ヲ助ケシムル等ノ目的アルヲ以テナリ同九月十六日試驗ノ上甲科生三十五人、乙科生四十八人ノ入學ヲ許可セリ本所ハ別ニ寄宿舎ヲ設ケ生徒ノ便宜ヲ圖リシニ勉學ノタメ寄宿スル者多シ

第九新竹國語傳習所(新竹) 本所ハ舊明志書院ヲ以テ教場ニ充テ昨二十九年六月以來生徒ノ募集ニ著手シ十一月十七日採用試驗ヲ執行シ特例ニ依リ甲科生七十二人、乙科生五十八人ニ入學ヲ許可シ、同二十一日其開所式ヲ舉行シ同二十四日開業以後各生徒ノ進歩大ニ觀ルヘキモノアリ目下寄宿生六人ニシテ街長葉開榮同宿生ノ取締ヲ爲シ能ク規則ヲ遵守シ學事ニ勉勵セリ

第十宜蘭國語傳習所(宜蘭) 本所ハ昨二十九年八月二十日甲科生四十人、乙科生二十三人ヲ得テ授業ヲ開始セリ同地ハ先ニ明治語學校ナルモノアリテ生徒ヲ教育シ來リタルモ本所ノ設立後之ヲ廢シ生徒ハ悉ク本所ニ引繼ヲ受ケタリ本所生徒ノ學力他ニ比シテ進歩殊ニ著シク甲科生ノ如キハ孰モ本所生徒タルヲ以テ頗ル名譽ト爲ルモノトシ

學人生員等自ラ奮テ入學シタルハ本所將來ノタメ大ニ喜フヘキコトナリ目下乙科生ハ増シテ四十二人ニ及ヘリ

第十一臺中國語傳習所(臺中) 本所所在地ハ讀書生極メテ少キモ直轄管下ニ於ケル在來ノ學堂百八十餘、生徒二千八百餘アリテ各堡到ル處我語言ヲ學ハント欲スル者多シ應募生徒ハ總數六十人ニシテ讀書ニ從事セシ子弟タリ其內成規ノ員數三十五人ヲ甲科生トシテ入學ヲ許可セリ昨二十九年十月一日開所式ヲ舉行シ同五日授業ヲ開始セリ第十二鹿港國語傳習所(鹿港) 本所ハ募集生徒甲科生五十六人、乙科生四十四人ノ内ヨリ甲科生三十五人、乙科生四十人ヲ採擇シテ入學ヲ許可シ本年九月十日授業ヲ開始セリ

第十三苗栗國語傳習所(苗栗) 本所ノ位置ハ苗栗街ト田寮庄トノ中間ニ在ル社寮崗庄褒忠亭内ニシテ昨二十九年七月十三日修繕工事ニ著手シ同八月下旬甲科生二十三人、乙科生二十人ニ入學ヲ許可シ同九月一日開所式ヲ舉行シ同十五日授業ヲ開始セリ生徒ハ孰モ熱心勉勵ナルヲ以テ其進歩殊ニ著シ本所ハ遠地來學者ノタメ所内ノ空屋ヲ賃與シ隨意寄宿ヲ許可セシニ其數十七人ニ達シ目下在所生徒ハ甲科生三十五人、乙科生三十六人ナリ

第十四雲林國語傳習所(雲林) 本所ハ昨二十九年六月二十七日以來創設ノ準備ニ著手セシモ土匪蜂起ノタメ同八月十九日漸ク本所ヲ北港ニ假設シ同九月十一日開所式ヲ舉行セリ其入學ヲ許可セシハ甲科生十六人、乙科生十三人ニシテ同十二日授業ヲ開始セリ

第十五臺南國語傳習所(臺南) 本所ハ舊臺南府學内ニ置キ昨二十九年九月一日本所諸般ノ準備略々整ヒタルヲ以テ募集ニ應シタル甲科生二十一人、乙科生二十七人ニ入學ヲ許可シ授業ヲ開始セリ爾來入學者益々加リ同十五日ニ及ヒテ甲科生三十五人、乙科生五十人ニ至レリ又舊臺南議院ヲ以テ生徒ノ寄宿舎ニ充テ院内ノ大成殿竝ニ附屬建物ハ教育上大ニ關係アルノミナラス將來本所ノ事業ヲ擴張スルニ最モ必要ナルヲ以テ本所ノ所屬ト爲セリ

第十六嘉義國語傳習所(嘉義) 本所ハ土匪擾亂ノ餘ヲ承ケ生徒ノ募集ニ從事セシタメ募集者僅々數人ニ過キサリシモ先ツ實地ニ學校ノ何タルヲ示スニ如カサルコトヲ察知シ斷然昨二十九年九月一日開所授業ヲ始メタリ此日出席生一人ノミ爾來種々ノ方法ニ依リ勸誘招募セシ結果終ニ今日ノ隆盛ヲ觀ルニ至レリ目下乙科生二十四人ニシテ入學以來學業ノ進歩稍々見ルヘキモノアリ爾來一般人民ニ於テモ漸次日本語ノ必要ヲ感シタルモノ、如ク頗ル意ヲ學事ニ傾注シ商人等ノ如キモ十人乃至十二三人夜間日本語ノ指導ヲ請フ者アルニ至レリ同十一月一日甲科生ノ授業ヲ開始セリ出席生徒三十五人ナリ

第十七鳳山國語傳習所(鳳山) 本所ハ假ニ城內西門側ノ古廟ヲ以テ教場ニ充テ昨二十九年九月一日甲科生五十六人(二十二名自費生)乙科生九人ニ入學ヲ許可シ授業ヲ開始セリ而シテ甲科自費生ニ係ルモノハ年齡三十歳以上ニシテ給費生タル資格ニ適合セサル者及自費生タラントヲ特ニ出願セシ者ノ二種アリ此等生徒ハ甲科給費生以上ノ學力ヲ備ヘ且ツ相當ノ資産ヲ有シ多少ノ名望ヲ負ヒ現ニ衛生委員タル者等アリ目下國語ヲ傳習セシムルハ最モ緊要ノ事ナルヲ以テ甲科給費生及乙科ノ教授上ニ支障ヲ及サ、ル限其入學ヲ許可セリ

第十八恆春國語傳習所(恆春) 本所ハ昨二十九年七月十八日恆春支廳內ニ假事務所ヲ設ケ全般ノ準備ニ著手セシモ土地僻遠ニシテ人文未開ノタメ經營頗ル困難ナリシカ漸クニシテ二十五人ノ生徒ヲ得タリ依テ八歳ヨリ十四歳マテ十六人ヲ乙科生トシ十五歳ヨリ二十四歳マテ九人ヲ甲科生トシテ入學ヲ許可シ同九月一日開所式ヲ舉行ス同十月二十五日上生蕃三社討伐隊凱旋以來人心大一變シ入學ヲ志願スル者増加シ目下入學生徒三十人ニ達シ漸次學事ニ傾注スルモノ、如シ

第十九恆春國語傳習所猪勝東社分教室(恆春下生蕃猪勝東社) 猪勝東社ハ恆春城ヲ距ルコト東四里ニシテ下生蕃十

八社ノ大股頭人潘文杰ノ居住スル所ナリ凡ソ東西六七町、南北二十餘町ニシテ本島ノ南半島ノ東海岸ニ沿ヒ猪勝東山(高サ千五百尺許)ノ兩脚ニ在リ猪勝東溪ノ中央ニシテ土人ノ居住スル蚊蟀埔庄(戸數七十餘)ヲ西方十餘町ニ瞰下ス

會テ恆春支廳長ノ學業ヲ獎勵セラレシ結果彼等ノ希望ニ依リ昨二十九年九月二日該社分教室設置ノ許可ヲ得更ニ潘文杰ニ命シテ校舍ヲ新築セシメ同日落成同日開業式ヲ舉行シ同十七日甲科生八人、乙科生十九人ニ入學ヲ許可シ授業ヲ開始セリ爾來孰モ匪勉通學シ暴風雨ノ外一日モ闕席シタル者ナシ因ニ記ス本分教室ハ本島生蕃地教育ノ嚆矢ニシテ教育其宜シキヲ得ヘ精神涵養上熟蕃人ヨリハ却テ思想單純ニシテ文字ヲ知ラサル生蕃人ノ方一層速ナルヘキヲ信ス

第二十澎湖島國語傳習所(媽宮城) 本所ハ澎湖島媽宮城內舊程朱祠跡ヲ以テ校舍ニ充テ昨二十九年九月十日開所授業ヲ始ム甲科生三十三人、乙科生十人ナリ本島ハ生活ノ程度最モ下劣ニシテ多クハ勞働ニ從事シ教育思想ヲ有スル者ナシ甲科生ノ過半ハ手當食料ヲ目的トスルモノ、如ク隨テ給費ナキ乙科生ノ如キハ大抵本國官吏ノ保護ヲ受ケ通學ス然レトモ漸次日本語ノ必要ヲ感シ民心次第ニ學事ニ留意スル傾向アルモノ、如シ

明治三十年四月七日左記臺灣總督府令第十一號が發せられた。

明治二十九年府令第四號臺灣總督府國語傳習所ニ左ノ二所ヲ追加シ其名稱位置左ノ通相定ム

名稱

位置

埔里社國語傳習所

埔里社

第三章 臺灣の教育

明治三十年四月三十日、國語學校第一附屬學校に女子分教場が設けられた。國語學校が校達第六號を以て假定した分教場規則は左の如くであつた。

臺灣總督府國語學校第一附屬學校分教場規則

- 第一條 當場ハ本島ノ女子ニ手藝及ヒ普通ノ學科ヲ授クル所トス
 - 第二條 生徒ハ年齡滿八年以上三十年以下トス
 - 第三條 教科目ハ修身國語習字裁縫編物造花及ヒ唱歌ノ七科トス
 - 第四條 學年學期休業日其他ノ件ハ本校規則ニ據ル
 - 第五條 教科課程及ヒ每週教授時間ヲ定ムルコト左ノ如シ
- 修身 一時間
 - 人道實踐ノ方法及ヒ日常ノ作法 三時間
 - 國語 三時間
 - 假字ノ讀方及ヒ簡易ナル日常會話 三時間
 - 習字 三時間
 - 假字及ヒ日用文字 十時間
 - 裁縫 十時間

運針、縫衣、色褲、手巾、綉鞋類、衣服及裁剪、辨仔類、鋪蓋巾帶之類、棉衣服、烟袋類網衣服之類、大繡料之類

編物

小兒靴下、腕ハメ、帽子、涎掛類、靴下類、花瓶敷物、袋物、手袋、シャツ類

造花 十時間

梅、桃、菊、たんぼ、さりしま、罌麥、躑躅、海棠、げんげ、椿、茶、茶、朝顔、百合、蘭、水仙、大菊、ばら、柳、牡丹、あやめ、松、竹、蓮、桐、石榴、其他四季花寫生

唱歌

單音唱歌

これが本島人に對する女子教育の發端といふべきものである。

明治三十年四月臺北病院附屬として醫學講習所が設立せられ、本島人の子弟に醫學的教育を施し治病の術を授けると共に普通學に關する知識を與ふることとした。

明治三十年五月十五日左記臺灣總督府令第十八號が發せられた。

明治二十九年五月府令第四號臺灣總督府直轄國語傳習所名稱位置中鹿港國語傳習所ヲ彰化ニ移シ彰化國語傳習所ト改稱ス

明治三十年五月二十七日勅令第五百十三號を以て左の如く臺灣總督府地方高等官官等俸給の件が定められ、從來の臺灣總督府職員官等俸給令中地方高等官に關する部分が廢止せられた。

第一條 臺灣總督府地方高等官ノ官等ハ別表ニ依ル

第二條 臺灣總督府地方高等官ノ俸給ハ左ノ如シ

知事	一級	四 千 圓
	二級	三 千 五 百 圓
	三級	三 千 圓
	一級	二 千 圓
廳長	二級	千 八 百 圓
	三級	千 六 百 圓
書記官	四級	千 四 百 圓
	五級	千 二 百 圓
但シ廳書記官ハ二級俸以下トス		
警部長	一級	千 八 百 圓
	二級	千 六 百 圓
	三級	千 四 百 圓
	四級	千 二 百 圓

財務局長	五級	千 圓
典獄長	一級	千 二 百 圓
稅務長	二級	千 圓
辨務署長	三級	九 百 圓
警視長	四級	八 百 圓
	五級	七 百 圓

附則

明治二十九年勅令第九十九號臺灣總督府職員官等俸給令中臺灣總督府地方高等官ニ關スル規程ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(別表)

臺灣總督府地方高等官等表	
勅任	奏任
一等	三等
二等	四等
三等	五等
四等	六等
五等	七等
六等	八等
七等	
八等	
知事	廳長
同	同
同上	同上
同上	同上
同上	同上
同上	同上
同上	同上
同上	同上
縣書記官	
同	
同上	
同上	
同上	
同上	
同上	

開席シタルモノハ其間食費手當トモ支給セス

明治三十年六月二十五日臺灣總督府令第二十七號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第四附屬學校に關する件が定められた。此第四附屬學校は内地人の兒童に初等普通教育を授けるが爲に設けられたのである。

明治二十九年五月府令第五號臺灣總督府國語學校附屬學校ニ左ノ一校ヲ追加シ其名稱位置左ノ通相定ム

名稱	位置
臺灣總督府國語學校第四附屬學校	臺北

同日又臺灣總督府令第二十八號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程が定められた。

臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程左ノ通相定ム

臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程

第一章 通則

- 第一條 本校ハ臺灣總督府國語學校規則第四條ニ依リ本島ニ在ル内地人ノ兒童ヲ教育スル所トス
- 第二條 本校ニ小學科及補習科ヲ置キ其修業年限ハ小學科ヲ六箇年トシ補習科ヲ二箇年トス
- 第三條 小學科ノ教科目ハ修身讀書作文習字算術日本地理日本歴史理科圖畫唱歌體操裁縫(女兒)トス
- 第四條 補習科ノ教科目ハ修身讀書作文土語(男兒)習字算術家事及裁縫(女兒)體操(男兒)トス但讀書ハ國文及漢文ニ分チ漢文ハ男兒ニノミ之ヲ課ス

第五條 學級ノ編制ハ五十名ヲ以テ一學級トス但小學科第四學年マテハ男女トモ同一ノ學級ニ編入シ第五學年以上及補習科ニアリテハ之ヲ區別ス

第六條 入學ノ許可ヲ得タル者ハ保證人ヲ定メ入學證書(書式第一號)一通ヲ差出スヘシ

第七條 各學年修業ノ完キ者ニハ修業證書(書式第二號)ヲ與ヘ小學科卒業ノ者ニハ卒業證書(書式第三號)ヲ與フ

第二章 教授ノ要旨及程度

第八條 修身ハ教育ニ關スル 勅語ノ旨趣ニ基キ兒童ノ良心ヲ啓培シテ其徳性ヲ涵養シ人道實踐ノ方法ヲ授ケ且日常ノ禮儀作法ニ嫻ハシムルヲ以テ要旨トス

此科ニ於テハ孝悌友愛仁慈信實禮敬義勇恭儉等ノ諸徳ニ關シテ其實踐ノ方法ヲ授ケ殊ニ忠君愛國ノ志氣ヲ養ハシムルヲ務メ又國家ニ對スル責務ノ大要ヲ指示シ兼テ社會ノ制裁廉恥ノ重ンスヘキコトヲ知ラシメ兒童ヲ誘キテ純正ナル風俗品位ニ趨カシメ殊ニ女兒ニアリテハ貞淑ノ美德ヲ養ハシメンコトニ注意スヘシ

修身ヲ授クルニハ近易ノ俚諺及先哲ノ格言善行等ヲ例證シテ勸戒ヲ示シ教員躬親ラ兒童ノ模範トナリ兒童ヲシテ浸潤薰染セシメンコトヲ要ス

第九條 讀書作文ハ普通ノ言語並日常須知ノ文字文句文章ノ讀方綴方及意義ヲ知ラシメ之ヲ應用シテ適當正確ニ思想ヲ表彰スルノ能力ヲ養ヒ兼テ知徳ヲ啓發スルヲ以テ要旨トス

初年ニ於テハ近易適切ナル事物ニ就キ平易ニ談話シ其言語ヲ練習シテ假字ノ讀方書方綴方ヲ知ラシメ次ニ假字ノ短文及近易ナル漢字交リノ短文ヲ授ケ第三學年以上ニ於テハ讀書作文ノ教授時間ヲ分チ讀書ハ普通ノ漢字交リ文

作文ハ普通ノ漢字交リ文及日用書類等ヲ授クヘシ

讀書作文ヲ授クル際單語短句短文等ヲ書取ラシメ若クハ改作セシメテ假字及語句ノ用法ニ熟セシムヘシ
讀書中修身地理歴史理科等ニ關スル事項ハ成ルヘク實物圖書標本等ヲ示シ兒童ヲシテ明瞭ニ理會セシメンコトヲ要ス

言語ハ常ニ注意シテ練習セシメンコトヲ要ス

第十條 習字ハ先ツ假字ノ書方ヲ習ハシメ漸ク楷行草ノ三體ニ及シ其運筆ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス

初年ニ於テハ片假字及平假字近易ナル漢字交リノ短句通常ノ人名苗字物名地名等ヲ授ケ漸ク進ミテ日用文字及日用書類等ヲ習ハシムヘシ

習字ヲ授クル際ハ特ニ姿勢ヲ整ヘ執筆及運筆ヲ正クシ字行ハ整正ヲ尙ヒ運筆ハ務メテ敏活ナラシメンコトヲ要ス
他ノ教科目ノ教授ニ於テ文字ヲ書カシムルコトアルトキハ亦常ニ其字形及字行ヲ正クセシムルコトニ注意スヘシ

第十一條 算術ハ日常ノ計算ニ習熟セシメ兼テ思想ヲ精密ニシ傍ラ生業上有益ナル知識ヲ與フルヲ以テ要旨トス

初年ニ於テハ先ツ十以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル計ヘ方及加減乗除ヲ授ケ漸ク數ノ範圍ヲ擴メテ萬以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル加減乗除ヲ授ケ第五學年以上ニ於テハ前學年ノ練習及度量衡貨幣及時刻ノ計算通常ノ分數小數及比例問題ヲ授ク

算術ヲ授クルニハ理會精密ニ運算習熟シテ應用自在ナラシメンコトヲ務メ又常ニ言語若クハ算式ヲ用ヒテ運算ノ方法及順序ヲ正確ニ表明セシメ殊ニ諸算ニ熟達セシメンコトヲ要ス

珠算ハ主トシテ運算ノ熟達敏捷ナランコトヲ要トスルモノナレハ常ニ筆算ヨリ一步ツ、後レテ之ニ追隨セシメ反

覆練習シテ日用ノ計算ニ熟達セシムヘシ

算術ノ問題ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項ヲ適用シ又ハ本島ノ情況ニ適シタル日常緊要ノモノヲ撰フヘシ

第十二條 日本地理ハ本邦地理ノ大要ヲ授ケテ人民ノ生活ニ關スル重要ナル事項ヲ理會セシメ兼テ愛國ノ精神ヲ養フヲ以テ要旨トス第五學年ニ於テハ先ツ學校附近ノ地理ヲ授ケ以テ此科ノ基礎タルヘキ知識ヲ與ヘ漸ク進ミテ本島及本邦ノ地形氣候著名ノ都會人民ノ生業等ノ概略ヲ授ケ更ニ地球ノ形狀水陸ノ別其他重要ニシテ兒童ノ理會シ易キ事項ヲ知ラシムヘシ第六學年ニ於テハ更ニ日本地理ノ要項ヲ授ケ關係諸外國ノ地理ノ大要ニ及フ
地理ヲ授クルニハ實地ノ觀察ニ基キ又地球儀地圖寫眞標本等ヲ示シ兒童ノ熟知セル事物ニ依リ比較類推セシメテ確實ナル知識ヲ得セシメ又常ニ歷史上ノ事實ニ連絡セシメ兼テ簡略ナル地圖ヲ畫カシメンコトヲ要ス

第十三條 日本歴史ハ本邦國體ノ大要ヲ知ラシメテ國民タルノ志操ヲ養フヲ以テ要旨トス

此科ニ於テハ建國ノ體制 皇統ノ無窮 歷代 天皇ノ盛業忠良賢哲ノ事蹟國民ノ武勇文化ノ由來等ノ概略ヲ授ケテ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ノ大要ヲ知ラシムヘシ

日本歴史ヲ授クルニハ成ルヘク地圖圖書等ヲ示シ兒童ヲシテ當時ノ實狀ヲ想像シ易カラシム人物ノ言行等ニ就キテハ之ヲ修身ニ於テ授ケタル格言等ニ照シテ正邪是非ヲ辨別セシメンコトヲ要ス

第十四條 理科ハ通常ノ天然物及現象ノ觀察ヲ精密ニシ其相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシメ兼テ天然物ヲ愛スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

最初ハ主トシテ學校所在ノ地方ニ於ケル植物動物礦物及自然ノ現象ニ就キ兒童ノ目撃シ得ル事實ヲ授ケ就中重要ナル植物動物ノ形狀構造及生活發育ノ狀態ヲ觀察セシメテ其大要ヲ理會セシメ更ニ植物動物ノ相互及人生ニ對ス



ル關係通常ノ物理上化學上ノ現象通常兒童ノ目撃シ得ル器械ノ構造作用等ヲ理會セシメ兼テ人身ノ生理及衛生ノ大要ヲ授クヘシ

理科ニ於テハ務メテ農業工業其他人民ノ生活上ニ適切ナル事項ヲ授ケ殊ニ植物動物等ヲ授クル際之ヲ以テ製スル重要ナル人工物ノ製法效用等ノ概略ヲ知ラシムヘシ

理科ヲ授クルニハ實地ノ觀察ニ基キ若クハ標本模型圖畫等ヲ示シ又ハ簡易ナル試驗ヲ施シ明瞭ニ理會セシメンコトヲ要ス

第十五條 圖畫ハ眼及手ヲ練習シテ通常ノ形體ヲ看取シ正ク之ヲ畫クノ能ヲ養ヒ兼テ意匠ヲ練リ形體ノ美ヲ辨知セシムルヲ以テ要旨トス

初年ニ於テハ直線曲線及其單形ヨリ始め時々直線曲線ニ基キタル諸形ヲ工夫シテ之ヲ畫カシメ漸ク進ミテハ簡單ナル形體ヨリ諸般ノ形體ニ移リ實物若クハ手本ニ就キテ畫カシム

圖畫ヲ授クルニハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル物體及兒童ノ日常目撃セル物體中ニ就キテ之ヲ畫カシメ兼テ清潔ヲ好ミ綿密ヲ尙フノ習慣ヲ養ハンコトヲ要ス

第十六條 唱歌ハ耳及發聲器ヲ練習シテ容易キ歌曲ヲ唱フルコトヲ得シメ兼テ音樂ノ美ヲ辨知セシメ德性ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス第四學年以下ニ在リテハ容易キ單音唱歌ヲ授ケ第五學年以上ニ在リテハ前學年ノ練習ヲナシ併

セテ譜表ヲ用ヒ單音唱歌ヲ授クヘシ歌詞及樂譜ハ成ルヘク本邦古今ノ名家ノ作ニ係ルモノヨリ之ヲ撰ヒ雅正ニシテ兒童ノ心情ヲ快活純美ナラシムモノタルヘシ

第十七條 體操ハ身體ノ成長ヲ均齊ニシテ健康ナラシメ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守ルノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス初年ニ於テハ適宜ノ遊戲ヲナサシメ漸ク進ミテ普通體操ヲ加ヘ男兒ニハ兵式體操ノ一部ヲ授ク

第五學年以上ニ至リテハ男兒ニハ主トシテ兵式體操ヲ授ケ女兒ニハ普通體操若クハ遊戲ヲ授クヘシ體操ノ教授ニ依リテ習成シタル姿勢ハ常ニ之ヲ保持シメンコトヲ要ス

第十八條 裁縫ハ眼及手ヲ練習シテ通常ノ衣服ノ縫方及裁方ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス初年ニ於テハ先ツ運針法ヨリ始めテ簡易ナル衣服ノ縫方ヲ授ケ又便宜通常ノ衣服ノ繕方等ヲ授クヘシ漸ク進ミテ

ハ通常ノ衣服ノ縫方裁方等ヲ授クヘシ裁縫ノ品類ハ成ルヘク日常所用ノモノヲ撰ミ之ヲ授クル際用具ノ種類衣服ノ保存方及洗濯方等ヲ教示シ常ニ節約利用ノ習慣ヲ養ハンコトヲ要ス

第十九條 補習科ハ小學校卒業ノ後本島ニ於テ直ニ實業ニ就クモノノ爲ニ設ケタルモノナレハ小學科ニ於テ學習シタル事項ヲ補充スルノ外更ニ男兒ニハ近易ナル漢文及土語女兒ニハ家事ノ大要ヲ授ケ處世ニ資セシムルヲ以テ要旨トス

第二十條 補習科ノ漢文ハ讀書ノ中ニ於テ之ヲ授ケ古文及時文中平易雅馴ナルモノヲ講讀セシム漢文ヲ授クルニハ音訓ヲ正クシ句讀ニ注意シテ句意章意ヲ明ニシ兼テ文理結構ヲ講究セシメンコトヲ要ス

第二十一條 補習科ノ土語ハ廣ク本島内ニ行ハル、口音ニ依リ音韻ノ性質言語ノ種類會話ノ實習及話文公文ノ讀方作文等ヲ授ク

土語ヲ授クルニハ常ニ口音及語勢ノ正否ニ注意シ其意義ヲ正ク國語ニ譯シテ速ニ他人ノ思想ヲ解釋シ且自己ノ思想ヲ表出スルコトニ熟通セシメンコトヲ要ス

第三章 臺灣の教育

三七

第二十二條 補習科ノ家事ハ衣食住家計簿記家事衛生育兒其他一家ノ整理經濟等ニ關スル事項ヲ授ク
 家事ヲ授クルニハ成ルヘク實習セシメ務メテ實用ニ適セシメンコトニ注意スヘシ
 第二十三條 小學科及補習科ノ教科課程ハ別表ノ如シ

小學科教科課程表

學年	科目	時間					
		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	第六學年
第一學年	修身	三	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	讀書	八	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	作文	六	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	習字	六	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	算術	三	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	日本地理	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	修身	三	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	讀書	八	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	作文	六	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	習字	六	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	算術	三	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	日本地理	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	修身	三	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	讀書	六	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	作文	六	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	習字	六	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	算術	四	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	日本地理	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	修身	三	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	讀書	六	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	作文	六	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	習字	五	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	算術	四	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	日本地理	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	修身	二	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	讀書	四	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	作文	四	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	習字	三	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	算術	二	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	日本地理	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	修身	二	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	讀書	四	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	作文	四	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	習字	三	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	算術	二	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	日本地理	同上	同上	同上	同上	同上	同上

學年	科目	時間					
		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	第六學年
第一學年	日本歴史	二	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	理科	二	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	圖畫	二	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	唱歌	三	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	體操	三	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	裁縫	三	同上	同上	同上	同上	同上
第一學年	計	二	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	日本歴史	二	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	理科	二	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	圖畫	二	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	唱歌	三	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	體操	三	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	裁縫	三	同上	同上	同上	同上	同上
第二學年	計	二	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	日本歴史	二	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	理科	二	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	圖畫	二	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	唱歌	三	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	體操	三	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	裁縫	三	同上	同上	同上	同上	同上
第三學年	計	二	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	日本歴史	二	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	理科	二	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	圖畫	二	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	唱歌	三	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	體操	三	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	裁縫	三	同上	同上	同上	同上	同上
第四學年	計	二	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	日本歴史	二	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	理科	二	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	圖畫	二	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	唱歌	三	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	體操	三	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	裁縫	三	同上	同上	同上	同上	同上
第五學年	計	二	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	日本歴史	二	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	理科	二	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	圖畫	二	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	唱歌	三	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	體操	三	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	裁縫	三	同上	同上	同上	同上	同上
第六學年	計	二	同上	同上	同上	同上	同上

補習科教科課程表

學年	科目	時間	
		第一學年	第二學年
第一學年	修身	二	同上
第一學年	讀書	八	同上
第一學年	國文、漢文	同上	同上
第二學年	修身	二	同上
第二學年	讀書	八	同上
第二學年	國文、漢文	同上	同上

助教授

教諭

助教諭

舎監

書記

第三條 學校長ハ一人奏任トス臺灣總督府民政局長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 教授ハ八人奏任トス國語學校生徒ノ教授ヲ掌ル

助教授ハ六人判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第五條 教諭ハ十五人判任トス附屬學校又ハ公學模範學校生徒ノ教授ヲ掌ル

助教諭ハ九人判任トス教諭ノ職務ヲ助ク

第六條 舎監ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事ヲ掌ル

舎監ハ教官ヨリ之ヲ兼ネシム

第七條 書記ハ九人判任トス學校長ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

第八條 臺灣總督府民政局長ハ國語學校教官ノ中ヨリ公學模範學校ノ主事ヲ命シ同校ニ關スル事務ヲ掌ラシムルコ

トヲ得

同日勅令第二百四十三號を以て左の如く臺灣總督府國語傳習所官制が定められた。

臺灣總督府國語傳習所官制

第一條 臺灣總督府國語傳習所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

教諭

助教諭

書記

第二條 所長ハ各所一人縣、廳ノ高等官又ハ教諭ヲシテ之ヲ兼ネシム

所長ハ知事、廳長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第三條 教諭ハ五十二人判任トス生徒ノ教授ヲ掌ル

助教諭ハ二十人判任トス教諭ノ職務ヲ助ク

第四條 書記ハ二十八人判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

從來國語學校官制及國語傳習所官制は臺灣總督府直轄諸學校官制として同一の勅令中に規定せられて居たが、今回之を分つて上記の如く二箇の勅令としたのである。

同日又勅令第二百四十四號を以て左の如く臺灣總督府直轄諸學校官制廢止の件が定められた。

明治二十九年勅令第九十四號臺灣總督府直轄諸學校官制ハ本年勅令第二百四十二號臺灣總督府國語學校官制及勅令

第二百四十三號臺灣總督府國語傳習所官制施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

明治三十年九月十日臺灣總督府令第四十二號を以て左の如く臺灣總督府國語學校規則中に改正が行はれた。

明治二十九年九月令第三十八號臺灣總督府國語學校規則第二十條及第二十一條中左ノ通改正ス

第二十條第三項讀書作文ノ中普通文體ノ次ニ「及漢文」ノ三字ヲ加ヘ且書翰文ノ次ニ「臺灣尺牘」ノ四字ヲ加フ

第二十一條教科課程表第一學年ノ每週教授時間中修身ヲ一時ニ讀書作文ヲ九時ニ理科ヲ二時ニ改メ且讀書作文第一學年ノ課程中普通文ノ次ニ「漢文(臺灣句讀)」ノ六字ヲ加ヘ同第二學年ノ課程中普通文ノ次ニ「漢文 臺灣句讀」ノ六字ヲ及書翰文ノ次ニ「臺灣尺牘」ノ四字ヲ加フ

明治三十年十月十六日左記臺灣總督府令第五十號が發せられた。これは本島に居住する内地人の爲に初等普通教育を授くるの必要あるも、別に一校を構成するだけの兒童數を得る能はざるが如き事情ある場所に於ては、國語傳習所をして別に教場を設けて内地人の兒童を教育せしむるの便宜を與へんとする趣旨に出でたものである。

臺灣總督府國語傳習所ハ別ニ教場ヲ設ケテ内地人ノ學齡兒童ヲ教育スルコトヲ得但其教則ハ明治三十年六月府令第二十八號臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程ニ準據スヘシ

明治三十年十月二十一日左記勅令第三百六十五號が發せられた。

明治二十九年勅令第九十二號臺灣總督府稅關官制第六條中同年勅令第九十五號臺灣總督府郵便及電信局官制第五條中同年勅令第九十六號臺灣總督府燈臺所官制第三條中同年勅令第九十七號臺灣總督府測候所官制第三條中明治三十年勅令第九十三號臺灣總督府巡查看守教習所官制第三條第二項及第四條中同年勅令第六百六十二號臺灣總督府製藥所

官制第三條中同年勅令第二百四十二號臺灣總督府國語學校官制第三條及第八條中「臺灣總督府民政局長」又ハ「民政局長」トアルヲ「臺灣總督」ニ改ム

明治二十九年勅令第九十五號臺灣總督府郵便及電信局官制第七條第二項中「臺灣總督府民政局長又ハ」ノ十一字、
明治三十年勅令第九十三號臺灣總督府巡查看守教習所官制第三條第一項中「民政局」ノ三字ヲ削除ス

附則

本令ハ明治三十年十一月一日ヨリ施行ス

右は同日勅令第三百六十二號を以て臺灣總督府官制が定められた結果である。

同日又勅令第三百六十六號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令が改正せられた。

臺灣總督府職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府高等文官ノ官等ハ高等文官官等表ニ依ル

第二條 臺灣總督ノ年俸ハ六千圓民政局長ノ年俸ハ四千圓又ハ四千五百圓財務局長ノ年俸ハ三千五百圓勅任事務官及勅任參事官ノ年俸ハ三千圓又ハ三千五百圓トス

第三條 左ニ掲クル者ノ俸給ハ第一號俸給表ニ依ル但シ稅關長ハ九級俸以上製藥所事務官ハ四級俸以下トス

奏任事務官

奏任參事官

祕書官

第三章 臺灣の教育

第三編 新領土其他に於ける教育

技師

税關長

税關鑑定官

製藥所長

製藥所事務官

第四條 左ニ掲クル者ノ俸給ハ第二號俸給表ニ依ル但シ通譯官ニ等郵便電信局長ハ六級俸以下トス

通譯官

國語學校高等官

郵便及電信局高等官

第五條 判任官ノ俸給ハ判任官俸給表ニ依ル

第六條 同一ノ官職ヲシテ官等ニ依リ其ノ俸給ヲ異ニスル者ハ高等文官官等相當俸給表ニ依リ各其ノ官等ニ照シテ之ヲ給ス

第七條 地方高等官官等俸給ハ明治三十年勅令第五百十三號及同年勅令第五百十六號ノ定ムル所ニ依ル

第八條 本令ニ規定セサルモノハ明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス

官俸給令ヲ適用ス

附則

第九條 本令ハ明治三十年十一月一日ヨリ施行ス

第十條 明治二十九年勅令第九十九號臺灣總督府職員官等俸給令同年勅令第七十號並明治三十年勅令第六十八號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

高等文官官等表

親任	勅任		奏任							
	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	八等	上	
總督	民政局長	同 上								
		財務局長								
		事務官	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
		參事官	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
			秘書官	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
			技師	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
				通譯官	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
			税關長	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
			税關鑑定官	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上
			製藥所長	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上	同 上

明治三十一年一月二十八日臺灣總督府令第三號を以て左の如く私立學校設置廢止規則が定められた。
私立學校設置廢止規則左ノ通相定ム

私立學校設置廢止規則

第一條 本令ニ於テ私立學校ト稱スルハ本島人ノ設立ニ係ル書房及義塾ヲ除キ其他ノ各種學校ヲ云フ

第二條 私立學校ヲ設置セントスルトキハ校主若ハ校長ヨリ左ノ各項ヲ具シ辨務署長ヲ經テ縣知事廳長ノ認可ヲ受クヘシ

一 設置ノ目的

一 學科學期課程及試験法等

一 入退學ノ規則休日授業料等

一 校主若ハ校長及教員ノ履歴

一 教科用圖書

一 經費ノ收入支出及其細目

一 生徒ノ概數

一 位地及名稱

一 學校ノ略圖及其坪數

第三條 私立學校ヲ廢止セントスルトキハ其事由ヲ具シ校主若ハ校長ヨリ辨務署長ヲ經テ縣知事廳長ニ開申スヘシ

第四條 本令ノ施行ニ關スル細則ハ縣知事廳長之ヲ定ムヘシ

明治三十一年三月四日臺灣總督府令第七號を以て左の如く臺灣總督府國語學校規則中に改正が行はれた。

明治二十九年九月九日府令第三十八號臺灣總督府國語學校規則中左ノ通改正ス

第四條中「内地人」ノ下「ノ學齡兒童」ノ五字ヲ削リ「竝本島」ノ下ニ「人」ノ一字ヲ加フ

第五條第二項中「學齡内」ヲ「年齡滿六歲以上滿十七歲以下」ニ改ム

右の改正は第四條に「國語學校附屬學校ハ内地人ノ學齡兒童竝本島ノ幼年者及青年者ニ須要ナル教育ヲ施シテ」云々とあつたのを改めて學齡兒童の文字を削り、第五條第二項に「附屬學校ノ生徒ハ學齡内ノ内地人竝年齡八歲以上二十五歲以下ノ本島人トス」とあつたのを改めて「年齡滿六歲以上滿十七歲以下ノ内地人」云々としたのである。これは次に述べる如く第四附屬學校に新に尋常中學科が置かるることとなり、附屬學校が必ずしも初等普通教育機關たるに止まらざることとなつたので自然規定の改正を必要とするに至つたが爲である。

同日臺灣總督府令第八號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程中に改正が行はれ、新に尋常中學科が置かるることとなつた。

明治三十年六月六日府令第二十八號臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程中左ノ通改正ス

第一條中「兒童」ヲ「幼年者及青年者」ニ改ム

第二條 本校ニ小學科及尋常中學科ヲ置ク其修業年限ハ小學科ヲ六箇年トシ尋常中學科ヲ五箇年トス但小學科ニアリテハ別ニ補習科ヲ置キ其修業年限ヲ二箇年トス

第四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第四條ノ二 尋常中學校ノ教科目ハ倫理、國語及漢文、英語、歴史、地理、數學、博物、物理及化學、習字、圖畫、體操トス

前項教科目ノ外唱歌ヲ隨意科目トス

第五條 學級ノ編制ハ小學科ニアリテハ五十名ヲ以テ一學級トシ尋常中學校ニアリテハ三十名ヲ以テ一學級トス但

小學科第四學年マテハ男女トモ同一ノ學級ニ編入シ小學科第五學年第六學年及補習科ニアリテハ之ヲ區別シ尋常

中學校ニアリテハ男子ノミヲ以テ編制ス

第七條中「小學科」ヲ「全學科」ニ改ム

第二章「教授ノ要旨及程度」ヲ「小學科ノ教授ノ要旨及程度」ニ改ム

第二章ノ次ニ左ノ一章ヲ加フ

第三章 尋常中學校ノ教授ノ程度及授業ノ時數

第二十四條 尋常中學校ノ教授ノ程度及各教科目授業ノ時數ハ明治十九年六月文部省令第十四號並明治二十七年三月

部省令第七號ニ依ル

書式第二號中「小學科」ヲ「小學科」ニ改ム
補習科」ヲ「補習科」ニ改ム
尋常中學校」

書式第三號中「小學校」ヲ「小學校」ニ改ム
尋常中學校」ニ改ム

明治三十一年五月二十二日臺灣總督府令第二十七號を以て左の如く臺灣總督府國語學校並國語傳習所給費生支給規則中に改正が行はれた。

明治二十九年九月九府令第四十號臺灣總督府國語學校並國語傳習所給費生支給規則中左ノ通改正ス

第二條 國語學校師範部生及同語學部ノ内地人タル給費生ニハ一日食費金二十五錢手當金十五錢ヲ支給シ本島人タル給費生ニハ一日食費金十五錢手當金五錢ヲ支給ス

第三條中語學部以下十三字ヲ删除シ「附屬學校」ノ下ニ「ノ」ノ一字ヲ挿入ス

第五條中「語學部」ノ下「内地人タル」ノ五字ヲ删除ス

明治三十一年六月七日臺灣總督府令第三十號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程中に改正が行はれた。

明治三十年六月六府令第二十八號臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程第二章第二十三條中「教科課程」ノ下へ「並教科用書配當表」ノ八字並補習科教科課程表ノ次へ左ノ教科用書配當表ヲ加フ

教科用書配當表

學科	學年	
	第一學年	第二學年
讀 書	本 尋常小學讀本 卷一	同上 卷二、三
	同上	同上 卷四、五
	同上	同上 卷六、七
	本 高等小學讀本 卷一、二	同上 卷三、四
	同上 卷五、六(男)	同上 卷七、八(男)
補 習 科	第一學年	同上 卷一、二
	第二學年	同上 卷三、四

第一條 臺灣總督府高等文官ノ官等ハ高等文官官等表ニ依ル

第二條 臺灣總督ノ年俸ハ六千圓民政長官ノ年俸ハ四千圓又ハ四千五百圓參事官長及勅任事務官ノ年俸ハ三千圓又ハ三千五百圓トス

第三條 左ニ掲クル者ノ俸給ハ第一號俸給表ニ依ル但シ税關長ハ九級俸以上トス

奏任事務官

參事官

祕書官

技師

税關長

税關鑑定官

製藥所長

醫院高等官

第四條 左ニ掲クル者ノ俸給ハ第二號俸給表ニ依ル

國語學校高等官

警察官及司獄官練習所奏任教官

第五條 一等郵便電信局長ノ俸給ハ第三號俸給表ニ依ル

第六條 判任官ノ俸給ハ判任官俸給表ニ依ル

第七條 同一ノ官職ニシテ官等ニ依リ其ノ俸給ヲ異ニスルモノハ高等文官官等相當俸給表ニ依リ各其ノ官等ニ照シテ之ヲ給ス

第八條 地方官ノ官等俸給ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第九條 本令ニ規定セサルモノハ明治二十五年勅令第九十六號高等官官等俸給令及明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ヲ適用ス

附則

本令ハ明治三十一年六月二十日ヨリ施行ス

明治三十年勅令第五百十六號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

(別表)

高等文官官等表

勅任	親任		奏任	
	一等	二等	三等	四等
總督				
民政長官	同	上		
參事官長	同	上		
參事官	同	上		
事務官	同	上		
	同	上		
	同	上		
	同	上		
	同	上		
	同	上		
	同	上		
	同	上		
	同	上		

第一號俸給表		醫局長	醫院長	一等郵便局長	警察官及司獄官練習所教官	國語學校教授	國語學校長	製藥所長	稅關鑑定官	稅關長	技師	秘書官
年俸	一級二千八百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	二級二千六百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	三級二千四百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	四級二千二百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	五級二千圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	六級千八百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	七級千六百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	八級千四百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	九級千二百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	十級千圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	十一級九百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
年俸	十二級八百圓	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

第一號俸給表

第三號俸級表		判任官俸給表
年俸	一級千六百圓	一級六十圓
年俸	二級千四百圓	二級五十圓
年俸	三級千二百圓	三級四十五圓
年俸	四級千圓	四級四十圓
年俸	五級九百圓	五級三十五圓
年俸	六級八百圓	六級三十圓
年俸	七級七百圓	七級二十五圓
年俸	八級六百圓	八級二十圓
年俸	九級五百圓	九級十五圓
年俸	十級四百圓	十級十二圓

第三號俸級表

判任官俸給表

高等文官官等相當俸給表		官名
三	等	事務官
四	等	參事官
五	等	秘書官
六	等	製藥所長
七	等	事務官
八	等	製藥所長
九	等	事務官
十	等	製藥所長
十一	等	事務官
十二	等	製藥所長

高等文官官等相當俸給表

明治三十一年七月十四日臺灣總督府令第五十二號を以て左の如く臺灣總督府國語學校土語專修科規則が定められた。
臺灣總督府國語學校土語專修科規則左ノ通相定ム
臺灣總督府國語學校土語專修科規則

第三編 新領土其他に於ける教育

- 第一條 臺灣總督府國語學校ニ土語專修科ヲ附置ス
- 第二條 土語專修科ハ本島ニ於テ公私ノ業務ニ就カントスル者ニ須要ナル土語ヲ專修セシムルヲ以テ目的トス
- 第三條 土語專修科ノ生徒ハ年齢十六歳以上二十五歳以下ニシテ入學試験ニ及第シタル者タルヘシ
- 第四條 土語專修科ノ教科目ハ土語漢文トス
- 第五條 土語專修科ノ修業年限ハ二箇年以内トス
- 第六條 土語專修科生徒ノ授業料ハ之ヲ徴收セス
- 第七條 土語專修科生徒ノ教科用書ハ自辨トス
- 第八條 土語專修科ノ教科課程ハ左表ノ如シ

學年	科目	授時週間教	
		第一學年	第二學年
土語	一、二	音韻ノ性質 會話 作文	會話 作文
漢文	六	古文及時文ノ講讀	同上
計	一、八	一、八	一、八

第九條 此規則ニ規定スルモノ、外ハ明治二十九年九月府令第三十八號臺灣總督府國語學校規則ヲ適用ス

明治三十一年七月二十八日勅令第七十八號を以て左の如く臺灣公學校令が定められた。

臺灣公學校令

- 第一條 公學校ハ街庄社又ハ數街庄社ニ於テ其ノ設置維持ノ經費ヲ負擔シ得ルモノト認ムル場合ニ限り知事廳長之カ設立ヲ認可スルモノトス
- 第二條 公學校ノ種別、編制、教則等ハ臺灣總督ノ定ムル所ニ依ル
- 第三條 公學校ニ就學スル生徒ノ父兄又ハ後見人ハ授業料ヲ納ムヘシ其ノ金額竝ニ收入ノ方法ハ知事廳長之ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ
- 第四條 第一條ニ掲クル經費負擔ノ概目ハ左ノ如シ
- 一 校舍校具及體操場ノ設備竝ニ其ノ維持ニ要スル諸費
 - 一 職員ニ關スル諸費 俸給並ニ旅費ヲ除ク
 - 一 學務委員ニ關スル諸費
 - 一 前各項外ノ校費
- 第五條 寄附金其ノ他ノ收入金ヲ以テ前條ニ掲クル一切ノ校費ヲ支辨シ得ル場合ニ於テハ授業料ヲ徴收セサルコトヲ得
- 第六條 收入支出ノ方法ハ知事廳長之ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ
- 第六條 公學校資産ノ管理ニ關スル規程ハ知事廳長之ヲ定ム
- 第七條 公學校ノ教科用圖書ハ臺灣總督ノ檢定ヲ經タルモノタルヘシ
- 第八條 公學校教員ハ臺灣總督ノ檢定ヲ經タル公學校教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ
- 第九條 辨務署長又ハ支署長ハ知事廳長ノ命ヲ承ケ公學校ヲ管理スヘシ

第三章 臺灣の教育

第十條 公學校設置區域内ニハ二名以上ノ學務委員ヲ置クヘシ其ノ職務ニ關スル規程ハ知事廳長之ヲ定ム

附則

第十一條 本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス

第十二條 國語學校附屬學校並ニ國語傳習所ノ設備ハ其ノ全部ヲ公學校ニ讓與スルコトヲ得

從來本島人に對する初等普通教育機關としては、總督府の直轄に係る官立學校たる國語學校附屬學校及國語傳習所があつたが、國庫支辨の學校のみを以て初等普通教育の普及を圖ることは困難であるので、今回右の如く廣く街庄社又は數街庄社を設立主體とする公立學校たる公學校が認めらるることとなつたのである。

公學校令制定の結果本島人に對する初等普通教育は公學校に於て之を行ふこととなつたが、蕃人に對する教育を公學校として行ふことは經費負擔の點より見ても不可能であつたので、國語傳習所に於て從來の如く之を行ふこととした。即ち公學校令制定後に於ては國語傳習所は専ら蕃人教育の機關となつたのである。

同日勅令第七十九號を以て左の如く臺灣公學校官制が定められた。

臺灣公學校官制

第一條 臺灣公學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長

教諭

訓導

第二條 學校長ハ各校一人判任トス辨務署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

學校長ハ教諭ヲシテ之ヲ兼ネシム

第三條 教諭ハ判任トス生徒ノ教授ヲ擔任シ校長ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ從事ス

第四條 訓導ハ判任官ノ待遇トス教諭ノ職務ヲ助ク

訓導ノ俸給ハ臺灣總督定ムル所ノ規定ニ依ル

附則

本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス

内地に於ては公立學校の職員は師範學校長を除く外總て官吏待遇者であるが、公立學校たる臺灣公學校の職員は訓導を除く外之を純然たる官吏としたのであつた。此の如く公立學校の職員を本則として之を純然たる官吏とする點は此後に述べる臺灣に於ける總ての公立學校職員に關しても同様である。

臺灣公學校の學校長及教諭の等級俸給に關しては、臺灣總督府職員官等俸給令中に規定せられて居る。此の點は特別の場合を除き此後に述べる臺灣に於ける總ての公立學校職員に關しても同様である。

官吏たる臺灣公學校職員の分限懲戒等に關しては一般官吏に對する規程の適用を受くるものなることは勿論である。此點は後に述べる臺灣に於ける總ての官吏たる公立學校職員に關しても同様である。

官吏待遇者たる臺灣公學校訓導の俸給に關しては、後に述べる如く明治三十一年九月臺灣總督府令第八十八號を以て之を定められた。

同日又勅令第八十號を以て左の如く臺灣總督府小學校官制が定められた。言ふまでもなく小學校は内地人に初等普通教育を授くる機關である。漸次内地人の本島に居住するもの増加するに従ひ、此種教育機關の必要を見るに至り今回總督府の官立學校として之を設置することとしたのである。而して同年八月先づ臺北、基隆、新竹、臺南の四箇所に小學校が設置されたのであつた。

臺灣總督府小學校官制

第一條 臺灣總督府小學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長

訓導

第二條 學校長ハ各校一人判任トス辨務署長又ハ支署長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

學校長ハ訓導ヲシテ之ヲ兼ネシム

第三條 訓導ハ判任トス兒童ノ教育ヲ擔任シ校長ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附則

本令ハ明治三十一年十月一日ヨリ施行ス

明治三十一年八月十六日臺灣總督府令第七十七號を以て左の如く臺灣總督府國語學校規則中に改正が行はれた。これは前に述べた如く今回新に公學校なるものが認めらるることとなつた結果である。

明治二十九年^{九月}府令第三十八號臺灣總督府國語學校規則中左ノ通改正ス

第二條中「師範部ハ」ノ下ニ「公學校」ノ三字ヲ加ヘ「並」ヲ「又ハ」ト改ム

第五條中附屬學校ノ下ニ「公學校」ノ三字ヲ加フ

第八條第九條第二項第十條第二項ヲ削除ス

第十一條 附屬學校ニ關スル規程ハ別ニ之ヲ定ム

第十二條 學年ハ九月一日ニ始リ翌年七月十日ニ終ル之ヲ分テ三學期トス

第十三條 九月一日ヨリ十二月二十八日ニ至ルマテヲ第一學期トシ一月四日ヨリ三月三十一日ニ至ルマテヲ第二學

期トシ四月一日ヨリ七月十日ニ至ルマテヲ第三學期トス

第十四條中但書ヲ左ノ通改ム

但夏期休業前六週間及夏期休業後四週間ハ每週教授時間ヲ十時以内減スルコトヲ得

第十五條中學年末ノ下三月以下十六字ヲ「七月八日ヨリ同月十日ニ至ル」ト改ム

第二十四條第二十五條第二十六條第三十條第三十二條中附屬學校入學願ノ書式第四十一條中第二號書式ヲ削除ス

同日臺灣總督府令第七十八號を以て左の如く臺灣公學校規則が定められた。

臺灣公學校規則左ノ通相定ム

臺灣公學校規則

第一章 主旨

第一條 公學校ハ本島人ノ子弟ニ徳教ヲ施シ實學ヲ授ケテ國民タルノ性格ヲ養成シ同時ニ國語ニ精通セシムルヲ

以テ本旨トス

第二條 公學校ハ土地ノ情況ニ依リ別ニ速成科ヲ設ケ夜間休業日又ハ其他通常ノ教授時間外ニ於テ専ラ國語ノ教授ヲ爲スコトヲ得

第二章 編制

第三條 公學校ノ生徒ハ年齢八歳以上十四歳以下トス

第四條 公學校ノ教科目ハ修身、國語、作文、讀書、習字、算術、唱歌、體操トシ其修業年限ハ六箇年トス

第五條 學年ハ二月一日ニ始リ翌年一月三十一日ニ終ル之ヲ分テ二學期トス

第六條 二月一日ヨリ七月十日ニ至ルマテ第一學期トシ九月一日ヨリ翌年一月三十一日マテ第二學期トス

第七條 教授日數ハ一學年凡四十週トシ教授時數ハ每週二十八時乃至三十三時トス但夏季休業前六週間及夏季休業後四週間ハ每週教授時間ヲ十時以内減スルコトヲ得

第八條 年中休業日ハ左ノ如シ

一 祝日大祭日

一 日曜日

一 夏季 七月十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

一 年末年始 十二月二十九日ヨリ翌年一月三日ニ至ル

土地ノ情況ニ依リテハ夏季休業ヲ爲サスシテ毎朝數時間ノ教授ヲ爲スコトヲ得

第三章 教授ノ要旨及教科ノ程度

第九條 公學校教授ノ要旨左ノ如シ

一 徳教ヲ施スニハ人トシテ必須ナル徳義ノ教訓ト我國民トシテ必要ナル性格ノ陶冶トニ注意センコトヲ要ス

一 實學ヲ授クルニハ其知識技能ノ精確ニシテ實用ニ適センコトヲ要ス故ニ常ニ生活ニ必須ナル事項ヲ撰ヒテ之ヲ

教授シ反覆練習シテ應用自在ナラシムヘシ

一 各教科目ノ教授ハ其目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相連絡シテ補益センコトヲ要ス

一 身體ノ發達ヲ完クシ且國語ニ精熟セシムルコトハ本島民ニアリテ殊ニ必要トス故ニ教授ノ際ハ常ニ生徒ノ衛生

及用語ニ注意シ併テ阿片ノ害毒タルコトヲ知悉セシメンコトヲ要ス

第十條 公學校教科ノ程度左ノ如シ

一 修身ハ人道實踐ノ方法ヲ授ケ日常ノ禮儀作法ニ嫻ハシメ且教育ニ關スル 勅語ノ大意及本島民ノ遵守スヘキ重

要ナル諸制度ノ大要ヲ授ク

修身ヲ授クルニハ所定ノ教授時間ニ於テスルノミナラス教員躬親ラ生徒ノ模範トナリ常ニ其操行ニ注意シ隨時

ノ訓誡ヲ施シ以テ躬行ノ實蹟ヲ擧ケシメンコトヲ要ス

一 國語ハ音韻ノ性質言語ノ種類典則應用及會話ノ實習並地理歴史理科ニ關スル講説ヲ授ク

國語ヲ授クルニハ本國現行ノ言語ヲ用キテ自己ノ思想ヲ精密ニ流暢ニ言明シ且他人ノ言語ヲ明瞭ニ解釋スルコ

トニ熟セシムルヲ以テ目的トシ常ニ土語ト對照シテ其意義ヲ會得セシメ兼テ言語及文章ノ典則ニ通セシメンコ

トヲ要ス

一 作文ハ假名ノ單語短句並漢字交リノ話文、普通文、書簡文、公用文及普通ノ漢文尺牘ヲ授ク

作文ヲ授クルニハ常ニ國語及讀書ト相待テ其目的ヲ達センコトヲ務メ思想ノ排列言語ノ表出ニ注意シ公私ニ適應スル日常必須ノ文章ヲ作ラシメ兼テ習字科ニ連絡セシメンコトヲ要ス

一 讀書ハ假字ノ單語、單句及平易ナル話文並普通文ノ讀方ヲ授ケ且之ト併行シテ古體ノ漢文ニ就キ句讀及訓點ヲ授ケ

讀書ヲ授クルニハ常ニ國語作文ノ教授ニ伴ヒ文字ノ音訓及語勢ニ注意シ又之ヲ土語ニ譯述セシメテ語句文章ノ解否ヲ檢シ能ク全體ノ意義ヲ了解セシメ兼テ智徳ヲ啓發セシメンコトヲ要ス

一 習字ハ假字楷書行書及草書ノ順序ニ依リ假字文漢字交リノ單語短句普通文書簡文公用文等ヲ授ケ又之ト併行シテ最初ヨリ漢字ヲ授ケ

習字ヲ授クルニハ先ツ姿勢及執筆ノ法ヨリ始メ次ニ筆ノ運用及字畫ノ結構ヲ知ラシメ運筆ハ務メテ澁滯セサラシメ特ニ速寫ニ熟セシメンコトヲ要ス

一 算術ハ先ツ實物ノ計ヘ方、加減乗除並算用數字及臺灣數字ヲ授ケ次ニ加減乗除四則應用複名數及分數小數ノ初步ヲ授ケ

算術ヲ授クルニハ先ツ珠算ヨリ始メテ筆算ニ及ホシ日常適切ノ應用問題ヲ課シ殊ニ暗算ニ熟達セシメ兼テ精密ノ思想ヲ養成センコトヲ要ス

一 唱歌ハ單音唱歌ヲ授ケ

唱歌ヲ授クルニハ祝日大祭日及諸儀式ニ用キルモノ並普通ノ歌曲ヲ授ケ耳及發聲器ヲ練習シ兼テ徳性ヲ涵養セシメンコトヲ要ス

一體操ハ遊戲及普通體操ヲ授ケ

體操ヲ授クルニハ常ニ生徒ノ姿勢ニ注意シ支體ノ成長ヲシテ均一ナラシメ且健康ナル身體ト快活ナル精神トヲ保チ能ク規律ヲ守ルノ習慣ヲ養成センコトヲ要ス

第十一條 公學校ノ教科課程左ノ如シ

公學校教科課程表 (編者註・課程表は官報記載のまま)

學年	教科目	時間	修身	國語	讀書
第一學年	第一學年	五	人道實踐ノ方法及禮儀作法	音韻並簡易ナル言語ノ種類及會話ノ假字並漢字ノ書取及話文	小學讀本及掛圖(孝經三子經)
第二學年	第二學年	五	同上	同上	同上
第三學年	第三學年	六	同上	言語ノ典則應用及會話初級並國語讀本初級	小學讀本卷一(論語)
第四學年	第四學年	六	同上	同上	小學讀本卷二
第五學年	第五學年	九	教育ニ關スル勅諭ノ大意及本島民ノ遵守スルキ重要ナル制度	言語ノ典則應用及會話初級並國語讀本初級	小學讀本卷三(孝經三子經)
第六學年	第六學年	九	同上	同上	小學讀本卷四(論語)

習字	四 假字(楷書)	四 假字(交リノ楷書)	四 同上	四 同上	四 假字(交リノ楷書) 書簡文及公用文(行書)	二 書簡文及公用文(行書)	二 同上
算術	三 算物ノ計ヘ方並其加減乗除及數字	三 算物ノ計ヘ方並其加減乗除及數字 珠算ノ布算ル加減	四 珠算ノ加減乗除及通常ノ小數ノ計	四 筆算及珠算ノ加減乗除	五 同上及複名數	五 複名數及分數及小數ノ初歩	
唱歌	一 單音唱歌						
體操	二						
計	二八						

第十二條 公學校長ハ本則定ムル所ノ教授ノ要旨及程度ニ基キ一學年中ニ授クル所ノ教授細目ヲ製スヘシ

第四章 入退學及出席等

第十三條 生徒ノ募集ハ每學年ノ末ニ於テシ入學ハ每學年ノ始トス

第十四條 生徒入學ノ節ハ左式ノ願書ヲ公學校長ニ差出スヘシ

(書式) 略

第十五條 生徒半途退學セントスルトキハ左式ノ願書ヲ公學校長ニ差出スヘシ

(書式) 略

第十六條 生徒タルノ本分ニ違背シ又ハ成業ノ見込ナキモノハ停學又ハ退學ヲ命スルコトアルヘシ

第十七條 傳染病若ハ厭惡スヘキ疾病ニ罹リタル生徒又ハ一家中ニ傳染病者アル生徒ハ出席ヲ許サス

第十八條 生徒ノ操行ハ常ニ之ヲ觀察シテ學年末ニ至リ之カ調査表ヲ製スヘシ

第十九條 試験ハ生徒學業ノ進歩及習熟ノ度ヲ檢定シテ教授上ノ參考ニ供シ又ハ其卒業ヲ認定スルヲ以テ目的トス

第二十條 試験ノ成績ハ點數ヲ以テ之ヲ評定シ一教科目ニ付百點ヲ以テ定點トス

第二十一條 各學期試験ノ得點ヲ平均シタルモノヲ一學年間ノ學業成績點トス

第二十二條 本則ニ規定セル各學年ノ教科課程ヲ修了セリト認定スルモノニハ左式ノ證書ヲ授與スヘシ

(書式) 略

第二十三條 本則ニ規定セル教科課程ヲ卒業セリト認定スルモノニハ左式ノ證書ヲ授與スヘシ

(書式) 略

第二十四條 此規則施行ニ關スル細則ハ知事廳長之ヲ定ムヘシ

同日臺灣總督府令第七十九號を以て左の如く臺灣公學校設置廢止規則が定められた。

臺灣公學校設置廢止規則左ノ通相定ム

臺灣公學校設置廢止規則

第一條 公學校ヲ設置セントスルトキハ街、庄、社長ヨリ左ノ事項ヲ記載シ辨務署長ヲ經テ知事廳長ノ認可ヲ受クヘシ

一 名稱

一 位置及敷地建物ノ圖面(百分一平面圖)

一 生徒ノ概數

第三章 臺灣の教育

一 速成科ノ有無

一 基本財産ノ有無

第二條 公學校ヲ分離シ若ハ他ノ公學校ト合併スルトキハ其理由ヲ具シ更ニ第一條ノ手續ニ依ルヘシ

第三條 公學校ヲ廢止スルトキハ街、庄、社長ヨリ其事由ヲ具シ辨務署長ヲ經テ知事廳長ノ認可ヲ受クヘシ

第四條 此規則施行ニ關スル細則ハ知事廳長之ヲ定メ臺灣總督ニ報告スヘシ

同日左記臺灣總督府令第八十號が發せられた。

臺灣總督府國語學校及臺灣總督府國語傳習所教員タリシ者ハ公學校教員免許狀ヲ授與シタル者ト同一ノ效ヲ有スルモノトス但其有效年限ハ明治三十一年十月一日ヨリ明治三十六年九月三十日ニ至ル五箇年間トス

同日左記臺灣總督府令第八十一號が發せられた。

臺灣總督府小學校ニ於ケル學年學期教授日數及年中休業日等ハ明治二十九年九月府令第三十八號臺灣總督府國語學校規則ニ準據シ其教授上ニ關スル諸件ハ明治三十年六月府令第二十八號臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程ニ準據スヘシ

當時内地に於ては義務教育たる尋常小學校は四箇年課程であつたが、臺灣總督府小學校は右の如く國語學校第四附屬學校規程に準據し之を六箇年課程としたのである。

同日又左記臺灣總督府告示第五十三號が發せられた。

明治二十九年五月府令第五號臺灣總督府國語學校及同附屬學校ノ名稱位置ハ明治三十一年十月一日ヨリ左ノ通改定ス

名 稱	位 置
臺灣總督府國語學校	臺北
臺灣總督府國語學校第一附屬學校	艋舺
臺灣總督府國語學校第二附屬學校	臺北
臺灣總督府國語學校第三附屬學校	士林街

右の告示第五十三號は其文句を見たのみでは頗る明瞭を缺くものがあるが、實は次の如き意味を含んで居るのである。即ち曩に明治二十九年五月臺灣總督府令第五號を以て八芝林に在るものが第一附屬學校、艋舺に在るものが第二附屬學校、大稻埕に在るものが第三附屬學校と定められ、其後明治三十年六月臺灣總督府令第二十七號を以て臺北の第四附屬學校が追加せられたのであるが、今回公學校令の實施に伴ひ、從來の第一附屬學校及第三附屬學校は何れも公學校に變更せられたので、從來の第二附屬學校が第一附屬學校となり、從來の第四附屬學校が第二附屬學校となつたのである。而して今回特に認められた第三附屬學校なるものは明治三十年四月に設けられた從來の第一附屬學校の女子分教場を改めたのに外ならぬ。

明治三十一年八月十九日臺灣總督府告示第五十六號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第二附屬學校及臺灣總督府小學校授業料規則が定められた。

明治三十一年八月告示第五十三號ニ依リ設置スヘキ臺灣總督府國語學校第二附屬學校及臺灣總督府 學校授業料規則
左ノ通相定ム

臺灣總督府國語學校第二附屬學校及臺灣總督府小學校授業料規則

第一條 臺灣總督府國語學校第二附屬學校及臺灣總督府小學校ニ就學スル生徒ハ左記ノ授業料ヲ納ムヘシ

一 小學校第一學年ヨリ第四學年マテ一人月額金二十錢

一 小學校第五學年以上及補習科一人月額金五十錢

一 尋常中學校一人月額八十錢

第二條 貧窮ニシテ授業料ヲ納ムルコト能ハサル者アル場合ニ於テハ特ニ其全額若ハ幾分ヲ免除スルコトアルヘシ

第三條 前半箇月間ニ退學シ又ハ後半箇月間ニ入學スル生徒ハ各半額ノ授業料ヲ納ムヘシ

第四條 授業料ハ夏季休業並學校ノ都合ニ依リ其休校全月ニ互リ若ハ本人ノ病氣缺席一箇月ニ渉ルモノハ之ヲ免除

ス

明治三十一年八月二十日左記臺灣總督府令第八十四號及第八十五號が發せられた。

○臺灣總督府令第八十四號

明治三十一年八月告示第五十三號ニ依リ設置スヘキ臺灣總督府國語學校第一附屬學校規程ハ明治三十一年八月府令第七十八號臺灣公學校規則ニ準據スヘシ

○臺灣總督府令第八十五號

明治三十一年八月告示第五十三號ニ依リ設置スヘキ臺灣總督府國語學校第二附屬學校規程ハ明治三十年八月府令第二十八號臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程ニ準據スヘシ

前述べた如く國語學校第四附屬學校は第二附屬學校となつたに拘らず、第四附屬學校規程は依然第四附屬學校規程として其效力を存續することとしたので、右臺灣總督府令第八十五號に第二附屬學校の規程は第四附屬學校規程に據るべきことを定めたのである。

明治三十一年八月二十八日臺灣總督府令第八十六號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第三附屬學校規程が定められた。此第三附屬學校は前に述べた如く明治三十年四月に設けられた第一附屬學校女子分教場を改めたものである。

明治三十一年八月告示第五十三號ニ依リ設置スヘキ臺灣總督府國語學校第三附屬學校規程左ノ通相定ム

臺灣總督府國語學校第三附屬學校規程

第一章 通則

第一條 本校ハ臺灣總督府國語學校規則第四條ニ依リ本島ノ女子ニ普通學及手藝ヲ授クルヲ以テ目的トス

第二條 本校ニ本科及手藝科ヲ置キ本科ハ普通學手藝科ハ主トシテ手藝ヲ授クルモノトス其修業年限ハ本科ヲ六箇年手藝科ヲ三箇年トス

第三條 本科ノ教科目ハ修身國語讀書習字算術唱歌及裁縫トシ手藝科ノ教科目ハ修身國語裁縫編物造花刺繡讀書習字算術唱歌トス但造花刺繡ノ二科目ハ生徒ノ志望ニ依リ其一ヲ課スルモノトス
本科ノ卒業生ニシテ手藝科ニ編入シタル者ニハ國語讀書習字及算術ノ四科目ヲ課セサルモノトス

第四條 本科ノ生徒ハ年齢八歳以上十四歳以下トシ手藝科ノ生徒ハ十四歳以上二十五歳以下トス
 第五條 學級ノ編制ハ本科ニアリテハ凡ソ四十名ヲ以テ一學級トシ手藝科ニアリテハ三十名ヲ以テ一學級トス
 第六條 各學年修業ノ完キ者ニハ修業證書ヲ與ヘ全學科卒業ノ者ニハ卒業證書ヲ與フ
 第七條 學年ノ始終學期ノ區分教授日數年中休業日入退學及試験等ハ臺灣總督府國語學校規則ニ依ル

第二章 本科及手藝科教授要旨及程度

第八條 教授要旨ハ凡テ臺灣公學校規則第三章第九條第十條ニ準據シ且女子ニ適切ナル徳教及一切ノ事項ヲ選擇シテ教授スルヲ要ス特ニ手藝科學生ニハ家政育兒等ニ關スル方法ヲモ知ラシムヘシ

第九條 裁縫ハ眼及手ヲ練習シテ本島ニ於ケル通常衣服ノ縫方裁方及之ニ附屬スヘキ刺繡ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス

初年ニ於テハ先ツ運針法ヨリ始メ簡易ナル衣服ノ縫方及刺繡ヲ授ケ漸ク進ミテハ通常衣服ノ縫方ヨリ縫方裁方等ヲ授クヘシ

裁縫ノ品類ハ成ルヘク日常所用ノモノヲ撰ミ之ヲ授クル際用具ノ種類衣服ノ保存方及洗濯方等ヲ教示シ常ニ節約利用ノ習慣ヲ養ハントヲ要ス

第十條 編物ハ眼及手ヲ練習シテ衣服ノ附屬品及裝飾品等ノ編方ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス
 編物ヲ授クルニハ先ツ編針ノ使用法ヨリ始メ漸次各品ノ編方ニ及ホシ兼テ補綴ノ方法及廢物利用ノ心得等ヲ知ラシメントヲ要ス

第十一條 造花モ亦眼ト手トヲ練習シテ諸裝飾用ノ造方製法ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス

造花ヲ授クルニハ先ツ造花法ノ心得及之ニ要スル器具材料ノ名稱使用法等ヲ説示シテ製作方ニ移リ漸次技術ヲシテ敏速且精巧ナラシメントニ留意スヘシ

本科ニ於テハ特ニ之ニ關スル圖畫ノ教授ヲナスヘキモノトス

第十二條 刺繡モ亦専ラ眼ト手トヲ練習シテ衣服附屬品其他裝飾品類ノ繡方ニ習熟セシムルヲ以テ要旨トス
 刺繡ヲ授クルニハ先ツ器具材料ノ名稱使用法及刺繡心得等ヲ説示シ下畫ヲ描キ與ヘテ繡方ニ移ラシム漸ク進ミテハ各自下畫ヲ描キ或ハ下畫ナクシテ繡取ルヲ得ルニ至ラシムヘシ
 本科ニ於テハ特ニ之ニ關スル圖畫ノ教授ヲモナスコトヲ要ス

第三附屬學校教科本科課程表

學年	科目	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年		第六學年	
		時數	教授	時數	教授	時數	教授	時數	教授	時數	教授	時數	教授
修身	一・五	人道實踐ノ禮儀作法	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
國語	六	音韻並言語ノ種類假字單語單句簡易ナル會話	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
讀書	六	簡易ナル日用文字ナル漢文	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
習字	四	片假名平假名	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上

科目	第一學年	第二學年	第三學年
算術	三 實物計方並 其加減乘除 及數字	三 珠算ノ加減 乘除ノ通 常小數ノ計	三 同上及複名 數
唱歌	一・五 單音唱歌	一・五 同上	一・五 同上
裁縫	六 運針法	一〇 縫方及刺繡 ノ通	一一 同上
計	二八	二九	三〇
備考	修身唱歌ノ二科目ハ一教時三十分トス 毎日大凡三十分間遊戯ヲ課スヘシ		

第三附屬學校教科手藝科課程表 (編者註・課程表は官報記載のまま)

科目	第一學年	第二學年	第三學年
修身	一 人道實踐ノ方法 禮儀作法	一 同上	一 同上
國語	三 音韻言語ノ種類 假字及假字ノ單語單句等 通單ナル會話	三 言語ノ典則 讀書作文假字ノ語文 會話日常會話	三 同上漢字交リ語文 會話日常會話
裁縫	六 通單ナル刺繡 縫方等	六 刺繡 通單ナル縫方等	六 同上
編物	六 運針法 日用卑近ノ品物編方	六 日用品ノ編方	六 同上
造花	一 器具材料ノ使用法 簪類ノ造方	一 簪類其他裝飾品 造方	一 同上
刺繡	一 運針方 綴繡平繡等	一 けし繡 すじ繡等	一 すから繡 肉入繡等

科目	第一學年	第二學年	第三學年
讀書	三 簡易ナル日用文字 簡易ナル漢文	三 同上	三 同上
習字	一 片假名 平假名	一 日用文字(楷書)	一 日用文字(行書)
算術	一 加減乘除	一 同上	一 同上
唱歌	一 單音唱歌	一 同上	一 同上
計	三四	三四	三四
備考	修身算術及唱歌ノ四科目ハ一教時三十分トス		

(書式) 略

右の第三附屬學校手藝科は本島人女子に對する初等普通教育及簡易高等普通教育といふべきものである。而して其卒業者は他に女教員養成の機關が無かつたが爲に過半各地方公學校の教員として招聘せられた實情であつたので、一面に於ては女子師範教育機關とも見るべきものであつた。

明治三十一年九月四日臺灣總督府令第八十八號を以て左の如く臺灣公學校訓導俸給支給規程が定められた。

臺灣公學校訓導俸給支給規程左ノ通相定ム

臺灣公學校訓導俸給支給規程

第一條 公學校訓導ノ月俸ヲ分チテ十二級トシ左表ニ依リ毎月二十一日之ヲ支給ス

第二條 公學校訓導ハ每級在職滿一年以上ニ至ラサレハ増俸スルコトヲ得ス

第三章 臺灣の教育

- 第三條 月俸ハ就職及増給減給トモ總テ發令ノ翌日ヨリ日割ヲ以テ計算シ廢職退職死亡ノ時ハ當月分ノ全額ヲ支給ス
- 第四條 同一ノ學校ニ勤續スルコト滿五年以上ニ及フ者ハ五箇年毎ニ月俸十分ノ一ノ年功加俸ヲ給スヘシ
- 第五條 病氣ノ爲執務セサルコト三十日ヲ踰ユル者及私事ノ故障ニ依リ執務セサルコト十五日ヲ踰ユル者ハ俸給ノ半額ヲ減ス但公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ忌服ヲ受クル者ハ此限ニアラス
- 第六條 廢職退職者事務引繼殘務調理ノ爲特ニ命ヲ受ケ公務ニ從事スルトキハ其間仍從前ノ月俸ヲ給ス
- 第七條 在職中死亡シタル者ハ月俸二箇月分ヲ其遺族ニ給ス但遺族トハ官吏遺族扶助法ニ於テ遺族ト稱スル者ヲ謂フ

臺灣公學校訓導俸給表

等級	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級	十一級	十二級
金額	四十五圓	四十四圓	三十五圓	三十四圓	二十六圓	二十一圓	十八圓	十五圓	十二圓	十圓	九圓	八圓

明治三十一年九月二十三日左記臺灣總督府令第九十四號が發せられた。

明治三十一年十月一日ヨリ公學校ヲ設立スヘキ所在地ノ國語傳習所甲科生ヲ公學校速成科ニ編入スルトキハ明治三十一年八月府令第七十八號臺灣公學校規則第二條ノ規定ニ拘ラス明治三十二年三月三十一日限通常教授時間内ニ於テ教授スルコトヲ得

明治三十一年十月三十日臺灣總督府令第百號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第三附屬學校規程中に改正が行はれた。

明治三十一年八月府令第八十六號臺灣總督府國語學校第三附屬學校規程第七條中「臺灣總督府國語學校」ヲ「臺灣公學校」ニ改ム

右は第七條に學年の始終學期の區分其他のことは臺灣總督府國語學校規則に依るとなつてゐたのを臺灣公學校規則に依ることに改めたのである。

明治三十一年十一月六日臺灣總督府令第百三號を以て左の如く臺灣公學校規則中に改正が行はれた。

明治三十一年八月府令第七十八號臺灣公學校規則第十一條教科課程表中唱歌及體操ノ課程並時間左ノ通相定ム

唱歌	單音唱歌	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
體操	二	二	同上	二	同上	二	同上	二
計	二八	二八	三〇	三〇	三三	三三	三三	三三

臺灣が我國に歸屬する以前から存在して居た書房義塾のことに關しては、明治三十一年十一月十日臺灣總督府令第百四號を以て左の如く「書房義塾ニ關スル規程」が定められた。

書房義塾ニ關スル規程左ノ通相定ム

書房義塾ニ關スル規程

- 第一條 此規程ハ書房義塾ヲ改良シ漸次公學校ノ教科ニ準セシメ併セテ風儀ヲ矯正スルヲ以テ目的トス
- 第二條 書房義塾ノ教科ハ概シテ從前ノ慣例ニ依ルヘシト雖漸次國語及算術ノ科目ヲ加設スヘシ
- 第三條 書房義塾ニ於テハ成ルヘク授業時間ヲ一定シ教師ハ常ニ生徒ノ動作ニ注意シテ風儀ヲ矯正シ且衛生上ニハ殊ニ留意シテ生徒ノ健康ニハ妨害ナカラシムルヲ要ス
- 第四條 教科用圖書ハ從前ノ慣例ニ依ルモノノ外臺灣總督ニ於テ教育上須要ト認ムル書籍ヲ以テ生徒必修ノ教科書ニ定ムルコトアルヘシ
- 第五條 書房義塾ノ教科ニ國語及算術ノ科目ヲ加設シタルトキハ塾主ヨリ辨務署長ヲ經テ知事廳長ニ届出ツヘシ
- 第六條 書房義塾ハ辨務署長ノ監督ニ屬ス
- 第七條 書房義塾ノ塾主ハ毎年三月三十一日マテニ前期開學中ニ於ケル生徒ノ入退學及年齡父兄ノ職業並學業ノ進度ヲ調査シ辨務署長ニ報告スヘシ
- 第八條 授業管理及衛生等特ニ優等ナル書房義塾ニハ補助費ヲ支給スルコトヲ得
- 第九條 此規程施行ニ關スル細則ハ知事廳長之ヲ定メ臺灣總督ニ報告スヘシ

明治三十一年十二月十七日臺灣總督府令第百十一號を以て左の如く臺灣公學校教員檢定規則が定められた。

明治三十一年勅令第百七十八號臺灣公學校令第八條ニ依リ臺灣公學校教員檢定規則左ノ通相定ム

臺灣公學校教員檢定規則

- 第一條 臺灣總督府ニ臺灣公學校教員檢定委員ヲ置ク
- 第二條 檢定ヲ請ハント欲スル者ハ願書ニ履歷書ヲ添ヘ地方廳ヲ經テ臺灣總督府ニ願出ツヘシ
- 第三條 地方長官ハ前條ニ依リ願書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ付シ臺灣總督ニ具申スヘシ
- 第四條 檢定委員ハ出願者ノ履歷ニ就キ當該地方長官ニ質問スルコトヲ得
- 第五條 檢定ヲ請フ者ハ年齡滿二十一歳以上四十五歳以下ニシテ身體健全品行方正且左ノ資格ノ一ヲ具フルコトヲ要ス

要ス

- 一 臺灣總督府國語學校師範部卒業生並同校所定ノ講習ヲ修了シタル者
 - 一 内地ニ於テ滿三箇年以上小學校教員ノ職ニ從事シ且臺灣土語ヲ習得シタル履歷アル者
- 第六條 前條ノ外地方長官ノ具申ニ依リ學力品行等ニ關シテ適任ト認ムル者ニハ免許狀ヲ授與スルコトアルヘシ但檢定委員ニ於テ必要ト認ムルトキハ漢文及土語ニ就キ試験ヲ行フコトヲ得
 - 第七條 檢定委員ハ此規則ニ依リ施行シタル檢定ノ成績ヲ臺灣總督ニ具申スヘシ
 - 第八條 免許狀ノ效力ハ授與ノ日ヨリ滿五箇年トス但滿期ノ後若干年間延期スルコトアルヘシ
 - 第九條 公學校教員免許狀ノ書式左ノ如シ

(書式) 略

第十條 公學校訓導ニ任用スル者ノ檢定ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

附則

第十一條 明治三十一年八月府令第八十號ニ依リ公學校教員タルノ資格ヲ有スル者ハ地方長官ノ具申ニ依リ免許狀ヲ

授與ス但有效年限ハ明治三十一年十月一日ヨリ起算ス

明治三十二年一月十日臺灣總督府令第二號を以て左の如く臺灣公學校教員檢定規則中に改正が行はれた。

明治三十一年^{十二}府令第百一十一號臺灣公學校教員檢定規則中左ノ通改正ス

第二條ニ左ノ但書ヲ加フ

但國語學校師範部卒業生及同校所定ノ講習ヲ修了シ即時檢定ヲ請フ者ハ國語學校ヲ經由スルモノトス
第三條中地方長官ノ下ニ「及國語學校長」ノ六字ヲ加フ

明治三十二年一月二十日勅令第八號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令中に改正が行はれた。

臺灣總督府職員官等俸給令中判任官俸給表ヲ左ノ如ク改ム

一級	七十五圓	二級	六十圓	三級	五十圓	四級	四十五圓	五級	四十圓
六級	三十五圓	七級	三十圓	八級	二十五圓	九級	二十圓	十級	十五圓

附則

本令ハ明治三十二年二月一日ヨリ施行ス

現任ノ判任官ハ現ニ受クル所ノ俸給額相當ノ俸給ヲ受クルモノトス

明治三十二年一月二十五日勅令第十一號を以て左の如く臺灣總督府國語學校官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府國語學校官制中左ノ通改正ス

第二條中「助教諭」ヲ削ル

第四條第二項中「六人」ヲ「十人」ニ改ム

第五條第一項中「十五人」ヲ「二十四人」ニ改メ第二項ヲ削ル

第七條中「九人」ヲ「七人」ニ改ム

明治三十二年二月八日勅令第三十號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令中に改正が行はれた。

臺灣總督府職員官等俸給令中左ノ通改正ス

第七條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第七條ノ二 技術官ハ事務ノ繁閑ニ依リ俸給最低額以下ヲ給スルコトアルヘシ

明治三十二年三月十九日臺灣總督府令第十六號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第四附屬學校規程中(前述の如く第四附屬學校は第二附屬學校となつて居るので、所謂第四附屬學校規程とは第二附屬學校規程のことである)に改正が行はれた。即ち第二附屬學校には前に述べた如く明治三十一年三月臺灣總督府令第八號を以てする同校規程中の改正に依り尋常中學校が置かれたのであつたが、内地に於て明治三十二年中學校令の改正に依り、從來の尋常中學校が中學校と改められたので臺灣に於ても尋常中學校を中學校と改めたのである。

明治三十年^六府令第二十八號中「尋常中學校」ヲ總テ「中學校」ニ改ム

明治三十二年三月二十四日臺灣總督府令第十八號を以て左の如く直轄國語學校規則中に改正が行はれた。

明治二十九年九月府令第三十八號直轄國語學校規則中左ノ通改正ス

第五條中「尋常」ノ二字ヲ削ル

第七條第二項中歴史ノ下ニ「本邦法令」ノ四字ヲ加フ

第二十二條修身ノ項中「ケ兼ネテ重要ナル府令及告諭ノ大要ヲ授」ノ十七字ヲ削リ地理歴史ノ項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

一 本邦法令ハ憲法及諸法規ノ大要ヲ授ク

本邦法令ヲ授クルニハ務テ法意ノ大要ヲ理會セシメ又律令府令等ハ成ルヘク詳密ニ了解セシメ兼テ理財ノ大要ニ通曉セシメンコトヲ要ス

第二十三條教授課程表修身ノ欄中「重要ナル府令告諭等」ノ九字ヲ削リ同欄及習字ノ欄第三學年ノ每週教授時間ヲ「二」ニ改メ地理歴史ノ欄ノ次ニ左ノ一欄ヲ加フ

本邦法令

二

憲法ノ大要
諸法規及理財ノ大要

醫學教育に關しては前に述べた如く明治三十年四月臺北病院附屬として醫學講習所が設けられ、同院醫員及藥劑師をして公務の餘暇を以て醫學及普通學を講習せしめたが、明治三十二年三月三十一日勅令第九十五號を以て左の如く臺灣總督府醫學學校官制が定められ官立の醫學學校が設置せらるるに至つた。

臺灣總督府醫學學校官制

第一條 臺灣總督府醫學學校ハ臺灣總督ノ管理ニ屬シ醫師ヲ養成スル所トス

第二條 臺灣總督府醫學學校ニ左ノ職員ヲ置ク

校長

教授

助教授

舍監

書記

第三條 校長ハ一人奏任トス臺灣總督ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

校長ハ教授ヲ以テ之ヲ兼ネシム

第四條 教授ハ專任五人奏任トス生徒ノ教授ヲ掌ル

助教授ハ專任五人奏任又ハ判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第五條 舍監ハ專任一人奏任又ハ判任トス校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事務ヲ掌ル

舍監ハ教授又ハ助教授ヲ以テ之ヲ兼ネシムルコトヲ得

第六條 書記ハ專任五人判任トス上官ノ指揮ヲ承ケ庶務會計ニ從事ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

右の醫學校は後に述べる醫學校規則に依ても明なる如く、高等普通教育を修了したる者を入學せしめてこれに醫學を授くる學校ではなく、其程度も低いもので固より嚴正の意味に於ける専門學校ではないのである。

同日勅令第九十六號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令中に改正が行はれた。

臺灣總督府職員官等俸給令中左ノ通改正ス

第三條中醫院高等官ノ次ニ「醫學校高等官」ヲ加フ

第五條中一等郵便電信局長ノ下ニ「及醫學校奏任舍監」ヲ加フ

高等文官等表中醫員藥局長ノ次ニ左ノ二項ヲ加フ

				醫學校教授	同上	醫學校舍監	同上	醫學校助教授	同上	同上	同上	同上	同上
--	--	--	--	-------	----	-------	----	--------	----	----	----	----	----

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

同日勅令第九十七號を以て左の如く臺灣總督府師範學校官制が定められた。

臺灣總督府師範學校官制

第一條 臺灣總督府師範學校ハ知事廳長ノ管理ニ屬シ國語傳習所公學校及書房義塾ノ教員トナルヘキ者ヲ養成スル

所トス

第二條 臺灣總督府師範學校ニ附屬學校ヲ附設ス

第三條 臺灣總督府師範學校ニ左ノ職員ヲ置ク

學校長

教授

助教授

教諭

舍監

書記

第四條 學校長ハ各校一人奏任トス知事廳長ノ命ヲ承ケ校務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第五條 教授ハ各校二人奏任トス師範學校生徒ノ教授ヲ掌ル

助教授ハ各校四人判任トス教授ノ職務ヲ助ク

第六條 教諭ハ各校二人判任トス附屬學校生徒ノ教授ヲ掌ル

第七條 舍監ハ學校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事務ヲ掌ル

舍監ハ教授若ハ助教授ヨリ之ヲ兼ネシム

第八條 書記ハ各校二人判任トス上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

第九條 知事廳長ハ教授若ハ助教授ノ内ヨリ附屬學校主事ヲ命シ同校ニ關スル事務ヲ掌ラシムルコトヲ得

第十條 師範學校設置ノ場所ハ臺灣總督ノ指定スル所ニ依ル

附則

第十一條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

前に述べた如く國語學校師範部は内地人を入學せしめて、國語傳習所並師範學校の教員及小學校の校長若は教員たるべき者を養成する機關であるが、今回設けられた師範學校は本島人を入學せしめて（此ことは師範學校官制に明示して居ないが、後に述べる師範學校規則を見ると明である）國語傳習所、公學校及書房義塾の教員たるべき者を養成する機關である。即ち之に依て初めて本島人に對する師範教育機關が設置せられたのである。

同日勅令第九十八號を以て左の如く臺灣總督府師範學校職員官等俸給令が定められた。

臺灣總督府師範學校職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府師範學校長ノ官等ハ高等官四等以下八等以上教授ノ官等ハ高等官五等以下八等以上トシ其ノ俸給ハ左表ニ依ル

年俸	一級 千六百圓	二級 千四百圓	三級 千二百圓	四級 千圓
	五級 九百圓	六級 八百圓	七級 七百圓	八級 六百圓

第二條 本令ニ規定セサルモノハ明治三十一年勅令第百十三號臺灣總督府職員官等俸給令ヲ適用ス

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

同日勅令第九十九號を以て左の如く「臺灣總督府師範學校長特別任用ノ件」が定められた。

臺灣總督府師範學校長ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者又ハ學位若ハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シタル者又ハ三箇年以上教育ニ關スル公務ニ從事シ月額四十圓以上ノ俸給ヲ受クル判任官及判任官待遇ノ者ニ限り試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ銜ヲ經テ任用スルコトヲ得

同日又勅令第百號を以て左の如く「臺灣總督府國語學校同附屬學校及國語傳習所生徒學資金及旅費日當支給ノ件」中に改正が行はれ、附屬學校の下に師範學校が加へられた。

明治二十九年勅令第三百五號中「附屬學校」ノ下ニ「師範學校」ヲ加フ

附則

本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

明治三十二年四月九日臺灣總督府令第三十號師範學校生徒食費手當金旅費及治療費支給方が定められた。

臺灣總督府師範學校生徒ニハ食費手當金旅費及治療費ヲ支給シ明治二十九年九月府令第四十號國語學校並國語傳習所給費生支給規則ヲ適用ス但食費手當金ハ第二條ノ支給額ニ依ル

同日又臺灣總督府告示第三十九號を以て左の如く師範學校の名稱位置が指定せられた。

臺灣總督府師範學校名稱位置左ノ通相定ム

名稱	位置
臺北師範學校	臺北
臺中師範學校	臺中
臺南師範學校	臺南

明治三十二年四月十三日臺灣總督府令第三十一號を以て左の如く臺灣總督府師範學校規則が定められた。

臺灣總督府師範學校規則左ノ通相定ム

臺灣總督府師範學校規則

第一章 本旨

第一條 師範學校ハ本島人ニシテ國語傳習所公學校及書房義塾ノ教員トナルヘキ者ヲ養成スル所トス

第二條 師範學校附屬學校ハ師範學校生徒實地教授練習ノ用ニ供スルモノトス但地方長官ハ總督ノ許可ヲ經テ師範學校所在地ノ公學校ヲ以テ附屬學校ニ代用スルコトヲ得

第二章 編制等

第三條 師範學校ノ教科目ハ修身、國語作文、讀書、算術、簿記、地理、歴史、理科、習字、唱歌、體操及教授法トス

第四條 師範學校ノ修業年限ハ三箇年トス

第五條 師範學校生徒ノ年齢ハ十八歳以上二十五歳以下トス

第六條 學年ハ四月一日ニ始リ習年三月三十一日ニ終ル之ヲ分チ三學期トス

四月一日ヨリ七月十日マテヲ第一學期トシ九月一日ヨリ十二月二十八日マテヲ第二學期トシ一月四日ヨリ三月三十一日マテヲ第三學期トス

第七條 教授日數ハ一學年凡四十週一週三十四時一日六時トシ土曜日ハ四時トス但夏期休業前六週間及夏期休業後

四週間ハ每週教授時間ヲ十時以内減スルコトヲ得

第八條 年中休業日ハ左ノ如シ

一日曜日

一祝祭日

一學年末

一夏期

一年末年始

三月二十九日ヨリ	三月三十一日ニ至ル
七月十一日ヨリ	八月三十一日ニ至ル
十二月二十九日ヨリ	一月三日ニ至ル

第九條 學級ノ編制ハ全生徒ヲ數學級ニ分チ一學級ノ生徒數ハ凡二十五人以上三十五人以下タルヘシ

第十條 附屬學校ニ關スル規程ハ臺灣公學校規則ニ準據スヘシ

第三章 教授ノ要旨及教科ノ程度等

第十一條 師範學校教授ノ要旨左ノ如シ

- 一 師範學校ハ本島人ニシテ教員トナルヘキ者ヲ養成スル所ナルカ故ニ其教育ハ躬行實踐ヲ旨トシ常ニ皇室ヲ尊ヒ本國ヲ愛シ人倫ヲ重シメ本國的精神ヲ涵養センコトヲ要ス
- 一 徳教ハ教育ノ主腦ナレハ實學ヲ授ケ體育ヲ施スノ際ト雖常ニ之ニ留意センコトヲ要ス
- 一 實學ヲ授ケ知識ヲ廣メ材能ヲ長セシムルハ人ヲシテ専ラ其本分ヲ盡スニ適當ナラシムルニ在リ故ニ宜ク生徒ヲシテ此旨ヲ體認セシムヘシ
- 一 體育ニ於テハ主トシテ衛生上ニ留意シ校舍及身體衣服等ヲ清潔ニシ採光通風ヲ適當ナラシメ殊ニ阿片ノ害毒タルコトヲ知悉セシメンコトヲ要ス
- 一 規律ヲ守リ秩序ヲ保チ師表タルヘキ威儀ヲ具フルハ教員タル者ニ在リテハ殊ニ重要トス故ニ平素長上ノ命令訓誨ニ服從シ起居言動ヲ正クセンコトヲ要ス
- 一 生徒ヲシテ鄙吝ノ心志陋劣ノ思想ヲ去リテ快活ノ氣象ヲ備ヘシメ常ニ責任ヲ重シテ社會ノ公益ヲ廣ムルコトニ務メシムヘシ
- 一 生徒ヲシテ品行ヲ尙クシ學識ヲ廣メシムルノ外教授及管理ノ方法ヲ考究セシメ以テ教育上ノ經驗ヲ積マシムルコトヲ務ムヘシ
- 一 生徒ヲシテ常ニ世態人情ヲ審ニシ通義公道ヲ辨シ且事ヲ處スルノ方法、務ヲ理スルノ順序等ヲ暗練セシムヘシ
- 一 各學科目ノ教授ハ其目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相連絡シテ補益センコトヲ務メ且常ニ國語ノ練習ニ留意セシムコトヲ要ス

第十二條 師範學校ノ生徒ニ課スヘキ教科ノ程度ハ左ノ如シ

一 修身

教育ニ關スル 勅語ノ旨趣ニ基キテ人倫道德ノ要領ヲ授ケ兼テ普通ノ禮法及本島人ノ心得ヘキ重要ナル諸制度ヲ授ク

二 國語、作文

國語ハ日常普通ノ會話並文法及其應用ヲ授ケ作文ハ日用文書翰文及公用文ヲ授ク
國語ヲ授クルニハ本國現行ノ言語ヲ用キテ自己ノ思想ヲ明瞭ニ言明シ且他人ノ言語ヲ正確ニ解釋スルコトニ熟セシムルヲ旨トシ常ニ土語ト對照シテ其意義ヲ會得シ兼テ言語ヲ書取ルコトヲ得セシメンコトヲ要ス
作文ハ主トシテ日常必須ノ事項ニ就キ簡易著實ニシテ公私ノ用ニ適應スヘキ文章ヲ作ラシメ同時ニ土文ニ對照シテ彼我文章ノ典則ニ通セシメンコトヲ要ス

三 讀書

文部省編纂小學讀本、大日本史略、論語、詩經、書經ノ講讀ヲ授ク
讀書ヲ授クルニハ常ニ發音及句讀ニ注意シ時トシテハ之ヲ土語ニ譯述セシメテ語句文章ノ解否ヲ檢シ能ク全體ノ意義ヲ了解セシメンコトヲ要ス

四 算術、簿記

算術ハ珠算ハ加減乗除ノ練習ヲ授ケ筆算ハ整數ノ加減乗除通常ノ分數小數及諸比例ヲ授ケ簿記ハ單式複式ノ方法ニ依リ簿記ノ大要ヲ授ク

算術ヲ授クルニハ成ルヘク實地應用問題ヲ課シ兼テ暗算及速算ニ習熟セシメ且精密ノ思想ヲ養成センコトヲ要ス

簿記ヲ授クルニハ官用及商用ノ二様ニ熟通セシメンコトヲ要ス

五 地理、歴史

地理ハ本島地理本國地理ノ大要及外國地理ノ大要ヲ授ケ歴史ハ本島歴史及本國歴史ノ大要ヲ授ケ

地理ヲ授クルニハ本島及本國ヲ主トシ外國地理ハ本國ト重要ノ關係アル部分ヲ詳ニシテ其他ヲ略ニスヘシ

凡地理ヲ授クルニハ常ニ地圖ニ就キテ之ヲ講究センコトヲ要ス

歴史ヲ授クルニハ務メテ事實ノ關係ニ注意シ文化ノ由來スル所ヲ辨セシメ殊ニ我國體ヲ明ニシテ

尊皇愛國ノ志氣ヲ振起セシメ以テ國民タルノ志操ヲ養成センコトヲ要ス

六 理科

通常ノ天然物、自然ノ現象、物理化學上ノ諸現象及通常諸器械ノ構造作用竝生理衛生ノ大要ヲ授ケ

理科ヲ授クルニハ成ルヘク平生目撃スル所ノ近易ノ實物現象等ニ就キ正確ナル知識ヲ得セシメ以テ日常ノ生

活及生業上ノ實用ニ適セシメンコトヲ要ス

七 習字

假字楷書行書草書及細字ノ速寫ヲ授ケ

習字ヲ授クルニハ姿勢及執筆ノ法ヲ教ヘ次ニ筆ノ運用字ノ結構ヲ知ラシメ字形端正ニシテ運筆澁滯セザラン

コトヲ要ス

八 唱歌

單音唱歌及樂器ノ用法ヲ授ケ

唱歌ヲ授クルニハ歌詞及樂譜ハ本國古今ノ名家ノ作ニ係リ雅正ニシテ兒童ノ心情ヲ快活純美ナラシムルモノヲ撰ヒ以テ徳性ノ涵養ニ資センコトヲ要ス

九 體操

普通體操及遊戲法ヲ授ケ

體操ヲ授クルニハ姿勢ヲ正クシ支體ノ成長ヲ均齊ニシ常ニ健康ナル身體ト快活ナル精神トヲ保チ能ク規律ヲ

守ルノ習慣ヲ得セシメンコトヲ要ス

十 教授法

教授管理ノ大要ヲ授ケ

教授法ヲ受クルニハ理論ニ偏シ高遠ニ馳セス實地ニ適應セシメ且公學校等ニ於ケル教育ノ旨趣及方法ヲ理會セシメ教育者タルノ精神ヲ養ハンコトヲ要ス

第三學年ニ於テハ前半年ニハ各學科ノ教授ヲナシ後半年ニハ專ラ實地ニ就キテ授業ノ練習ヲナサシムルモノトス但學校ノ都合ニヨリ一學級ノ生徒ヲ切半シ前半年又ハ後半年ニ纏メテ之ヲ課セシムルコトヲ得

第十三條 師範學校ノ教科課程表左ノ如シ

臺灣總督府師範學校教科課程表

科目 年	第一學年			第二學年			第三學年		
	授時數	授時數	授時數	授時數	授時數	授時數	授時數	授時數	
修身	一	一	一	同上	同上	同上	同上	同上	
國文	八	八	八	同上及公用文	同上	同上	同上	同上	
讀書	六	六	六	小學讀本 特選及大日本史略 (臺灣句讀)	同上	同上	同上	同上	
算術	五	四	四	珠算 同 同上	珠算 同 同上	珠算 同 同上	珠算 同 同上	珠算 同 同上	
地理	二	二	二	本國地理ノ大要	本國地理ノ大要	本國地理ノ大要	本國地理ノ大要	本國地理ノ大要	
理科	三	三	二	通常ノ自然物及自然ノ現象 生理衛生ノ大要	通常ノ生理衛生ノ大要 物理學上ノ諸現象及 生理衛生ノ大要	同上	同上	同上	
習字	二	二	二	片假字平假字及日用文字 (楷書行書) 細字速寫	日用文字(行書) 細字速寫	日用文字(草書) 細字速寫	同上	同上	
唱歌	二	三	三	單音唱歌	同上及樂器用法	同上	同上	同上	
體操	五	五	三	普通體操及遊戲	同上	同上	同上	同上	
教授法			三		教授管理ノ大要				
計	三四	三四	三四						

第十四條 學校長ハ本則ニ定ムル所ノ教授ノ要旨及程度ニ基キ一學年中ニ授クル所ノ教授細目ヲ製スルモノトス
 第四章 入退學及服務等

第十五條 生徒ノ募集ハ學年ノ末ニ於テシ入學ハ學年ノ始メトス
 第十六條 入學生徒ノ資格ハ漢文ニ通曉シ且官立學校若ハ公學校ヲ卒業シ又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル本島人ニシテ在學中家事ニ係累ナク卒業ノ日ヨリ十箇年間教職ニ従事スル誓約ヲナシ得ルモノタルヘシ但當分ノ内官立學校及公學校ノ第三學年ノ學科ヲ修了シ若ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者ヲ入學セシムルコトヲ得
 第十七條 官立學校及公學校卒業生ノ外ハ入學試驗ヲ施行ス
 第十八條 入學生徒ハ初メ二箇月間ハ試驗生トシテ假入學ヲ許シ其資性品行等ヲ査定シ適任ト認メタル者ニ限り本入學ヲ許スヘシ
 第十九條 生徒ハ卒業證書受得ノ日ヨリ十箇年間ハ知事廳長ヨリ指定ノ學校ニ服務スルノ義務ヲ有スルモノトス
 第二十條 生徒ハ自己ノ便宜ニ依リ退學スルコトヲ得ス
 第二十一條 在學中疾病ニ罹リ修業ニ堪ヘスト認ムル者若ハ成業ノ見込ナキ者又ハ生徒タル本分ニ背反シタル行爲アル者ハ退學ヲ命ス
 第二十二條 怠惰不品行ニシテ退學ヲ命シタル者ハ在學中給與シタル學資金ノ全部若ハ幾部ヲ辨償セシムヘシ
 第二十三條 生徒入學ノ節ハ左式ノ願書ニ履歷書ヲ添ヘ學校長ニ差出スヘシ
 (書式) 略
 第二十四條 本入學ヲ許サレタルトキハ左ノ誓約書ヲ學校長ニ差出スヘシ
 (誓式) 略

第二十五條 試験ハ生徒學業ノ進否及習熟ノ度ヲ檢定シテ教授上ノ參考ニ供シ又ハ其卒業ヲ認定スルヲ目的トス
第二十六條 試験ヲ分テ臨時試験及學年試験ノ二種トス臨時試験ハ一學期中二回以上之ヲ行ヒ學年試験ハ學年ノ終ニ之ヲ行フ但第三學期ニ施行スル臨時試験ハ一回以上トス

第二十七條 各學科目ノ定點ハ一百點トス

第二十八條 試験ノ成績ハ各學科目五十點以上ヲ得之ヲ合計通約シテ六十點以上ヲ得タルモノヲ及第トス但修身ハ平業ノ行狀ヲ參酌シ實地授業唱歌及體操ハ日課點ヲ以テ評點ヲ定ム

第二十九條 各學期ノ成績ハ其學期間ニ於テ施行シタル臨時試験ノ通約點數ヲ合計通約シ學年ノ成績ハ三學期ノ通約點數ト其學年試験ノ點數ト合計通約シタルモノヲ以テ之ヲ表ス

第三十條 第一第二學年ノ成績ニシテ及第シタル者ニハ第一號ノ證書ヲ與ヘ第三學年ノ成績ニシテ及第シタル者ニハ第二號ノ證書ヲ與フルモノトス

(第一號及第二號書式) 略

第六章 寄宿舎

第三十一條 師範學校ノ生徒ハ一定ノ寄宿舎ニ常住セシムヘシ但設備ノ都合ニヨリ當分ノ内通學セシムルモ妨ナシ

第三十二條 寄宿舎ハ可成自習室寢室ヲ區別スヘシ但唱歌體操ハ自習室ニ於テ自習スルコトヲ得ス

第三十三條 諸規則命令ヲ執行スルニ便ナランカ爲各學級ニ級長ヲ置クコトヲ得

級長ハ舍監ノ推薦ニ依リ學校長之ヲ命ス

第三十四條 指定ノ場所外ニ於テ飲食喫煙スルヲ許サス又校外ヨリ私ニ飲食物ヲ入ルルヲ禁ス

第三十五條 生徒ハ常ニ身體ヲ清潔ニシ服裝ヲ正フシ舍内ハ殊ニ清淨ニスヘシ

第三十六條 始業終業晨起就褥等總テノ相圖ハ擊柝若ハ點鐘ヲ以テ之ヲ報ス

第七章 貸與

第三十七條 生徒在學中必要ノ圖書及器具器械ハ渾テ之ヲ貸與ス

第三十八條 休業若ハ疾病等ニ依リ寄宿舎ニ在ラサル間ハ貸與品ヲ返納セシムヘシ

第三十九條 貸與品ヲ破損シ若ハ紛失シタルトキハ本人ヨリ之ヲ辨償セシムルモノトス

第八章 補則

第四十條 此規則施行ニ關スル細則ハ知事廳長之ヲ定メ臺灣總督ニ報告スヘシ

右の如く本島人を入學せしむる師範學校は之を國語學校師範部に比ぶれば入學資格も低く其程度に於て劣れるものであつたのである。

明治三十二年五月十四日臺灣總督府令第三十八號を以て左の如く臺灣總督府國語學校並臺灣總督府國語傳習所給費生支給規則中に改正が行はれた。

明治二十九年九月府令第四十號臺灣總督府國語學校並臺灣總督府國語傳習所給費生支給規則中左ノ通改正ス

第十三條 此規則施行ニ關スル細則ハ知事廳長若ハ國語學校長之ヲ定メ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

明治三十二年六月二十一日勅令第二百九十二號を以て左の如く「臺灣總督府國語學校同附屬學校師範學校及國語傳習

所生徒學資金及旅費日當支給ノ件」中に改正が行はれ、臺灣總督府醫學校生徒にも學資金を支給することを得ることとなつた。

明治二十九年勅令第三百五號中左ノ通改正ス

「學資金及旅費日當ヲ」ノ下ニ「臺灣總督府醫學校生徒ニハ學資金ヲ」ヲ加フ

明治三十二年七月七日臺灣總督府令第五十四號を以て左の如く臺灣總督府醫學校規則が定められた。

臺灣總督府醫學校規則左ノ通相定ム

臺灣總督府醫學校規則

第一條 臺灣總督府醫學校ハ本島人ニ醫學ヲ授ケ醫師ヲ養成スル所トス

第二條 修業年限ハ本科ヲ四箇年トシ豫科ヲ一箇年トス

第三條 學級ハ本科ヲ四學級トシ豫科ヲ一學級トス

第四條 學年ハ四月十五日ニ始リ翌年四月十四日ニ終ル之ヲ分チテ三學期トス第一學期ハ四月十五日ヨリ七月十日

ニ至ルマテトシ第二學期ハ九月一日ヨリ十二月二十八日ニ至ルマテトシ第三學期ハ一月四日ヨリ四月十四日ニ至

ルマテトス

第五條 教授日數ハ一學年凡四十週教授時數ハ每週三十六時トス但夏期休業ノ前後各五週間ハ每週教授時數ヲ十時

以內減スルコトヲ得

第六條 休業日ハ左ノ如シ

一 日曜日

一 祝日大祭日

一 夏期

七月十一日ヨリ
八月三十一日ニ至ル

一 年末年始

十二月二十九日ヨリ
翌年一月三日ニ至ル

一 臨時休業

第七條 本科ノ教科目左ノ如シ

一 解剖學及實習

一 生理學及實習

一 物理學及實驗

一 化學及實驗

一 醫用動物學

一 醫用植物學

一 胎生學

一 組織學

一 皮膚病學

一 處方學

一 調劑術實習

一 病理學總論

一 外科學總論

一 病理解剖學

一 診斷學

一 綱帶學

一 病理學各論

一 外科各論

一 梅毒學

一 小兒病學

一 醫用器械學

一 外科手術學

- 一 內科學臨床實習
- 一 產科學
- 一 法醫學
- 一 婦人病學
- 一 衛生制度
- 一 醫學歷史
- 一 體操
- 一 眼科學及實習
- 一 外科學臨床實習
- 一 精神病學
- 一 衛生學
- 一 細菌學
- 一 外國語

第八條 豫科ノ教科目左ノ如シ

- 一 動物學
- 一 植物學
- 一 物理學
- 一 化學
- 一 數學
- 一 地理
- 一 歷史
- 一 倫理
- 一 外國語
- 一 體操

第九條 本科及豫科ノ各學級割課程及教授時間ハ醫學校長之ヲ定ム

第十條 入學ノ期ハ每學年ノ始トス但時宜ニ依リ臨時入學ヲ許可スルコトアルヘシ

第十一條 生徒入學ノ節ハ二名以上ノ保證人連署セル願書ニ履歷書ヲ添ヘ身分年齢ニ就キ街庄社長ノ證明ヲ得テ之ヲ醫學校長ニ差出スヘシ

第十二條 入學ノ許可ヲ得タル者ハ左式ノ契約書ヲ醫學校長ニ差出スヘシ但學資ノ給與ヲ受クル者ハ左式中括弧内ノ文字ヲ記入スヘシ

(書式) 略

第十三條 生徒ニハ學資ヲ給與スルコトアルヘシ其給與方法ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第十四條 生徒ニシテ學資ノ給與ヲ受ケタル者卒業證書受得ノ日ヨリ五箇年間ハ臺灣總督府ヨリ指定ノ職務ニ從事スルノ義務ヲ有ス但特別ノ事情アリテ臺灣總督府ノ許可ヲ受ケタル者ハ此限ニアラス

第十五條 不良ノ行爲アリテ生徒タルノ本分ニ違背スルモノト認めタル者又ハ成業ノ見込ナキ者ハ停學又ハ退學ヲ命スルコトアルヘシ

第十六條 試験ハ生徒學業ノ進歩及習熟ノ度ヲ檢定シテ教授上ノ參考ニ供シ又ハ其卒業ヲ認定スルヲ以テ目的トス

第十七條 試験ヲ分テ臨時定期ノ二種トス臨時試験ハ一學期中一回以上之ヲ行ヒ定期試験ハ每學年ノ終ニ之ヲ行フ

第十八條 學業ノ優劣ハ試験點數ヲ以テ之ヲ評定シ一科目ニ付百點ヲ以テ定點トス

第十九條 一學期中ノ臨時試験點ヲ合計通約シタルモノヲ以テ一學期間ノ成績ヲ表シ三學期ノ評點數ヲ合計通約シ之ニ學年末ノ定期試験點ヲ加ヘ二分シタルモノヲ以テ一學期間ノ成績ヲ表ス

第二十條 此規則所定ノ教科ヲ卒業セリト認定スルモノニハ卒業證書ヲ授與ス

同日又臺灣總督府令第五十五號を以て左の如く臺灣總督府醫學校生徒給與規則が定められた。

臺灣總督府醫學校生徒給與規則

臺灣總督府醫學校生徒給與規則

第一條 臺灣總督府醫學校規則第十三條ニ依リ生徒ニ學資ヲ給與スルトキハ此規則ニ依ル

第二條 學資トハ食費、手當金、治療費及一定ノ被服ヲ謂フ

- 第三條 食費及手當金ハ生徒一人ニ付一日食費金二十錢手當金五錢ヲ支給ス
- 生徒ニ六里以外ノ地ニ修學ヲ命シタルトキハ一人ニ付一日金一圓五十錢以下ノ特別手當ヲ支給ス
- 第四條 夏期休業中寄宿舎ニ居住セサル者ニハ食費及手當金ヲ支給セス
- 第五條 疾病ノ外正當ノ事由ナクシテ缺席シタル者ニハ當日ノ食費及手當金ヲ支給セス
- 第六條 寄宿生徒ノ疾病治療費ハ官給トス但自己ノ便宜上寄宿舎以外ニ於テ療養スルトキハ自辨タルヘシ
- 第七條 寄宿生徒ニシテ疾病ニ罹リ自己ノ便宜上寄宿舎以外ニ於テ療養スルトキハ其間食費及手當金ヲ支給セス
- 第八條 食費及手當金ハ毎月分ヲ翌月三日ニ支給ス若休業日ニ當ルトキハ繰下ケトス
- 第九條 疾病ノ外不都合ノ所爲アリテ退學ヲ命シ若ハ自己ノ都合ニ依リ退學シタルトキハ在學中支給シタル食費及手當金ノ全部ヲ本人又ハ保證人ヨリ一時ニ完納セシム

附則

第十條 此規則施行ノ際給費生ヲ命シタル生徒ニ限り特ニ二十五圓以下ノ學資ヲ一時支給スルコトヲ得

明治三十二年七月九日臺灣總督府令第五十八號を以て左の如く臺灣總督府國語學校並國語傳習所給費生支給規則中に改正が行はれた。

明治二十九年府令第四十號臺灣總督府國語學校並國語傳習所給費生支給規則第一條中「支給ス」ノ下ニ「但國語學校留學生ノ支給ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム」ノ二十四字ヲ加フ

明治三十二年七月十六日臺灣總督府令第七十號を以て左の如く私立學校設置廢止規則中に改正が行はれた。

明治三十一年一府令第三號私立學校設置廢止規則中左ノ通追加ス

第五條 從來外國人ノ設立ニ係ル私立學校ハ第二條各項ノ届出ヲナシテ改正條約實施後ニ之ヲ繼續スルコトヲ得

明治三十二年七月二十八日左記臺灣總督府令第八十四號が發せられた。

公學校ニ於テ女子教育ノ爲別ニ教場ヲ設置スルトキハ其學科目教授ノ要旨及程度ハ明治三十一年八月府令第八十六號

臺灣總督府國語學校第三附屬學校規程ニ準據スヘシ

明治三十二年八月二十日臺灣總督府令第四百四號を以て左の如く臺灣總督府醫學學校規則中に改正が行はれた。

明治三十二年七月府令第五十四號臺灣總督府醫學學校規則第七條中「一調劑術實習」ノ次ニ「一藥物學」ノ四字ヲ追加ス

明治三十二年九月二十七日左の如く臺灣總督府令第一百五號を以て國語學校並國語傳習所給費生支給規則中の改正、臺灣總督府令第十六號を以て師範學校生徒食費手當金旅費及治療費支給に關する件中の改正が行はれた。

○臺灣總督府令第一百五號

明治二十九年九月府令第四十號國語學校並國語傳習所給費生支給規則第一條中手當金ノ下ニ「被服」ノ二字ヲ加フ

○臺灣總督府令第十六號

明治三十二年四月令第三十號本文手當金ノ下ニ「被服」ノ二字ヲ加フ

明治三十二年十一月十三日勅令第四百三十一號を以て左の如く臺灣總督府師範學校官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府師範學校官制中左ノ通改正ス

第五條第六條及第八條中各校ノ下ニ「専任」ヲ加フ

明治三十二年十二月一日臺灣總督府令第二百二十六號を以て左の如く臺灣公學校教員檢定規則中に改正が行はれた。此

改正に依り公學校教員檢定規則が公學校教諭檢定規則と改められたのであつた。

明治三十一年^{十二}府令第一百一十一號臺灣公學校教員檢定規則中左ノ通改正ス

臺灣公學校教員檢定規則ヲ臺灣公學校教諭檢定規則ニ改ム

第一條第九條第十一條中「教員」ヲ「教諭」ニ改ム

第九條免許狀書式中公學校ノ上ニ「臺灣」ノ二字ヲ加フ

第五條ノ末ニ左ノ一號ヲ加フ

一 滿五箇年以上臺灣公學校訓導ノ職ニ從事シ品行優良學術授業超衆ト認め地方長官ニ於テ特ニ具申シタル者

第十條 免許狀ヲ授與シタルトキハ其都度之ヲ公學校教諭候補者名籍ニ登録シ且其氏名ヲ廣告スヘシ

同日臺灣總督府令第二百二十七號を以て左の如く臺灣公學校訓導檢定規則が定められた。

臺灣公學校訓導檢定規則左ノ通相定ム

臺灣公學校訓導檢定規則

第一條 地方官廳ニ臺灣公學校訓導檢定委員ヲ置キ縣ニ於テハ其縣官吏並師範學校長教員應ニ於テハ其廳官吏並公學校長教諭五人以下ヲ以テ組織シ地方長官之ヲ命スヘシ

地方長官ハ檢定委員中ニ就キ委員長ヲ命スヘシ

第二條 檢定委員長ハ此規則ニ依リ施行シタル檢定ノ成績ヲ地方長官ニ具申スヘシ

第三條 地方長官ハ前條ノ具申ニ依リ合格ト認ムル者ニ免許狀ヲ授與スヘシ

第四條 檢定ヲ請ハント欲スル者ハ願書ニ履歷書ヲ添ヘ辨務署長ヲ經テ地方官廳ニ願出ツヘシ但師範學校ヲ卒業シ即時檢定ヲ請フ者ハ當該師範學校長ヲ經由スヘシ

第五條 辨務署長師範學校長ハ前條ニ依リ願書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ付シ地方長官ニ具申スヘシ

第六條 檢定ヲ請フ者ハ年齢滿二十一歳以上ニシテ身體健全品行方正且左ニ掲クル者タルヘシ

一 臺灣總督府師範學校卒業生

二 臺灣總督府國語學校語學部國語學科卒業生ニシテ特ニ實地授業ニ堪フル者但檢定委員ニ於テ必要ト認ムルトキハ實地授業ノ試験ヲ行フコトヲ得

三 臺灣總督府國語學校附屬學校特別科卒業生及國語傳習所甲科卒業生ニシテ滿一箇年以上官立公立ノ學校ニ於テ教員ノ業務ニ從事シタル者

四 他ノ縣、廳ニ於テ公學校訓導ノ免許狀ヲ受得シタル者

五 其他學力品行等ニ關シ地方長官ニ於テ特ニ適任ト認メタル者アルトキハ臺灣總督ノ認可ヲ得テ免許狀ヲ授與スルコトヲ得

第七條 前條各號ノ外特ニ試験ニ依リテ合格セル者ニ免許狀ヲ授與スルコトヲ得但其試験ノ科目程度ハ臺灣總督府師範學校規則第十二條ニ準據スヘシ

第八條 免許狀ノ效力ハ授與ノ日ヨリ滿五箇年トス但滿期ノ後若干年間延期スルコトヲ得

第九條 公學校訓導免許狀ノ書式左ノ如シ

(書式) 略

第十條 地方長官ハ公學校訓導候補者名籍ヲ作り免許狀ヲ授與シタル都度之ニ登録シ其氏名等ヲ臺灣總督ニ具申シ兼テ管内ニ告知スヘシ

第十一條 此規則ニ關スル細則ハ地方長官之ヲ定メ臺灣總督ニ具申スヘシ

明治三十二年十二月二十八日臺灣總督府令第三百三十五號を以て左の如く臺灣總督府醫學校生徒給與規則中に改正が行はれた。

明治三十二年^七府令第五十五號臺灣總督府醫學校生徒給與規則中左ノ通改正ス

第三條第二項中「生徒ニ」ノ下ニ「往復」ノ二字ヲ加フ

第十條中「此規則施行ノ際給費生ヲ命シタル生徒ニ限り」ヲ「新ニ募集シタル生徒ニ給費生ヲ命シタルトキハ」ニ改ム

明治三十三年二月七日臺灣總督府令第十一號を以て左の如く臺灣總督府師範學校規則中に改正が行はれた。

明治三十二年^四府令第三十一號臺灣總督府師範學校規則中左ノ通改正ス

第六條 學年ハ九月一日ニ始リ翌年七月十日ニ終ル之ヲ分テ三學期トス

九月一日ヨリ十二月二十八日マテヲ第一學期トシ一月四日ヨリ三月三十一日マテヲ第二學期トシ四月一日ヨリ七月十日マテヲ第三學期トス

明治三十三年二月十八日左記臺灣總督府令第十八號が發せられた。

公學校小學校及書房義塾ノ教員ヲシテ學術ヲ補修セシムル必要アル場合ニ於テハ師範學校ニ講習科ヲ附設シ同校内若ハ便宜ノ地ニ之ヲ開クコトヲ得其學科課程並講習方法等ハ臺灣總督ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ施行スヘシ但五十日以内ノ短期講習ハ此ノ限ニアラス

明治三十三年二月二十三日勅令第三十七號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令中に改正が行はれた。

臺灣總督府職員官等俸給令中左ノ通改正ス

第五條 一等郵便電信局長醫學校兼任舍監及翻譯官ノ俸給ハ第三號俸給表ニ依ル
高等文官等表中醫學校舍監醫學校助教ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

翻譯官	同上	同上	同上
-----	----	----	----

明治三十三年三月十一日左の如く臺灣總督府令第二十四號を以て臺灣總督府國語學校並國語傳習所給費生支給規則中の改正、臺灣總督府令第二十五號を以て師範學校生徒食費手當金旅費及治療費支給に關する件中の改正が行はれた。

○臺灣總督府令第二十四號

明治二十九年九月府令第四十號臺灣總督府國語學校並國語傳習所給費生支給規則中左ノ通改正ス

第二條中食費金十五錢ヲ金十八錢ニ改ム

第四條第二項ノ旅費日當表ヲ左ノ通改ム

汽車賃	一哩	汽船賃	一海里	車馬賃	一哩	宿泊料	一夜	日當	一日
四錢	四錢	十錢	五錢	五錢	十錢	二十錢			

第四條ノ次ニ左ノ一條ヲ加ヘ以下順次條數ヲ繰下ク

第五條 國語學校給費生學術實地研究又ハ觀風ノ爲本島内若ハ内地ニ旅行スルトキハ左表ニ依リ旅費ヲ支給ス但本條ニ依リ旅費ヲ支給スル日數間ハ第二條ノ食費ヲ支給セス

區分	汽車賃	汽船賃	宿泊料	一夜	日當	一日
内地	下等	實費	五錢	十錢	三十錢	
本島	同	同	七錢	十錢	三十錢	

○臺灣總督府令第二十五號

明治三十二年四月府令第三十號中但書左ノ通改正ス

但食費ハ一日金十五錢以上十八錢以下ノ範圍内ニ於テ臺灣總督ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定メ手當ハ一日金五錢ヲ支給ス

明治三十三年四月十八日臺灣總督府令第三十九號を以て左の如く臺灣總督府國語學校規則中に改正が行はれた。

明治二十九年九月府令第三十八號臺灣總督府國語學校規則中左ノ通改正ス

第十二條 學年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル之ヲ分チテ三學期トス

第十三條 四月一日ヨリ七月十日ニ至ルマテ第一學期トシ九月一日ヨリ十二月二十八日ニ至ルマテ第二學期トシ翌年一月四日ヨリ三月二十八日ニ至ルマテ第三學期トス

第十五條中第三號ヲ左ノ通改ム

一 學年末 三月二十九日ヨリ 同月三十一日ニ至ル

明治三十三年七月三日勅令第二百九十一號を以て左の如く「臺灣總督府國語學校長任用ニ關スル件」が定められた。臺灣總督府國語學校長ハ學位若ハ學士ノ稱號ヲ有シ一箇年以上教育ニ關スル公務ニ従事シタル者又ハ高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者ニシテ一箇年以上引續キ月額七十五圓以上ノ俸給ヲ受ケ現ニ奏任官若ハ奏任官待遇ノ職ニ在ル者ニ限り試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ詮衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

明治三十三年七月十六日勅令第三百七號を以て左の如く臺灣總督府國語學校官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府國語學校官制中左ノ通改正ス

第四條第一項中「八人」ヲ「七人」ニ改ム

第六條 舍監ハ一人奏任トス學校長ノ指揮ヲ承ケ生徒ノ取締ニ關スル事ヲ掌ル

同日勅令第三百八號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令中に改正が行はれた。

臺灣總督府職員官等俸給令中左ノ通改正ス

第五條中一等郵便電信局長ノ下ニ「國語學校舍監警察官及司獄官練習所奏任舍監」ヲ加フ

高等文官等表中國語學校教授ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

國語學校	同上	同上	同上
------	----	----	----

同表中警察官及司獄官練習所教官ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

警察官及司獄官練習所舍監	同上	同上	同上
--------------	----	----	----

同日又勅令第三百九號を以て左の如く「臺灣總督府國語學校舍監任用ニ關スル件」が定められた。

臺灣總督府國語學校舍監ハ特別任用ノ規定ニ依リ臺灣總督府高等行政官タル者、一箇年以上奏任教官若ハ奏任官待遇ノ教職ニ在ル者又ハ三箇年以上判任教官若ハ判任官待遇ノ教職ニ在ル者ニ限り試験ヲ要セス文官高等試験委員ノ

詮衡ヲ經テ任用スルコトヲ得

明治三十三年八月十日臺灣總督府令第六十二號を以て左の如く臺灣總督府國語學校卒業生服務規則が定められた。

臺灣總督府國語學校卒業生服務規則

臺灣總督府國語學校卒業生服務規則

第一條 此規則ノ卒業生トハ臺灣總督府國語學校ニ於テ給費ヲ受ケ卒業シタル生徒及講習ヲ了シタル者ヲ謂フ

第二條 卒業生ハ卒業證書受得ノ日ヨリ其服務年限間ハ臺灣總督ノ指定シタル官廳若ハ學校ニ於テ職務ニ従事スヘキ義務ヲ有スルモノトス但國語學校語學部卒業生ハ臺灣總督ノ許可ヲ得テ官廳外ノ事務ニ従事スルコトヲ得

第三條 卒業生ハ其服務年限中毎年末服務ノ情況ヲ國語學校長ニ報告スヘシ

第四條 第二條ノ義務ヲ終リタル者ハ其經歷書ヲ具シテ臺灣總督ニ届出ツヘシ

第五條 第二條ノ義務ヲ盡スコト能ハサル事故アル者ハ其理由ヲ具シテ義務ノ免除ヲ臺灣總督ニ請願スルコトヲ得

第六條 卒業生ニシテ左ノ事項ニ該當スル者アルトキハ臺灣總督ノ命ニ依リ在學中給與シタル學資ノ全部若ハ幾部ヲ償還セシム

一 第二條ノ義務ヲ盡サ、ル者但第五條ニ依リ臺灣總督ノ許可ヲ得タル者ハ學資ノ全部若ハ幾部ノ償還ヲ免除スルコトアルヘシ

二 服務年限中懲戒免職又ハ教員免許狀褫奪ノ處分ヲ受ケタル者

第七條 卒業生ニシテ服務年限中更ニ高等ナル學校ニ入學セントスル者アルトキハ時宜ニ依リ許可スルコトアルヘシ

シ但服務セシ年月數義務年月數ノ半ニ滿タサルトキハ其入學中ノ年月數ハ義務年限中ヨリ除算スルモノトス

明治三十三年十月二十二日左の如く國語學校鐵道電信科假規程が定められた。

臺灣總督府國語學校鐵道電信科假規程

- 一 本校語學部國語學科第三學年生中ノ志望者ニ鐵道運輸又ハ電氣通信ニ關スル教科ヲ課ス
- 二 修業年限ハ明治三十三年十一月一日ヨリ明治三十四年七月十日マテトス但時宜ニヨリ期限ヲ伸縮スルコトアルヘシ
- 三 鐵道運輸志望ノ生徒ニアリテハ國語學科第三學年ノ教科中修身國語讀書作文習字及唱歌ノ授業時間ヲ通シテ毎週十二時乃至十八時ヲ減シ其時間ヲ以テ英語運轉信號電氣通信調查驛務ノ六科目ヲ課ス
- 四 電氣通信志望ノ生徒ニアリテハ國語學科第三學年ノ教科中修身國語讀書習字及唱歌ノ授業時間ヲ通シテ毎週十二時乃至十八時ヲ減シ其時間ヲ以テ英語現字通信電信法規電信電話大意ノ科目ヲ課ス
- 五 本規定ニ於テ定メタルモノノ外總テ明治二十九年制定臺灣總督府國語學校規則ニ依ル

明治三十三年十一月十二日勅令第三百九十七號を以て左の如く臺灣總督府國語學校官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府國語學校官制中左ノ通改正ス

- 第四條中「教授ハ」ノ下及「助教授ハ」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ
- 第五條中「教諭ハ」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ

第六條中「舍監ハ」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ

第七條中「書記ハ」ノ下ニ「專任」ノ二字ヲ加フ

明治三十三年十一月臺北縣農事試驗場に講習生制度が設けられ、同月又臺南縣農事試驗場に於ても同様の制度が設けられた。講習期間は何れも一箇年であつた。これは本島人に對する農業教育機關である。

明治三十三年十二月私立臺南盲啞學校が設立せられた。これは財團法人臺南慈惠院教育部の經營に係るものである。

明治三十四年一月私立臺灣文庫が臺灣協會の附屬事業として開始せられた。これは後明治四十年に廢止せられた。

明治三十四年五月一日勅令第八十五號を以て左の如く臺灣總督府國語學校官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府國語學校官制中左ノ通改正ス

- 第四條第一項中「七人」ヲ「十一人」ニ、第二項中「十人」ヲ「十三人」ニ改ム
- 第五條中「二十四人」ヲ「二十六人」ニ改ム

同日勅令第八十六號を以て左の如く臺灣總督府國語傳習所官制中に改正が行はれた。

臺灣總督府國語傳習所官制中左ノ通改正ス

第三條第一項中「五十二人」ヲ「十六人」ニ改メ第二項ヲ削ル

第四條中「二十八人」ヲ「六人」ニ改ム

同日又勅令第八十九號を以て左の如く「臺灣總督府國語學校長任用ニ關スル件」中に改正が行はれた。

明治三十三年勅令第二百九十一號中「高等師範學校ノ卒業證書ヲ有スル者」ヲ「高等師範學校若ハ舊東京師範學校中學師範學科ヲ卒業シタル者」ニ改ム

明治三十四年六月二十八日臺灣總督府令第四十一號を以て左の如く臺灣公學校教諭檢定規則中に改正が行はれた。

明治三十一年^{十二}府令第一百十一號臺灣公學校教諭檢定規則第五條中「二十一歳」ヲ「二十歳」ニ改ム

明治三十四年十一月十一日勅令第二百三號を以て左の如く臺灣總督府師範學校官制中に改正が行はれた。これは師範學校長を臺灣總督の直接監督の下に置くことに改めたのである。

臺灣總督府師範學校官制中左ノ通改正ス

第一條第四條第九條中「知事廳長」ヲ「臺灣總督」ニ改ム

同日勅令第二百四號を以て左の如く臺灣總督府小學校官制中に改正が行はれた。これは小學校長に對する辨務署長又は支署長の監督を廳長又は支廳長の監督に改めたのである。

臺灣總督府小學校官制中左ノ通改正ス

第二條中「辨務署長又ハ支署長」ヲ「廳長又ハ支廳長」ニ改ム

同日勅令第二百五號を以て左の如く臺灣公學校令中に改正が行はれた。これは辨務署長又は支署長が公學校を管理したのを改め廳長又は支廳長をして管理せしむることとしたのである。

臺灣公學校令中左ノ通改正ス

第九條 公學校ハ廳長又ハ支廳長之ヲ管理スヘシ

同日勅令第二百六號を以て左の如く臺灣公學校官制中に改正が行はれた。これは公學校長が辨務署長又は支署長の監督を受けたのを改め廳長又は支廳長の監督を受くることとしたのである。

臺灣公學校官制中左ノ通改正ス

第二條中「辨務署長又ハ支署長」ヲ「廳長又ハ支廳長」ニ改ム

同日勅令第二百八號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令が改正された。

臺灣總督府職員官等俸給令

第一條 臺灣總督府高等文官ノ官等ハ別表高等文官官等表ニ依ル

第二條 臺灣總督ノ年俸ハ六千圓民政長官ノ年俸ハ四千圓又ハ四千五百圓參事官長及鐵道部技師長ノ年俸ハ三千圓

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第二條第三條中辨務署長ヲ經テ縣知事廳長ヲ「廳長ヲ經テ臺灣總督」ニ改ム
第四條ヲ削ル

同日臺灣總督府令第七十五號を以て左の如く臺灣公學校規則中に改正が行はれた。これは第二十四條に於て公學校規則の施行に關する細則は知事廳長之を定むることとなつて居たのを廢止したのである。

明治三十一年八月府令第七十八號臺灣公學校規則中第二十四條ヲ削ル

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

同日臺灣總督府令第七十六號を以て左の如く臺灣公學校設置廢止規則中に改正が行はれた。

明治三十一年八月府令第七十九號臺灣公學校設置廢止規則中左ノ通改正ス

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第一條第三條中「辨務署長ヲ經テ知事」ヲ削ル

第四條ヲ削ル

同日臺灣總督府令第七十八號を以て左の如く書房義塾に關する規程中に改正が行はれた。

明治三十一年十一月府令第四百號書房義塾ニ關スル規程中左ノ通改正ス

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第五條中「辨務署長ヲ經テ知事」ヲ削ル

第六條第七條中辨務署長ヲ「廳長」ニ改ム

第九條ヲ削ル

同日臺灣總督府令第八十號を以て左の如く師範學校生徒食費手當金旅費及治療費支給方中に改正が行はれた。これは地方長官に於て食費の額を定めたのを師範學校長に於て之を定むることに改めたのである。

明治三十二年四月府令第三十號中「地方長官」ヲ「師範學校長」ニ改ム

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

同日臺灣總督府令第八十一號を以て左の如く臺灣總督府師範學校規則中に改正が行はれた。

明治三十二年四月府令第三十一號臺灣總督府師範學校規則中左ノ通改正ス

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第二條但書ヲ削ル

第十九條中知事廳長ヲ「臺灣總督」ニ改ム

第四十條ヲ削ル

同日又臺灣總督府令第八十七號を以て左の如く明治三十三年臺灣總督府令第十八號が廢止せられた。

明治三十三年二月府令第十八號廢止ス

廢止せられた明治三十三年二月臺灣總督府令第十八號は公學校小學校及書房義塾の教員補修のため、師範學校に講習科を附設することに關する件である。

明治三十四年十二月十二日臺灣總督府令第百八號を以て左の如く臺灣公學校教員檢定及免許狀規則が定められた。即ち從來の公學校教諭檢定規則と公學校訓導檢定規則とを併合して一箇の規程としたのである。

臺灣公學校教員檢定及免許狀規則左ノ通相定ム

臺灣公學校教員檢定及免許狀規則

第一條 臺灣總督府ニ臺灣公學校教員檢定委員ヲ置ク

第二條 檢定ヲ教諭檢定訓導檢定ノ二トス

教諭檢定ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニ就キ之ヲ行フ

一 臺灣總督府國語學校師範部卒業生並同校講習科ヲ修了シタル者

二 尋常小學校本科正教員以上ノ免許狀ヲ有シ且臺灣土語ヲ習得シタル經歷アル者

三 滿五箇年以上臺灣公學校訓導ノ職ニ從事シ品行優良學術教授超衆ト認メ特ニ廳長ニ於テ具申シタル者

四 其ノ他學力經歷等特ニ適任ト認メタル者

訓導檢定ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニ就キ之ヲ行フ

一 臺灣總督府師範學校卒業生

二 其ノ他廳長ニ於テ適任ト認メ特ニ具申シタル者

第三條 前條檢定ニ就キ委員ニ於テ教育及臺灣土語ニ關シ必要ト認メタルトキハ試験ヲ行フコトヲ得

前條ノ外試験檢定ヲ行フコトアルヘシ

試験ノ科目及程度ハ教諭ニ在リテハ臺灣總督府國語學校師範部、訓導ニ在リテハ臺灣總督府師範學校ノ科目及程度ニ準據ス

第四條 檢定ヲ受ケントスル者ハ別記書式第一號乃至第三號ノ書面ニ戶籍吏ノ作リタル戶籍抄本若クハ廳長ノ證明

シタル戶籍調書ヲ添ヘ廳長ヲ經テ臺灣總督ニ願出スヘシ

廳長ハ前項ニ依リ願書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ付シ臺灣總督ニ具申スヘシ

臺灣總督府國語學校若クハ師範學校ヲ卒業シ又ハ國語學校講習科ヲ修了シタル際ニ於ケル者ノ檢定ハ第一項ノ手續ヲ要セス當該學校長ノ具申ニ依リ之ヲ行フ

第五條 檢定ニ合格シタル者ニハ別記書式第四號ノ免許狀ヲ授與スヘシ

第六條 免許狀ヲ授與シタルトキハ其ノ都度之ヲ公學校教員候補者名簿ニ登録シ且其ノ旨ヲ公示ス

第七條 免許狀ヲ有スル者其ノ氏名ヲ變更シ又ハ免許狀ヲ毀損亡失シタルトキハ其ノ書換若クハ再渡ヲ臺灣總督ニ

出願スルコトヲ得

第八條 免許狀ヲ有スル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ免許狀ハ其ノ效力ヲ失フ

一 禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

- 二 信用若クハ風俗ヲ害スルノ罪ヲ犯シテ罰金ノ刑ニ處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキ
 - 三 破産若クハ家資分散ノ宣告ヲ受ケタルトキ
- 免許狀ヲ有スル者不正ノ所爲其ノ他教員タルヘキ體面ヲ汚辱スルノ所爲アリテ其ノ情狀重シト認メタルトキハ臺灣總督ニ於テ免許狀ヲ褫奪ス

附則

第九條 此ノ規則ハ發布ノ日ヨリ施行ス

第十條 明治三十一年^{十二}府令第百一十一號明治三十二年^{十二}府令第百二十七號ハ此ノ規則施行ノ日ヨリ廢止ス

第十一條 此ノ規則發布前ニ授與シタル免許狀ハ其ノ有効期間仍其ノ效力ヲ有ス

(別記書式第一號乃至第四號) 略

舊農事試驗場に於ける講習生とは前に述べた所であるが、明治三十四年十一月臺灣總督府官制の改正に依り從來の試験場は臺灣總督府農事試験場となり、従前の如く臺北臺中臺南の三所に置かるることとなり、明治三十四年十二月二十日臺灣總督府告示第百四十一號を以て左の如く講習生規程が定められた。

臺灣總督府農事試驗場農事講習生規程左ノ通相定ム

臺灣總督府農事試驗場農事講習生規程

第一條 講習生ハ左ノ資格アル者ヨリ募集ス

一 田畑二甲以上ヲ有スル本島人若クハ其ノ子弟ニシテ普通ノ文字ヲ解スル者

二 滿十八歳以上ニシテ身體強健農事ノ勞働ニ堪ユル者

三 品行方正ナル者

四 家事ノ係果ナク一箇年間修業ノ見込アル者

第二條 講習生ハ農事ニ關スル簡易ノ學理並技藝ヲ講習スルモノトス

第三條 講習生ヲ志願スル者ハ別記書式ニ依リ管轄廳ヲ經由シテ出願スヘシ但シ身元保證人ハ丁年以上ノ男子ニシテ戸主ニ限ル

第四條 講習生ハ場内ニ寄宿セシム但シ食料被服文具等ハ一切自辨トス

第五條 講習生ハ授業ノ餘暇普通ノ勞役ニ從事セシムルモノトス但シ勞働賃錢ヲ給スルコトアルヘシ

第六條 講習生ノ修業期間ハ滿一箇年トス但シ時宜ニ依リ延長スルコトアルヘシ

第七條 修業滿期ニ至リ科程ヲ卒ヘタル者ニハ修業證書ヲ授與ス

第八條 左ノ各項ノ一ニ該當スル者ハ退場セシム

一 命令規則ニ悖戻シ屢訓誨スルモ改悛ノ見込ナキ者

二 素行修マラサル者

三 學藝不充分ニシテ定期修業ノ見込ナキ者

四 疾病又ハ創傷ニ因リ勞働ニ堪ユルコト能ハサルニ至リタル者

(別記書式) 略

明治三十五年一月二十五日勅令第七號を以て左の如く臺灣總督府職員官等俸給令別表中に改正が行はれた。

臺灣總督府職員官等俸給令別表中左ノ通改正ス

高等文官官等表中「一等郵便電信局長」ヲ「通信事務官」ニ改メ六等乃至八等ノ欄ニ左ノ一項ヲ加フ

通信事務官補 同 上 同 上

高等文官俸給表中一等郵便電信局長ノ一項ヲ削リ醫學校舎監ノ次三級乃至十四級ノ欄ニ左ノ二項ヲ加フ

通信事務官	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上
通信事務官補	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上	同	上

高等文官官等表及高等文官俸給表中電話交換局技師ノ一項ヲ削ル

明治三十五年三月五日臺灣總督府告示第二十六號を以て左の如く臺灣總督府農事試験場養蠶傳習生規程が定められた。

臺灣總督府農事試験場養蠶傳習生規程左ノ通相定ム

臺灣總督府農事試験場養蠶傳習生規程

第一條 傳習生ハ左ノ資格アル者ヨリ募集ス

一 實業ニ従事スル本島人若クハ其ノ家族

二 普通ノ文字ヲ解スル者但シ女子ハ此ノ限りニアラス

三 男子ハ滿十八歳以上女子ハ滿十五歳以上ニシテ身體強健品行方正ナル者

第二條 傳習生ノ男子ハ養蠶及桑園ノ栽培ニ關スル簡易ナル學理並技藝ヲ傳習シ女子ハ養蠶及製絲ニ關スル技藝ヲ傳習スルモノトス

第三條 傳習生ヲ志願スル者ハ別記書式ニ依リ管轄廳ヲ經由シテ出願スヘシ但シ身元保證人ハ丁年以上ノ男子ニシテ戸主ニ限ル

第四條 傳習生ハ男子ニ限り場内ニ寄宿セシム但シ食料被服文具等ハ一切自辨トス

第五條 傳習生ハ授業ノ餘暇官ノ業務ニ従事セシムルモノトス但シ相當ノ手當ヲ給スルコトアルヘシ

第六條 傳習生ノ修業期間ハ毎年三月一日ヨリ七月三十一日迄トス但シ時宜ニ依リ伸縮スルコトアルヘシ

第七條 傳習ヲ卒ヘタル者ニハ修業證書ヲ授與ス

第八條 左ノ各項ノ一ニ該當スルモノハ退場セシム

一 命令規則ニ悖戻シ屢訓誨スルモ改悛ノ見込ナキ者

二 素行修ラサル者

三 學藝不充分ニシテ定期修業ノ見込ナキ者

四 疾病又ハ創傷ニ因リ労働ニ堪ユルコト能ハサルニ至リタル者

(別記書式) 略

明治三十五年三月二十四日臺灣總督府告示第三十一號を以て左の如く臺北臺中兩師範學校が廢止せられた。

明治三十二年四月告示第三十九號臺灣總督府師範學校名稱位置中「臺北師範學校臺北臺中師範學校臺中」ヲ削ル

明治三十五年三月三十一日臺灣總督府告示第三十四號を以て左の如く臺灣總督府國語學校第二附屬學校(從前の第四附屬學校)が廢止せられ、中學科は國語學校に附設せらるることとなつた。

明治三十五年三月三十一日ヨリ明治三十一年八月告示第五十三號臺灣總督府國語學校及同附屬學校ノ名稱位置中左ノ通改正ス

「臺灣總督府國語學校第二附屬學校臺北」ヲ削ル

臺灣總督府國語學校第三附屬學校ヲ「臺灣總督府國語學校第二附屬學校」ニ改ム

明治三十五年四月一日臺灣總督府令第二十四號を以て左の如く臺灣小學校規則が定められた。

臺灣小學校規則左ノ通相定ム

臺灣小學校規則

第一章 總則

第一條 小學校ハ内地人ノ學齡兒童ヲ教育スル所トス

小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及國民教育ノ基礎並其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス

第二條 小學校ハ之ヲ分チテ尋常小學校及高等小學校トス

尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科トヲ一校ニ併置スルモノヲ尋常高等小學校トス

第二章 教科及編制

第一節 教科

第三條 尋常小學校ノ修業年限ハ四箇年トシ高等小學校ノ修業年限ハ二箇年又ハ四箇年トス

第四條 尋常小學校ノ教科目ハ修身國語算術唱歌體操トシ女兒ノ爲ニ裁縫ヲ加フ

第五條 高等小學校ノ教科目ハ修身國語算術日本歴史地理理科圖畫唱歌體操トシ女兒ノ爲ニ裁縫ヲ加フ

修業年限四箇年ノ高等小學校ニ於テハ英語ヲ加フルコトヲ得

第六條 小學校ノ教科目中兒童身體ノ狀況ニ依リ學習スルコト能ハサル教科目ハ之ヲ其ノ兒童ニ課セサルコトヲ得

第二節 教則

第七條 道德教育及國民教育ニ關聯セル事項ハ何レノ教科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授センコトヲ要ス

知識技能ハ常ニ生活ニ必須ナル事項ヲ選ヒテ之ヲ教授シ反覆練習シテ應用自在ナラシメンコトヲ務ムヘシ

兒童ノ身體ヲ健全ニ發達セシメンコトヲ期シ何レノ教科目ニ於テモ其ノ教授ハ兒童ノ心身發達ノ程度ニ副ハシメンコトヲ要ス

男女ノ特性及其ノ將來ノ生活ニ注意シテ各適當ノ教育ヲ施サンコトヲ務ムヘシ

各教科目ノ教授ハ其ノ目的及方法ヲ誤ルコトナク互ニ相聯絡シテ補益センコトヲ要ス

第八條 修身ハ教育ニ關スル勅諭ノ旨趣ニ基キテ兒童ノ徳性ヲ涵養シ道德ノ實踐ヲ指導スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初ハ孝悌親愛勤儉恭敬信義勇等ニ就キ實踐ニ適切ナル近易ノ事項ヲ授ケ漸ク進ミテハ國家

及社會ニ對スル義務ノ一斑ニ及ホシ以テ品位ヲ高メ志操ヲ固クシ且進取ノ氣象ヲ長シ公德ヲ尙ハシメ忠君愛國ノ志氣ヲ養ハンコトヲ務ムヘシ

高等小學校ニ於テハ前項ノ旨趣ヲ擴メテ一層陶冶ノ功ヲ堅實ナラシメンコトヲ務ムヘシ

女兒ニ在テハ特ニ貞淑ノ徳ヲ養ハンコトニ注意スヘシ

修身ヲ授クルニハ嘉言善行及諺辭等ニ基キテ勸戒シ常ニ之ヲ服膺セシメンコトヲ務ムヘシ

第九條 國語ハ普通ノ言語日常須知ノ文字及文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ表彰スルノ能ヲ養ヒ兼テ智徳ヲ啓發スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初ハ發音ヲ正シ假名ノ讀ミ方書キ方綴リ方ヲ知ラシメ漸ク進ミテハ日常須知ノ文字及近易ナル普通文ニ及ホシ又言語ヲ練習セシムヘシ

高等小學校ニ於テハ稍々進ミタル程度ニ於テ日常須知ノ文字及普通文ノ讀ミ方書キ方綴リ方ヲ授ケ又言語ヲ練習セシムヘシ

讀ミ方書キ方綴リ方ハ各其ノ主トスル所ニ依リ教授時間ヲ區別スルコトヲ得ルモ特ニ注意シテ相聯絡セシメンコトヲ要ス

文章ノ綴リ方ハ讀ミ方又ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項兒童ノ日常見聞セル事項及處世ニ必須ナル事項ヲ記述セシメ其ノ行文ハ平易ニシテ旨趣明瞭ナランコトヲ要ス

書キ方ニ用フル漢字ノ書體ハ楷書行書ノ二種トス

國語ヲ授ケル際ニハ常ニ其ノ意義ヲ明瞭ニシ且既修ノ文字ヲ以テ通常ノ人名地名等ニ應用セシメ單語短句短文ヲ

書取ラシメ若ハ改作セシメ假名及語句ノ用法ニ習熟セシメンコトヲ務ムヘシ

他ノ教科目ヲ授ケル際ニ於テモ常ニ言語ノ練習ニ注意シ又文字ヲ書カシムルトキハ其ノ字形及字行ヲ正シクセシメンコトヲ要ス

第十條 算術ハ日常ノ計算ニ習熟セシメ生活上必須ナル知識ヲ與ヘ兼テ思考ヲ精確ナラシムルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初ハ十以下ノ數ノ範圍内ニ於ケル數ヘ方書キ方及加減乗除ヲ授ケ漸ク其ノ範圍ヲ擴メテ百以下ノ數ニ及ホシ更ニ進ミテ通常ノ加減乗除並小數ノ呼ヒ方書キ方及簡易ナル加減ヲ授ケ漸次本邦度量衡貨幣及時ノ制ノ大要ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ初ハ尋常小學校ニ於テ授ケタル事項ヲ擴メテ學習セシメ漸ク進ミテハ簡易ナル小數分數及比例ヲ授ケ更ニ稍々複雑ナル比例及日常適切ノ百分算簡易ナル求積ニ及ホスヘシ

算術ハ主トシテ筆算ヲ用ヒ珠算ハ尋常小學校ニ在リテハ加減ノ二法ニ止メ高等小學校ニ至リ更ニ乗除ニ及ホスヘシ

算術ヲ授ケルニハ理會ヲ精確ニシ運算ニ習熟シテ應用自在ナラシメンコトヲ務メ又運算ノ方法及理由ヲ正確ニ説明セシメ且暗算ニ習熟セシメンコトヲ要ス

算術ノ問題ハ他ノ教科目ニ於テ授ケタル事項及土地ノ情況ヲ斟酌シテ日常適切ナルモノヲ選フヘシ

第十一條 日本歴史ハ國體ノ大要ヲ知ラシメ兼テ國民タルノ志操ヲ養フヲ以テ要旨トス

日本歴史ハ建國ノ體制皇統ノ無窮歷代天皇ノ盛業忠良賢哲ノ事蹟國民ノ武勇文化ノ由來外國トノ關係等ノ大要ヲ授ケ以テ國初ヨリ現時ニ至ルマテノ事歴ヲ知ラシムヘシ

日本歴史ヲ授クルニハ成ルヘク圖畫地圖標本等ヲ示シ兒童ヲシテ當時ノ實狀ヲ想像シ易カラシメ特ニ修身ノ教授事項ト聯絡セシメノコトヲ要ス

第十二條 地理ハ地球ノ表面及人類生活ノ狀態ニ關スル知識ノ一斑ヲ得セシメ又本邦國勢ノ大要ヲ理會セシメ兼テ愛國心ノ養成ニ資スルヲ以テ要旨トス

地理ハ本邦ノ地勢氣候區劃都會產物交通等並地球ノ形狀運動等ノ大要ヲ理會セシメ更ニ各大洲ノ地勢氣候區劃交通等ノ概略ヨリ進ミテ本邦トノ關係ニ於テ重要ナル諸國ノ都會產物等ヲ知ラシメ且本邦ノ政治經濟上ノ狀態並外國ニ對スル地位等ノ大要ヲ授クヘシ地理ヲ授クルニハ成ルヘク實地ノ觀察ニ基キ又地球儀地圖標本寫眞等ヲ示シテ確實ナル知識ヲ得セシメ特ニ歴史及理科ノ教授事項ト聯絡セシメンコトヲ要ス

第十三條 理科ハ通常ノ天然物及自然ノ現象ニ關スル知識ノ一斑ヲ得セシメ其ノ相互及人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシメ兼テ觀察ヲ精密ニシ自然ヲ愛スルノ心ヲ養フヲ以テ要旨トス

理科ハ植物動物礦物及自然ノ現象ニ就キ主トシテ兒童ノ目撃シ得ル事項ヲ授ケ殊ニ重要ナル植物動物ノ名稱形狀效用及發育ノ大要ヲ知ラシメ更ニ通常ノ物理化學上ノ現象重要ナル元素及化合物簡易ナル器械ノ構造作用人身ノ生理衛生ノ大要ヲ授ケ兼テ植物動物礦物ノ相互人生ニ對スル關係ノ大要ヲ理會セシムヘシ

理科ニ於テハ務メテ農事水産工業家事等ニ適切ナル事項ヲ授ケ特ニ植物動物等ニ就キ教授スル際ニハ之ヲ以テ製スル重要ナル加工品ノ製法效用等ノ概略ヲ知ラシムヘシ

理科ヲ授クルニハ成ルヘク實地ノ觀察ニ基キ若ハ標本模型圖畫等ヲ示シ又簡單ナル實驗ヲ施シ明瞭ニ理會セシメンコトヲ要ス

第十四條 圖畫ハ通常ノ形體ヲ看取シ正シク之ヲ畫クノ能ヲ得セシメ兼テ美感ヲ養フヲ以テ要旨トス

圖畫ハ毛筆畫トシ之ヲ授クルニハ先ツ單形ヨリ始メ漸ク簡單ナル形體ニ及ホシ時々直線曲線ニ基キタル諸形ヲ工夫シテ之ヲ畫カシメ進ミテハ實物若ハ手本ニ就キ又ハ時々自己ノ工夫ヲ以テ畫カシメ更ニ簡易ナル幾何畫ニ及ホスヘシ

圖畫ヲ授クルニハ成ルヘク他ノ教科目ニ於テ授ケタル物體及兒童ノ日常目撃セル物體中ニ就キテ之ヲ畫カシメ兼テ清潔ヲ好ミ綿密ヲ尙フノ習慣ヲ養ハントニ注意スヘシ

第十五條 唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱フコトヲ得セシメ兼テ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ譜表ヲ用フルコトナク平易ナル單音唱歌ヲ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ初ハ前項ニ準シ漸ク譜表ヲ用ヒテ單音唱歌ヲ授クヘシ

歌詞及樂譜ハ平易雅正ニシテ兒童ノ心情ヲ快活純美ナラシムルモノタルヘシ

第十六條 體操ハ身體ノ各部ヲ均齊ニ發育セシメ四肢ノ動作ヲ機敏ナラシメ以テ全身ノ健康ヲ保護増進シ精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守リ協同ヲ尙フノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ初ハ適宜ニ遊戲ヲ爲サシメ漸ク普通體操ヲ加ヘ授クヘシ

高等小學校ニ於テハ普通體操ヲ授ケ又遊戲ヲ爲サシメ男兒ニハ兵式體操ヲ加ヘ授クヘシ

土地ノ情況ニ依リ體操ノ教授時間ノ一部若ハ教授時間ノ外ニ於テ適宜ノ戶外運動ヲ爲サシムルコトアルヘシ

體操ノ教授ニ依リテ習成シタル姿勢ハ常ニ之ヲ保クシメンコトヲ務ムヘシ

第十七條 裁縫ハ通常ノ衣類ノ縫ヒ方及裁チ方等ニ習熟セシメ兼テ節約利用ノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス

尋常小學校ニ於テハ運針法ヨリ始メ漸ク簡易ナル衣類ノ縫ヒ方ヲ授ケ又便宜通常ノ衣類ノ繕ヒ方等ヲ授クヘシ
高等小學校ニ於テハ初ハ前項ニ準シ漸ク其ノ程度ヲ進メ通常ノ衣類ノ縫ヒ方裁チ方繕ヒ方ヲ授クヘシ
裁縫ハ其ノ材料ヲ日常所用ノモノニ取り之ヲ授クル際用具ノ使用方材料ノ品類性質及衣類ノ保存方洗濯方等ヲ教
示スヘシ

第十八條 英語ハ簡易ナル會話ヲ爲シ又近易ナル文章ヲ理會スルヲ得セシメ處世ニ資スルヲ以テ要旨トス

英語ハ發音ヨリ始メ進ミテ單語短句及近易ナル文章ノ讀ミ方書キ方綴リ方並話シ方ヲ授クヘシ

英語ノ文章ハ純正ナルモノヲ選ヒ其ノ事項ハ兒童ノ知識ノ程度ニ伴ヒ趣味ニ富ムモノタルヘシ

英語ヲ授クルニハ常ニ實用ヲ主トシ又發音ニ注意シ正シキ國語ヲ以テ譯解セシメンコトヲ務ムヘシ

第十九條 小學校ニ於テ教授ニ用フル假名及其ノ字體ハ第一號表ニ字音假名違ハ第二號表下欄ニ依リ又漢字ハ成ル
ヘク其ノ數ヲ節減シテ應用廣キモノヲ選フヘシ

尋常小學校ニ於テ教授ニ用フル漢字ハ成ルヘク第三號表ニ掲クル文字ノ範圍内ニ於テ之ヲ選フヘシ

第二十條 尋常小學校各學年ノ教授ノ程度及毎週教授時數ハ第四號表ニ高等小學校各學年ノ教授ノ程度及毎週教授
時數ハ第五號表第六號表ニ依ルヘシ

第二十一條 小學校教科用圖書ハ第七號表ニ依ルヘシ

第二十二條 小學校教科用圖書各學年ノ配當ハ第八號表第九號表ニ依ルヘシ

第二十三條 學校長ハ夏季休業日ノ前六週間後三週間以内ニ於テ毎週ノ教授時數十時以内ヲ減スルコトヲ得
前項ノ規定ニ依リ教授時數ヲ減スルトキハ學校長ニ於テ便宜各教科目ノ毎週教授時數ヲ斟酌スヘシ

第二十四條 尋常小學校若ハ高等小學校ニ於テ數學年ノ兒童ヲ一學級ニ編制スルトキハ各學年ノ程度ニ拘ラス全部
又ハ一部ノ兒童ヲ同一ノ程度ニ依リ教授スルコトヲ得

第二十五條 學校長ハ其ノ小學校ニ於テ教授スヘキ各教科目ノ教授細目ヲ定ムヘシ

第二十六條 教員ハ毎週教授シタル各教科目ノ教授週録ヲ製シ學校長ノ檢閲ヲ經ヘシ

第二十七條 小學校ニ於テ各學年ノ課程ノ修了若ハ全教科ノ卒業ヲ認ムルニハ別ニ試験ヲ用フルコトナク兒童平素
ノ成績ヲ考查シテ之ヲ定ムヘシ

第二十八條 學校長ハ修業年限ノ終ニ於テ尋常小學校若ハ高等小學校ノ教科ヲ修了セリト認メタル者ニハ別記第一
號書式ノ卒業證書ヲ授與スヘシ

第二十九條 學校長ハ學年末ニ於テ各學年ノ課程ヲ修了セリト認メタル者ニハ別記第二號書式ノ修業證書ヲ授與ス
ヘシ

學校長ハ學年末ニ於テ第二十四條ノ規定ニ依リ教授シタル者其ノ學級ニ該當スル學年ノ課程ヲ修了セリト認メタ
ル者ニハ別記第三號書式ノ修業證書ヲ授與スヘシ

第三十條 學校長ハ學年末ニ於テ第二十四條ノ規定ニ依リ一學年間學習セシ者ニハ別記第四號書式ノ學習證書ヲ授
與スヘシ

第三節 學年、休業日及式日

第三十一條 小學校ノ學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第三十二條 小學校ノ學期ハ分チテ左ノ三學期トス

第一學期 四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

第二學期 九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル

第三學期 一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル

第三十三條 毎日ノ教授終始ノ時刻ハ左ノ如シ

四月一日ヨリ五月十日マテ 午前八時始業午後二時終業

五月十一日ヨリ九月二十日マテ 午前七時始業正午終業

九月二十一日ヨリ十月三十一日マテ 午前八時始業午後二時終業

十一月一日ヨリ翌年三月三十一日マテ 午前九時始業午後三時終業

第三十四條 小學校ノ休業日ハ左ノ如シ

一 祝日、大祭日

二 臺灣神社祭日

三 始政記念日

四 日曜日

五 夏季休業日 七月十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル

六 冬季休業日 十二月二十六日ヨリ翌年一月七日ニ至ル

七 學年末休業日 三月二十六日ヨリ同三十一日ニ至ル

第三十五條 前條ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ其ノ事由ヲ具シ廳長ノ認可ヲ受クヘシ

天災事變其ノ他急迫ノ場合ニシテ認可ヲ受クル暇ナキトキハ學校長ニ於テ施行ノ後直ニ廳長ニ届出ツヘシ

第三十六條 紀元節、天長節、一月一日及始政記念日ニ於テハ職員及兒童學校ニ參集シテ儀式ヲ行フヘシ

儀式ノ要項左ノ如シ

一 職員及兒童「君が代」ヲ合唱ス

二 職員及兒童ハ

天皇陛下

皇后陛下ノ御影ニ對シ奉リ最敬禮ヲ行フ

三 學校長ハ教育ニ關スル勅語ヲ奉讀ス

四 學校長ハ教育ニ關スル勅語ニ基キ聖旨ノ在所ヲ誨告ス

五 職員及兒童ハ其ノ祝日ニ相當スル唱歌ヲ合唱ス

御影ヲ拜戴セサル小學校ニ於テハ前項第二號ノ式ヲ闕ク

第四節 編制

第三十七條 尋常小學校ニ於テハ全校兒童ノ數七十人未滿ナルトキハ一學級ニ編制シ七十人以上ナルトキハ七十人

マテヲ増ス毎ニ一學級ヲ増スヘシ但一學級ノ兒童數ハ八十人ヲ超ユルコトヲ得ス

第三十八條 高等小學校ニ於テハ全校兒童ノ數六十人未滿ナルトキハ一學級ニ編制シ六十人以上ナルトキハ六十人

マテヲ増ス毎ニ一學級ヲ増スヘシ但シ一學級ノ兒童數ハ七十人ヲ超ユルコトヲ得ス

第三十九條 尋常小學校ニ於テ同一學年ノ女兒ノ數一學級ヲ編制スルニ足ルトキハ男女ニ依リ該學年ノ學級ヲ分ツ

ヘシ

第一學年及第二學年ニ在リテハ前項ノ規定ニ依ラサルコトヲ得

高等小學校ニ於テ全校女兒ノ數一學級ヲ編制スルニ足ルトキハ男女ニ依リ學級ヲ別ツヘシ

第四十條 修身體操唱歌裁縫ハ數學級ノ全部又ハ一部ノ兒童ヲ合シテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得

第四十一條 一學級毎ニ本科正教員一人ヲ置ク但シ本科正教員ノ半數以內ハ本科准教員ヲ以テ代用スルコトアルヘシ

學校長ノ擔任スル教授ヲ補助スル爲五學級以上ノ學校ニ於テハ前項ノ外本科正教員一人四學級以下ノ學校ニ於テハ本科准教員一人ヲ置クコトアルヘシ

前項ニ依リ置クヘキ本科准教員ヲ得難キトキハ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ之ニ代用スルコトアルヘシ

第四十二條 小學校ニ於テハ適宜專科教員ヲ置クコトアルヘシ

第四十三條 教室狹隘其ノ他特別ノ事情アルカ爲本節ノ規定ニ依リ難キトキハ臺灣總督ノ認可ヲ受クヘシ

第三章 就學

第四十四條 兒童滿六歳ニ達シタル翌月ヨリ滿十四歳ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

第四十五條 學年開始マテニ學齡ニ達セサル兒童ハ其學年中ニハ之ヲ小學校ニ入學セシムルコトヲ得ス

第四十六條 學校長ハ第十號表ノ様式ニ依リ學年ノ始ニ於テ入學シタル兒童ノ學籍簿ヲ編製スヘシ

學籍簿ハ入學ノ兒童ニ異動ヲ生シタルトキハ遲滞ナク之ヲ加除訂正スヘシ

第四十七條 學校長ニ於テ入學又ハ退學ヲ許シタルトキハ其ノ兒童ノ氏名ヲ廳長ニ報告スヘシ但シ退學者ニ關シテ

ハ其ノ事由ヲ報告スヘシ

第四十八條 學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル者アルトキハ廳長ノ認可ヲ經テ退學ヲ命スルコトヲ得

一 性行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

二 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者

三 引續キ六箇月以上關席シタル者

四 正當ノ事由ナクシテ一箇月以上關席シタル者

第四十九條 學校長ハ每學年ノ終ニ卒業シタル兒童ノ氏名ヲ廳長ニ報告スヘシ

第五十條 學校長ハ傳染病ニ罹リ若ハ其ノ虞アル兒童又ハ性行不良ニシテ他ノ兒童ノ教育ニ妨害アリト認メタル兒

童ノ學校ニ出席スルヲ停止スルコトヲ得

學校長ハ前項ノ處分ヲ爲シタルトキハ廳長ニ報告スヘシ

第五十一條 學校長ハ第十一號表ノ様式ニ依リ在學兒童出席簿ヲ作り其ノ出席關席ヲ明ニスヘシ

第五十二條 學校長ハ第十二號表ノ様式ニ依リ毎月末在學兒童ノ出席關席表ヲ調製シ翌月五日限り臺灣總督ニ報告

スヘシ

第四章 教員

第五十三條 小學校ノ教科ヲ教授スル者ヲ本科正教員トシ其ノ教科目中ノ一科目若ハ數科目ヲ限り教授スル者ヲ專

科正教員トス

正教員ヲ補助スル者ヲ准教員トス